

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

VII

1987 年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1994.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 VII

1994.3

瓜破遺跡

1986年に発見された7世紀前半の官衙的な建物群の北東部を調査した。中心建物を囲む欄の北辺の長さが35mであることが判明した。また、中心建物の区画の北側にも付属するような欄立柱建物があることも判明した。

長原遺跡

縄文時代晩期の長原式土器は大半が生駒西麓産の粘土であるが、15%前後は非河内産の粘土であった。

弥生時代前期～中期には高い土地に水路が配されていた。周囲に広がる水田の灌漑用の水路であろう。

古墳は本年度7基見つかった。このうちの1基(176号)からは有黒度の埴輪が出土し、家・盾・衣蓋・繡付埴輪などもある。長原古墳群の造営の開始期を考える資料となる。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

VII

1987年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1994.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅶ 正誤表

頁	行	誤	正
2	図1の縮尺率	1 : <u>1500</u>	1 : 15000
5	図3のスケール	<u>100m</u>	50m
5	図3の縮尺率	1 : <u>4000</u>	1 : 2000
23	12	ていねいにナデ <u>で</u> いる。	ていねいにナデ <u>て</u> いる。
67	図74左下断面図水準値	<u>10.0</u> (上段) 10.0 (下段)	10.5 (上段) 10.0 (下段)
72	図79最下段断面図写植	SD <u>702</u>	SD703

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

VII

1987年度大阪市長吉瓜破地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

1994.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は瓜破遺跡東南部と長原遺跡東南部を中心とする「長吉瓜破土地区画整理事業」に伴う1987年度の発掘調査の報告書である。

本年度の調査では、縄文時代晩期の土器、弥生時代前～中期に周囲の田へ水を運んだ2本の水路、7基の古墳、飛鳥時代の官衙の一隅、中世の集落の一部など、当地の変遷を具体的に復元するための多くの材料を得ることができた。採集経済の末期から農耕社会へ、そして、国家体制への過渡期である古墳時代の長原のようす、文字を備え名実ともに国家の段階に入り、地域支配の拠点としての官衙が瓜破におかれること。原始社会から国家にいたる変遷・発展過程についての叙述が、本年度の発掘成果の事実をもって、それなりに成し得るであろう。

区画整理事業に伴う発掘調査は、ひとつひとつはか細い線である。この細い線が結び付き、網の目に拡がり、情報という血が行き交うことによって、歴史を復元していくための活きた太い脈となる。

過去の事実が未来を考えていくための重要な材料であるなら、土の中から先人の残した事実を捜し出す我々の役割は計り知れなく大きいといえる。

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 佐治 敬三

例 言

- 一、本書は大阪市都市整備局長吉瓜破区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における、1987年度土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長水島輝臣氏の指揮のもと、調査課木原克司（現鳴門教育大学助教授）・黒田慶一・伊藤純・櫻井久之・嘱託調査員内田好昭（現京都市埋蔵文化財研究所）が行った。各調査の担当者・面積・期間などは、第Ⅰ章第1節の一覧表（表1）に記した。
- 一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市都市整備局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。
- 一、各報告の文責については文末に明記した。
- 一、遺構写真は担当調査員が撮影し、遺物写真撮影は徳永岡治氏に委託した。
- 一、地層名は『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲの第Ⅱ章に記した長原遺跡標準層序に対比したもので、長原〇層・・・と表記する。
- 一、遺構名の表記は、掘立柱建物（SB）・竪穴住居（SB）・井戸（SE）・ピット（SP）・土塼（SK）・溝（SD）・構（SA）の記号の後に、本書独自に各調査地区ごとの通し番号を付し、層位的に調査ができた長原遺跡中央地区・東南地区では大まかな時期区分ができるよう標準層序ごとに、長原6層の遺構にはSB6〇〇、長原4層の遺構にはSB4〇〇のように表記した。ただし、古墳に関しては『長原遺跡発掘調査報』Ⅱで決定し、その後改訂した番号を用いている。
- 一、調査時の測量は大阪市都市整備局設置の基準点・水準点を用い、国土平面直角座標（第Ⅵ系）の値に換算した。水準値はT.P.値（東京湾平均海面値）を用いた（本文中ではTP±と略称）。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、写真などの資料は当協会が保管している。

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 長原・瓜破遺跡の発掘調査	1
第1節 1987年度の発掘調査と整理作業・報告書の作製	1
1) 発掘調査	1
2) 報告書の作製	2
第2節 調査の経過と概要	3
1) 瓜破遺跡東南地区	3
2) 長原遺跡中央地区	4
3) 長原遺跡東南地区南半	5
4) 長原遺跡東南地区北半	7
第Ⅱ章 調査の結果	9
第1節 瓜破遺跡東南地区の調査	9
1) はじめに	9
2) 調査地の層序	9
3) 飛鳥時代の遺構と遺物	12
i) 掘立柱建物	12
ii) 溝	16
iii) 土壇	17
iv) 溝	20
4) 小結	22
第2節 長原遺跡中央地区の調査	23
1) 調査地の層序	23
2) 古墳時代の遺構と遺物	25
i) 掘立柱建物	25
ii) 溝	26
iii) 土壇	27
3) 飛鳥～奈良時代の遺構	28
i) 水田	28
4) 平安～鎌倉時代の遺構と遺物	28
i) 土壇	28
ii) 溝	28
5) 小結	28
第3節 長原遺跡東南地区南半の調査	29
1) 調査地の層序	29
2) 各層出土の遺物	33
3) 縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構と遺物	38
i) 園析谷	38
ii) 水路	39
iii) 水田	40
iv) 不明遺構	41

4) 古墳時代の遺構と遺物	41
i) 古墳	41
ii) 溝	51
5) 奈良時代の遺構と遺物	52
長原 6B 層の時期	
i) 掘立柱建物	52
ii) 溝	52
長原 6A 層の時期	
i) 掘立柱建物	54
ii) 井戸	54
iii) 土塼	56
iv) 溝	57
6) 平安～鎌倉時代の遺構と遺物	63
i) 掘立柱建物	63
ii) 溝	64
iii) 土塼	66
iv) 溝	67
v) その他	68
7) 小結	68
第 4 節 長原遺跡東南地区北半の調査	70
1) 調査地の層序	70
2) 各層出土の遺物	71
3) 長原 6 層中から出土したウマの骨	74
4) 古墳時代の遺構と遺物	78
i) 古墳	78
ii) 溝	79
iii) 溝	86
iv) 土塼	86
5) 飛鳥～奈良時代の遺構と遺物	89
長原 7 層の時期	
i) 水田	89
長原 6 層の時期	
i) 溝	90
ii) 水田	92
6) 平安時代の遺構と遺物	94
i) 掘立柱建物	94
ii) 土塼	95
iii) 溝	98
7) 鎌倉時代の遺構と遺物	99
i) 掘立柱建物	100
ii) 溝	103
iii) 井戸	103
iv) 土塼	104
v) 溝	106
8) 小結	107
第Ⅲ章 まとめ	109
1) 長原式土器の胎土について	109
2) 弥生時代前～中期の水路と水田	109
3) 長原古墳群のはじまりと画期	110
付 1984 年度調査瓜破遺跡東南地区井戸 SE01 出土遺物 (追加報告)	113
別 表	123
引用・参考文献	132
あとがき・索引	

図 版 目 次

- 1 瓜破遺跡東南地区 飛鳥時代の遺構
I区南半(南から)
- 2 瓜破遺跡東南地区 飛鳥時代の遺構
上左: I区SB01(北から)
上右: I区SB02(北から)
下: I区南半(北から)
- 3 瓜破遺跡東南地区 飛鳥時代の遺構
上: II区SD04
下: II区SD03・SB03(西から)
- 4 長原遺跡中央地区 各時代の遺構
上左: 長原6層水田畦畔(西から)
上右: 長原7層水田畦畔(西から)
下左: 地山上面の遺構(西から)
下右: 地山上面の遺構(東から)
- 5 長原遺跡東南地区南半 開析谷
上: 開析谷と長原9層水田畦畔(南から)
下: 水田畦畔東壁断面
- 6 長原遺跡東南地区南半 弥生時代の水路
上: IV区SD802(南から)
下: IV区SD802(東から)
- 7 長原遺跡東南地区南半 弥生時代の水路
上: V区SD802北壁断面
下: V区SD801・802(西から)
- 8 長原遺跡東南地区南半 弥生時代の遺構
上: I区不明遺構検出状態(南から)
下: I区不明遺構(南から)
- 9 長原遺跡東南地区南半 171号墳
上: 墳丘部分(東から)
下: 全景(北から)
- 10 長原遺跡東南地区南半 172号墳・溝
上: 全景(西から)
下: VII区SD701・702(西から)
- 11 長原遺跡東南地区南半 173号墳
上: 検出状態(南から)
下: 全景(西から)
- 12 長原遺跡東南地区南半 175号墳
上: 東側周溝土器(133・134)出土状態
下: 全景(西から)
- 13 長原遺跡東南地区南半 176号墳
上: 全景(西から)
下: 東側周溝検出出土状態(西から)
- 14 長原遺跡東南地区南半 奈良時代の建物
上: III区SB601(北から)
下: III区SB602(南から)
- 15 長原遺跡東南地区南半 奈良時代の遺構
III区SB603・SD603~606(北から)
- 16 長原遺跡東南地区南半 奈良時代の井戸
上: 検出状態
下: 断面(南から)
- 17 長原遺跡東南地区南半 奈良時代の溝
上: IV区SD610北壁断面
下: IV区SD610(東から)
- 18 長原遺跡東南地区南半 平安~鎌倉時代の遺構
上左: III区SA401(南から)
上右: SB401・SK402(北から)
下左: II区SB401(南から)
下右: II区SD402(西から)
- 19 長原遺跡東南地区北半 古墳時代の遺構
上左: I区SD703(南西から)
上右: I区SD703(北から)
下: I区SA701(南から)
- 20 長原遺跡東南地区北半 古墳時代の遺構
上左: II区SD703(東から)
上右: II区SD703(西から)
下: II区SD703(南から)
- 21 長原遺跡東南地区北半 飛鳥時代の水田
上左: IV区畦畔(西から)
上右: IV区畦畔(東から)
下左: V区畦畔(西から)
下右: VI区畦畔(南から)

- 22 長原遺跡東南地区北半 奈良時代の水田
上：Ⅰ区SD601堤状盛土東壁断面
下：Ⅰ区畦畔（南から）
- 23 長原遺跡東南地区北半 奈良時代の水田
上：Ⅱ区畦畔（西から）
下：Ⅳ区畦畔（東から）
- 24 長原遺跡東南地区北半 ウマの骨出土状態
上：Ⅴ区長原6層中
下：Ⅴ区長原6層中
- 25 長原遺跡東南地区北半 鎌倉時代の遺構
上左：Ⅰ区SB402・403・SD407（北から）
上右：Ⅰ区SE401・SD410（南から）
下：Ⅰ区SE401・SD410（北から）
- 26 瓜破遺跡東南地区 遺構出土の遺物
- 27 瓜破遺跡東南地区 遺構出土の遺物
- 28 瓜破遺跡東南地区 遺構出土の遺物
- 29 長原遺跡中央地区
および東南地区南半出土の遺物
- 30 長原遺跡東南地区南半
開析谷出土の長原式土器（1）
- 31 長原遺跡東南地区南半
開析谷出土の長原式土器（2）
- 32 長原遺跡東南地区南半
開析谷出土の長原式土器（3）
- 33 長原遺跡東南地区南半 171号墳出土の遺物
- 34 長原遺跡東南地区南半 古墳および遺構出土の遺物
- 35 長原遺跡東南地区南半 古墳出土の遺物
- 36 長原遺跡東南地区南半 176号墳出土の埴輪（1）
- 37 長原遺跡東南地区南半 176号墳出土の埴輪（2）
- 38 長原遺跡東南地区南半 176号墳出土の埴輪（3）
- 39 長原遺跡東南地区南半 遺構出土の遺物
- 40 長原遺跡東南地区南半 遺構出土の遺物
- 41 長原遺跡東南地区南半 遺構出土の遺物
- 42 長原遺跡東南地区南半 遺構出土の遺物
- 43 長原遺跡東南地区北半 各層出土の遺物
- 44 長原遺跡東南地区北半
177号墳および遺構出土の遺物
- 45 長原遺跡東南地区北半 遺構出土の遺物
- 46 長原遺跡東南地区北半 遺構出土の遺物
- 47 長原遺跡東南地区北半 遺構出土の遺物
- 48 長原遺跡東南地区北半 遺構出土の遺物
- 49 長原遺跡東南地区北半 遺構出土の遺物
- 50 長原遺跡東南地区北半 遺構出土の遺物
- 51 長原遺跡東南地区北半 遺構出土の遺物
- 52 長原遺跡東南地区出土のウマの骨
- 53 瓜破遺跡東南地区 井戸出土の土師器（1）
- 54 瓜破遺跡東南地区 井戸出土の土師器（2）

挿 図 目 次

- 図 1 区画整理事業施行範囲と調査地……………2
- 図 2 瓜破遺跡東南地区調査地位置図……………3
- 図 3 長原遺跡中央地区調査地位置図……………5
- 図 4 長原遺跡東南地区南半調査地位置図……………6
- 図 5 長原遺跡東南地区北半調査地位置図……………8
- 図 6 Ⅰ・Ⅱ区位置図……………9
- 図 7 Ⅰ区中央部東壁土層図……………9
- 図 8 飛鳥時代遺構配置図……………10
- 図 9 Ⅰ区中央部遺構配置図……………11
- 図 10 SB01実測図……………12
- 図 11 SB02および出土遺物実測図……………12
- 図 12 Ⅰ区南半遺構配置図……………13
- 図 13 SB03実測図……………14
- 図 14 SB04実測図……………14
- 図 15 SB05実測図……………15
- 図 16 SA01および出土遺物実測図……………15
- 図 17 UR91-22次調査地……………16
- 図 18 SK01出土遺物実測図……………17
- 図 19 出土遺物実測図……………18
- 図 20 SD04および出土遺物実測図……………20

図21	SD05実測図	21	図59	SB602および出土遺物実測図	55
図22	生駒西麓産奄実測図	21	図60	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区遺構配置図	56
図23	調査地位位置図	23	図61	SB603・SD603実測図	57
図24	北壁土層図および遺構実測図	24	図62	Ⅳ区SE601実測図	58
図25	長原6・7層出土遺物実測図	25	図63	SE601・SK601出土遺物実測図	59
図26	出土遺物実測図	25	図64	土師器壺173内面拓影(1/2)	59
図27	古墳時代遺構配置図	26	図65	Ⅲ区SD602出土遺物実測図	60
図28	長原6層畦畔配置図	27	図66	Ⅲ区SD605出土遺物実測図	61
図29	長原道跡東南地区南半調査地位位置図	29	図67	I区SD608および出土遺物実測図	61
図30	南北方向(I・Ⅱ・Ⅲ区西壁)土層図	30	図68	Ⅳ区SD610・611および出土遺物実測図	62
図31	東西方向(Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ区北壁)土層図	31	図69	V区SD609・610実測図	63
図32	長原3・4層出土遺物実測図	32	図70	Ⅳ区SD609・610実測図	64
図33	長原7層出土遺物実測図	33	図71	SD609・610出土遺物実測図	64
図34	長原9層出土遺物実測図	33	図72	長原道跡東南地区南半 平安～鎌倉時代遺構配置図	65
図35	長原道跡東南地区南半 縄文時代晩期～弥生時代中期遺構配置図	34	図73	Ⅱ・Ⅲ区遺構配置図	66
図36	Ⅵ区北壁調査断面図	35	図74	SB401・SA401実測図	67
図37	Ⅳ区開析谷出土長原式土器実測図(1)	36	図75	SK402・SD401・402実測図	68
図38	Ⅳ区開析谷出土長原式土器実測図(2)	37	図76	各遺構出土遺物実測図	69
図39	Ⅳ区開析谷出土長原式土器実測図(3)	38	図77	長原道跡東南地区北半調査地位位置図	70
図40	Ⅳ区SD801・802実測図	39	図78	南北方向(I・Ⅵ区西壁)土層図	71
図41	Ⅱ区長原9層畦畔実測図	40	図79	東西方向(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区北壁)土層図	72
図42	I区長原9層上面検出遺構実測図	41	図80	長原2～7層出土遺物実測図	73
図43	長原道跡東南地区南半古墳時代遺構配置図	42	図81	長原道跡東南地区北半古墳時代遺構配置図	75
図44	171号墳実測図	43	図82	177号墳および出土遺物実測図	76
図45	171号墳出土遺物実測図	44	図83	I区SD701実測図	77
図46	172号墳実測図	44	図84	Ⅳ区SD701実測図	78
図47	172号墳周辺出土遺物実測図	45	図85	Ⅳ区SD702実測図	79
図48	173号墳実測図	46	図86	I区SD703・SA701および出土遺物実測図	80
図49	173・174号墳出土遺物実測図	46	図87	Ⅱ区SD703および出土遺物実測図	81
図50	175号墳実測図	47	図88	Ⅲ区遺構および出土遺物実測図	82
図51	175号墳出土遺物実測図	48	図89	長原道跡東南地区北半飛鳥時代遺構配置図	83
図52	176号墳実測図	48	図90	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区長原7層水田 およびⅢ区畦畔出土遺物実測図	84
図53	176号墳出土埴輪実測図(1)	49	図91	Ⅵ区長原7層水田実測図	86
図54	176号墳出土埴輪実測図(2)	50	図92	長原東南地区北半奈良時代遺構配置図	87
図55	Ⅵ区SD701～703実測図	51	図93	I・Ⅲ区遺構配置図	88
図56	長原道跡東南地区南半奈良時代遺構配置図	53	図94	Ⅲ区SD601実測図	88
図57	Ⅲ区SB601・602配置図	54	図95	I区SD601および出土遺物実測図	89
図58	SB601・SD601実測図	54			

図96	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区長原6層水田実測図	90	図109	Ⅰ区出土遺物実測図(2)	102
図97	Ⅵ区長原6層水田実測図	92	図110	Ⅰ区出土遺物実測図(3)	103
図98	長原遺跡東南地区北半 平安～鎌倉時代遺構配置図	93	図111	Ⅲ区出土遺物実測図	103
図99	Ⅴ区SB401実測図	94	図112	Ⅳ区遺構配置図および出土遺物実測図	104
図100	Ⅴ区遺構配置図	94	図113	古墳時代方形区画	107
図101	Ⅵ区SD402実測図	95	図114	長原遺跡東南地区南半の 縄文時代晩期～弥生時代中期古地図	109
図102	Ⅴ区出土遺物実測図	95	図115	黒斑をもつ古墳分布図	110
図103	Ⅵ区SD402出土遺物実測図	96	図116	SE01出土土師器(1)	114
図104	Ⅰ・Ⅲ区遺構配置図	97	図117	SE01出土土師器(2)	115
図105	Ⅰ区SB402・403実測図	98	図118	SE01出土土師器(3)	116
図106	Ⅰ区SB404～406実測図	99	図119	SE01出土須恵器(1)	117
図107	Ⅰ区SE401・SD410実測図	100	図120	SE01出土須恵器(2)	118
図108	Ⅰ区出土遺物実測図(1)	101			

表 目 次

表 1	1987年度区画整理事業に伴う発掘調査一覧表・Ⅰ	表 3	有黒斑の埴輪をもつ古墳	111
表 2	ウマ右下顎臼歯の計測値	表 4	SE01出土土師器一覧	121

写 真 目 次

写真 1	87-64次(Ⅲ-A区)調査トレンチ	4	写真 9	羽釜159出土状態	55
写真 2	87-16次(Ⅰ区)調査作業風景	7	写真10	SE601出土遺物	59
写真 3	SP02遺物出土状態	16	写真11	Ⅲ区SD604出土製塩土器	60
写真 4	SP03遺物出土状態	25	写真12	瓦器碗220出土状態	67
写真 5	長原3層出土遺物	32	写真13	長原4層出土遺物	74
写真 6	長原4層出土遺物	32	写真14	Ⅲ区検出遺構(東から)	82
写真 7	長原4層出土遺物	33	写真15	土師器甕(22)外面	119
写真 8	173号墳全景(西から)	45			

別 表

1	遺物一覧	124	2	報告した古墳一覧	131
---	------	-----	---	----------	-----

第Ⅰ章 長原・瓜破遺跡の発掘調査

第1節 1987年度の発掘調査と整理作業・報告書の作製

1) 発掘調査

1987年度の本事業に伴う発掘調査件数は18件、発掘面積は6,235㎡であった。1981年に長吉瓜破地区の区画整理事業がはじまり、この年の発掘調査は、1件2,900㎡で、82年度は7件3,414㎡、83年度は8件6,169㎡、84年度は8件3,866㎡、85年度は14件5,500㎡、86年度は19件4,710㎡であった。

本年度の調査は、1987年5月25日に開始し、翌年3月31日に現場での発掘作業を終了した。各次調査の発掘面積・担当者などは表1のとおりである。

なお、当協会で使用している発掘次数は、遺跡略号のあとに年度-番号を付しており、

表1 1987年度区画整理事業に伴う発掘調査一覧表

発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
NG87-16次	335㎡	平野区長吉長原東3丁目 ～長吉川辺3丁目	内田好昭	1987年5月25日～1987年8月10日
NG87-27次	260㎡	同 長吉長原東3丁目	水原克司	1987年7月7日～1987年10月5日
NG87-28①次	255㎡	同 長吉川辺3丁目7	黒田慶一	1987年7月14日～1987年9月9日
NG87-28②次	345㎡	同 長吉川辺3丁目9	黒田慶一	1987年9月7日～1987年10月22日
NG87-31次	720㎡	同 長吉川辺3丁目	伊藤 純	1987年7月22日～1987年10月23日
NG87-39次	190㎡	同 長吉長原東3丁目2	内田好昭	1987年9月10日～1988年1月20日
NG87-40次	275㎡	同 長吉長原東3丁目2	内田好昭	1987年9月16日～1988年2月29日
NG87-50次	65㎡	同 長吉川辺3丁目7	水原克司	1987年10月8日～1987年12月11日
NG87-51次	460㎡	同 長吉川辺3丁目	横井久之	1987年10月12日～1987年11月12日 1988年1月9日～1988年2月18日
NG87-54次	45㎡	同 長吉長原3丁目16	水原克司	1987年10月20日～1987年10月31日
NG87-60次	945㎡	同 長吉川辺3丁目	伊藤 純	1987年11月17日～1988年3月5日
NG87-62次	160㎡	同 長吉川辺3丁目2	内田好昭	1987年11月19日～1988年1月22日
NG87-64次	250㎡	同 瓜破東8丁目	黒田慶一	1987年11月24日～1988年3月31日
NG87-65①次	560㎡	同 瓜破東8丁目	黒田慶一	1987年12月1日～1988年1月16日
NG87-65②次	320㎡	同 瓜破東8丁目	黒田慶一	1988年1月18日～1988年2月4日
NG87-69次	235㎡	同 長吉長原東3丁目1	水原克司	1987年12月14日～1988年1月23日
NG87-76次	205㎡	同 長吉川辺3丁目8	水原克司	1988年1月22日～1988年3月4日
NG87-90次	610㎡	同 長吉川辺3丁目	伊藤 純	1988年2月24日～1988年3月31日

たとえば、「NG87-19」は「長原遺跡における1987年度の19番目の調査」という意である。ただし、本書報告の調査はすべて「NG」を冠するためこれを省略する。なお、NG87-64・NG87-65①・NG87-65②次調査地は、遺跡地図の上では「瓜破」遺跡に含まれるが、一連の区画整理事業に伴う調査であるため「NG」を冠した。

2) 報告書の作製

発掘調査は1987年度に実施したが、本書の作成に伴う整理作業は1992年度に行った。

資料の整理作業は、1987年以降に当協会を退職した者が2名おり、また、整理期間中に現場作業に当たっていた者がいたため、主として伊藤純がこれに当たった。

本書の編集は調査課長永島輝臣氏の指揮のもと、調査課の伊藤純が行った。

なお、英文目次および要約は岡村勝行があたり、オーストラリア・クイーンズランド大学学生Robert Condon氏の協力を得た。

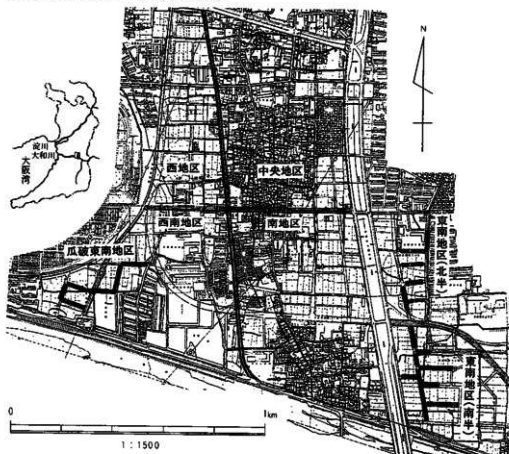


図1 区画整理事業施行範囲と調査地

第2節 調査の経過と概要

1990年の「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅱ以来、長原・瓜破遺跡の地域区分がなされているので(図1)、本書においてもこの区分に従う。

1) 瓜破遺跡東南地区(図2)

これまでの調査によって本年度の調査地の西側(UR86-11次調査)では、7世紀前半の官衙的な配置の建物群が見つかった[南秀雄1987]。また、この建物群の北方、本年度調査地のⅠ区の北西の調査(84-24次調査)では、南に広がる建物群よりやや新しい7世紀中頃の井戸や掘立柱建物が見つかった[大阪市文化財協会1992]。

i) 87-65①次調査(Ⅰ区)

7世紀前半の官衙的な建物の中心部の東に隣接する調査地であり、これと一連の遺構が広がっていることが予測された。

12月1日から調査を開始した。近年の盛土と耕土を、重機を用いて北から南に順次掘削した。遺構が南半分に集中していたため、主眼をここにおいて調査を行った。1988年1月16日にすべての調査を終了した。

ii) 87-65②次調査(Ⅱ区)

Ⅰ区の南端、遺構が集中するところから東に延びる調査地である。

当初、飛鳥時代の遺構が調査地全面に広がることを予想されたため、工事による遺構の破壊を最小限におさえるため、下水管もシールド工法にし、発進坑と到達坑のみを調査する予定であった。しかし、先に終了したⅠ区の調査の知見によって、官衙的な建物群の北側を画する東西方向の概

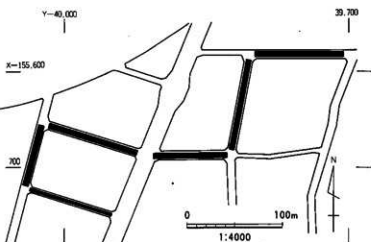


図2 瓜破遺跡東南地区調査地位置図

が、Ⅰ区の調査範囲の中で南に曲ることが確認され、飛鳥時代の遺構はこの欄より東側の本調査区には拡がらない可能性ができた。このため、まず、幅1mの試掘溝によって遺構の分布の密度をおさえ、遺構が少なければ、道路予定地全面の調査を行うことにした。

試掘の結果、全面調査を行うことになった。周辺の農地への入口を確保するために調査区を2分し、1988年1月18日から西半の調査に着手し、西半の終了後、東半の調査を行い、2月4日に終了した。

iii) 87-64次調査(Ⅲ区)

区画整理事業に伴う水道管の埋設工事に先行して行った発掘調査である。水道工事の施行業者が遺構面までの機械掘削を行ったり、同じ期間、隣地のⅠ区(87-65①次調査)、Ⅱ区(87-65②次調査)でも併行して調査を行っていたため、



写真1 87-64次(Ⅲ-A区)調査トレンチ

工事の工程の都合などからしばしば中断をよぎなくされた。

11月24日から調査を開始し、A→B→C→D→E区の順に調査を行った。途中何回かの中断のため、すべての現場作業が終了したのは1988年3月31日であった。

Ⅲ-A区は東西方向の道路予定地の北半を調査したもので、同じ道路の南半はすでに83-44次調査で発掘が行われている[大阪市文化財協会1992]。Ⅲ-B区ではその後、北半を1990年度に調査した(90-25次調査)。また、Ⅲ-D区の北半も1990年度に調査した(90-46次調査)。

西方に展開している官術的な建物群と関連するような遺構はなく、この時期以外でも特筆すべき遺構・遺物は見つからなかった。

2) 長原遺跡中央地区(図3)

i) 87-54次調査

本年度、中央地区で実施された唯一の調査で、道路の拡張工事に伴って行われた。東西

約17m、幅約2.5mの調査区である。北東約60mの地点には、長原古墳群内ではもっとも新しい時期につくられた、横穴式石室をもつ帆立貝形の前方後円墳七ノ坪古墳がある[高井健司1986]。また、周辺では古墳時代の掘立柱や、飛鳥～奈良時代の水田が見つかっている。今回の調査区の西側、約70mは1980年度に調査を終えている。10月20日から調査を開始した。後述する長原4A層・6層・7A層・地山(13層)上面の4面の調査を行い、10月31日終了した。



図3 長原遺跡中央地区調査地位置図

3) 長原遺跡東南地区南半(図4)

当地区は本年度の調査がもっとも集中した地域である。東西200m、南北は現大和川を南端とし、北へ約750mの細長い土地にはほぼ東西・南北方向にトレンチをいれたことになる。当地区を南と北に2分するように、東西方向の道路(川辺町線)が走っているため、便宜的にこの道路を境に、長原遺跡東南地区を南半と北半に区分し、以下の叙述を行っていく。

i) 87-31次調査(I区)

調査地の総延長が200mを越えるため、3分して北から調査を行った。北区は7月22日から8月20日まで、中央区は8月25日から10月9日まで、南区は10月8日から10月23日まで調査を行った。車両の通行を確保し、隣接する水田などへの出入のため、南北の道路予定地のうち東半の幅3.5mほどの細長いトレンチ調査であった。

ii) 87-28②次調査(Ⅱ区)

南北の道路予定地のうち東半を3m幅で調査した。9月7日から10月22日まで調査を行った。一部東西方向の道路と交差する部分についても、幅1.5mで併せて調査した。後述する

縄文時代晩期から弥生時代中期頃の開析谷の部分については、壁面の崩壊を防ぐため段掘り掘削を行い、もっとも深い部分の調査できた幅は1mほどとなってしまった。

iii) 87-28①次調査(Ⅲ区)

Ⅱ区の北への延長部分である。調査の順序としては、本調査区を終えてから、南への延長部分Ⅱ区に着手した。7月14日から9月9日まで調査を行った。やはり車両の通行を確保するため、東半3m分を調査した。

iv) 87-60次調査(Ⅳ区)

道路予定地の全面を調査した。総延長が130mを越えるため、2分して西半から調査を行い、これを終えたのちに東半を調査した。西半は11月17日から1月13日まで調査を行っ

た。1月5・6日には、174号墳の部分を土地の境界線まで南へ拡張して調査を行った。東半は1月18日から2月25日まで調査した。2月11日から16日まで、175号墳の部分を北と南に拡張して調査した。2月26日から埋戻しを行い、3月5日に旧状に復した。

v) 87-90次調査(Ⅴ区)

2月24日から27日にかけて、重機を用いて上掘りを行った。

その後、遺構検出を行い、2本ある弥生時代の溝のうち、東側のものが調査区の東端で見つかったため、全体を確認するために3月16日に3mほど東へ拡張して調査をすすめた。3月31日現場作業を終了した。

vi) 87-76次調査(Ⅵ区)

東西方向の道路予定地のうち、車両の通行のため、北半3.5m幅で調査を行った。1月22日から重機による上掘りを開始し、3月4日にすべての調査を終了した。

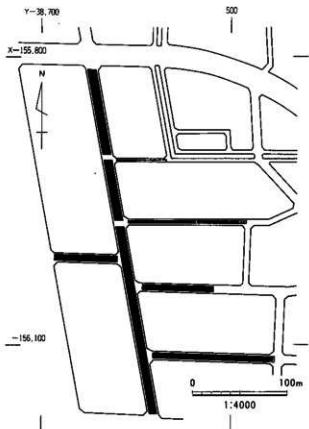


図4 長原道跡東南地区南半調査地位位置図

vii) 87-51次調査(Ⅶ区)

東西方向の道路予定地のほぼ全面130mの調査地を2分して調査した。10月12日から11月12日にかけて西半の調査を行った。その後、道路工事の工程の関係から少し間を置き、1988年1月9日から2月18日まで東半の調査をした。本調査地は現地表面から地山までは数十cmしかなく、遺構の残りが悪い。異なる時期の遺構が地山上で検出されるため、新古の関係が捉えにくかったものもある。



写真2 87-16次(Ⅰ区)調査作業風景

viii) 87-50次調査(Ⅷ区)

東西方向の道路予定地全長約60mのうち、西端5m分はⅡ区の調査として行っており、また東側25m分は現在流れている水路内に下水管が敷設されるため、本調査は東西30m、南北2.5mのトレンチとなった。10月8日から調査を開始したが、道路工事などの工程の都合から、途中で長原遺跡中央地区の87-54次調査(10/20～10/31)を先行して行ったため、本調査地はこの間中断し、11月5日から再開した。12月11日にすべての調査を終了した。

4) 長原遺跡東南地区北半(図5)

i) 87-16次調査(Ⅰ区)

長さ約110mの南北方向の調査区である。道路予定地の中央やや西寄り、幅約3mで調査した。調査区の南の端から川辺町線(長原遺跡東南地区を南と北に区分した道路)までの間30mは、地下鉄谷町線の延長工事の際に発掘調査[大阪市文化財協会1982]が済んでいるため、調査の対象としなかった。5月25日に調査を開始し、8月10日に終了した。

ii) 87-62次調査(Ⅱ区)

80mほどの東西方向の調査区である。幅4mの道路予定地のうち、北と南に接する水田との境界を保護するために、中央2m分を調査した。長原6層(飛鳥～奈良時代)以下は、下水道管の保護のため、幅1.3mに狭めての調査となった。

iii) 87-40次調査(Ⅲ区)

75mほどの東西方向の調査区である。幅9mの道路予定地のうち、下水管の埋設部分の3.5m分の調査を行った。下水管埋設工事と舗装工事との関係から調査区を2分し、西半を

11月18日に終了させ、東半は翌年1月21日から調査をはじめた。東半で見つかった長原6層の上面を切込む流路は、深さが1m以上もあったため、重機を用いて底を確認した。

iv) 87-39次調査(IV区)

直径55mの円墳に復元される塚ノ本古墳から東側に延びる、長さ100mの東西方向の調査区である。南と北に接する水田への進入路を確保するため3分割して、西から順次調査を行った。

管底が東へ高くなっていく下水道管の埋設工事に伴う調査で、3分割した東区では、下水道管の保護のため管の敷設部分避けて、幅1mほどしか調査できなかった。また、中央と東の調査区では壁面の倒壊を避けるため、長原7層(古墳～飛鳥時代)までしか平面的な調査ができなかった。これ以下は坪掘りによって地山までの層序を確認した。

v) 87-27次調査(V区)

長さ約120mの東西方向の調査区で、東西に2分し、西半70mを7月7日～8月31日に、東半50mを9月1日～10月5日の期間に調査した。中央から東へ地山が深くなり、湧水によって壁面が崩壊したため、長原7層以下は幅を1m弱に狭めて調査せざるをえなかった。

vi) 87-69次調査(VI区)

70mほどの南北方向の調査区である。幅8mの道路予定地のうち、下水管の埋設部分の調査を行った。長原6層(飛鳥～奈良時代)の上面で現地表面からの深さが2mになり、壁面の倒壊を避けるため、1m幅の調査となった。

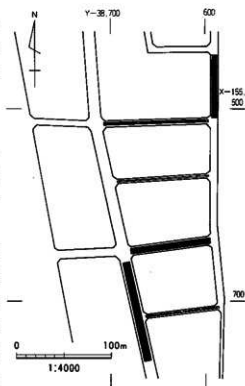


図5 長原遺跡東南地区北半調査地位位置図

(伊藤)

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 瓜破遺跡東南地区の調査

1)はじめに

当地と周辺にはこれまでの調査によって、7世紀前半の掘立柱建物群と、それに伴う溝や櫓が見つかっており[南秀雄1987]、この建物群の北側には、やや時期が下がる7世紀後半の井戸や掘立柱建物があったこともわかってきている[大阪市文化財協会1992]。

本年度の調査地は、7世紀前半の建物群の東側にあたり、Ⅰ区(87-65①次調査)・Ⅱ区(87-65②次調査)では、この建物群と一連の掘立柱建物や櫓、溝などが見つかった。Ⅲ区(87-64次調査)は、建物群の中心部分から北東に離れるためか、飛鳥時代と判断できる遺構はなく、その後の時代でも顕著な遺構はない。

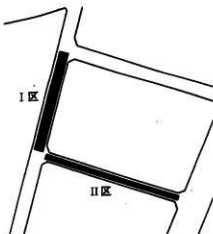


図6 Ⅰ・Ⅱ区位置図

2)調査地の層序(図7)

遺跡は南から北に延びる瓜破台地上に立地しており、遺構面は削平されている。現地表面から0.2~0.3mほどで地山(長原13層)となる。所々、地山の上面に遺物包含層が分布する。飛鳥時代の遺構は地山上面で検出される。



図7 Ⅰ区中央部東壁土層図

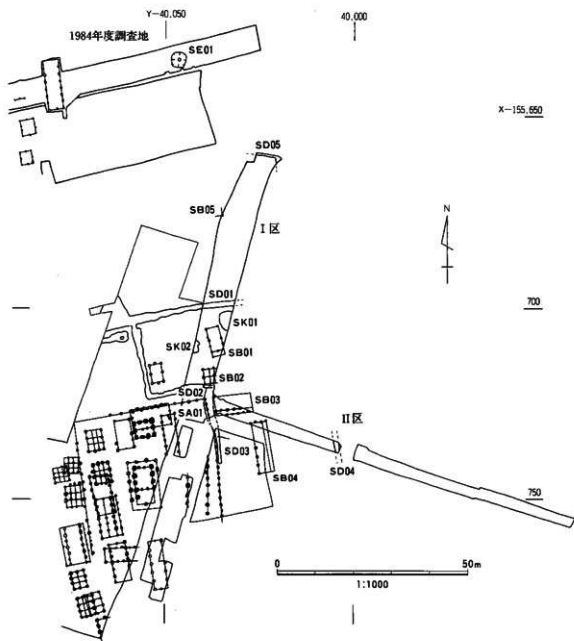


図8 飛鳥時代遺構配置図

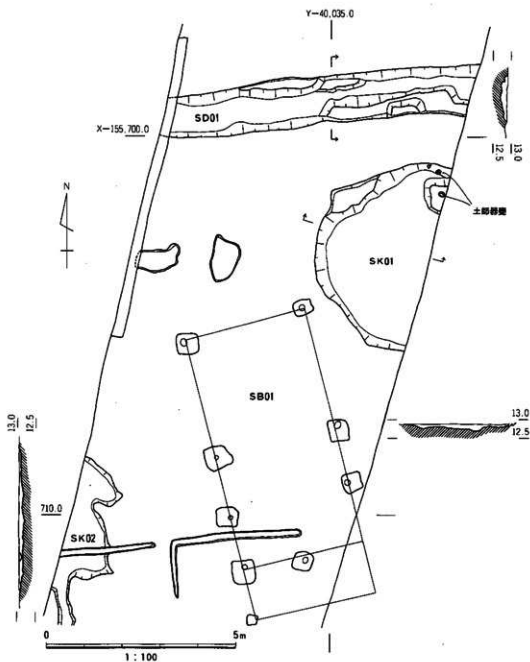


図9 I区中央部遺構配置図

3) 飛鳥時代の遺構と遺物(図8)

I 区の南半からⅡ区の西半で多くの遺構が検出された。Ⅲ区では、確実に古墳時代あるいは飛鳥時代と判断できる遺構はなかった。ここではⅠ・Ⅱ区の状況のみ報告する。

i) 掘立柱建物

SB01(図10、図版2)

母屋は桁行4間(7.6m)×梁行2間(3.2m)の南北方向の掘立柱建物で、南面に母屋から1.3m張出したところに縁束か庇と思われる小柱穴が取付く。母屋の面積は24㎡、主軸は北で15°西に振っている。母屋の北妻柱と、両方の桁側の北から2本目の柱穴は確認されなかったが、本来はここにも柱穴が存在したものと考えられる。桁行の柱間寸法は1.4～1.6m、梁行の柱間寸法は

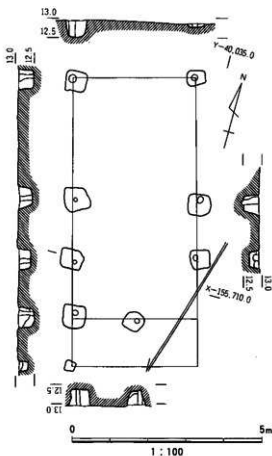


図10 SB01実測図

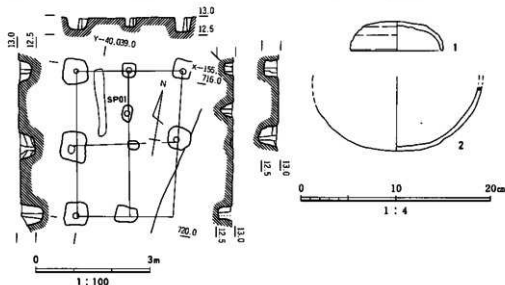


図11 SB02および出土遺物実測図

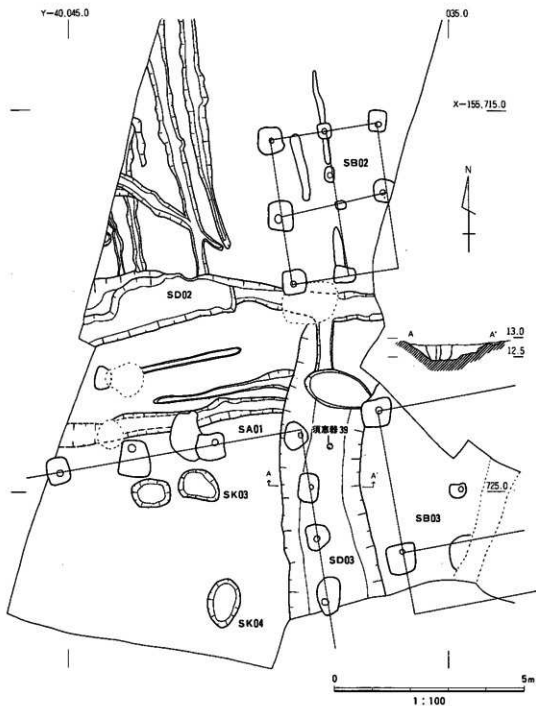


図12 I区南半遺構配置図

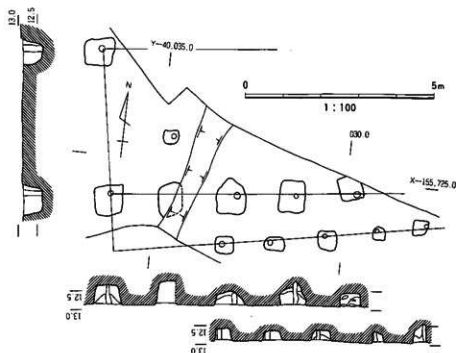


図13 SB03実測図

1.7m、母屋の柱穴は一辺0.4～0.7mの方形で、柱痕跡は直径0.1～0.2mである。南側の小柱穴は一辺0.25mと小さい。

SB02(図11、図版2・26)

桁行2間(3.8m)×梁行2間(2.8m)、面積11m²の南北方向の総柱の掘立柱建物である。主軸は北で8°西に振る。桁行の柱間寸法は1.8～2.0m、梁行の柱間寸法は1.4mである。柱穴はほぼ方形で、北妻柱と床束は一辺が0.3～0.4mと小さく、ほかの側柱は一辺0.5～0.7mである。柱痕跡は直径0.1～0.15mである。SP01は棟通りの柱筋にのることから、この建物を構成する柱の1つと考えた。南西の隅柱が東西方向の溝SD02の埋土を切っており、SD02(古)ーSB02という関係である。

SP01から須恵器杯蓋1、土師器甕2が出土した。1はへら切りののちに全体をナデによって仕上げている。復元径9.8cmで、準上りⅢ段階[菱田哲郎1986]と考えられる。2は内面にナデ調整があり、外面にはススが付着している。

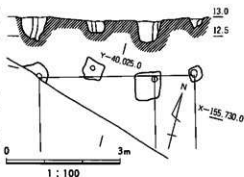


図14 SB04実測図

SB03(図13、図版3)

西妻柱穴は検出されなかったが、母屋が桁行5間(8.2m)以上×梁行2間(3.8m)の東西方向の掘立柱建物と思われる。南側に縁東と考えられる小柱穴が、距離1.3m離れて取付く。母屋の面積は31㎡以上、主軸は東で7°北に振る。桁行の柱間寸法は1.6~1.7mで、梁行は2間とすると柱間寸法は1.9mである。これに対して南側に並ぶ小柱穴は、柱間寸法が1.2~1.4mと桁行の芯々間に比べて狭く、庇の柱穴とは考えにくく、縁東の可能性が高い。母屋の柱穴は一辺0.7~0.9mの方形で、柱痕跡は直径0.10~0.15m、小柱穴は一辺0.3~0.5mの方形で、柱痕跡は0.10~0.15m前後である。

SB04(図14・17)

1991年度に行った南側の調査地の成果を考え合わせると、桁行6間(12.8m)×梁行2間(3.1m)、面積40㎡の南北方向の母屋に、東に面する庇か縁が付く掘立柱建物である。建物の主軸は北で9°西に振る。梁行の柱間寸法は1.5~1.7m、庇か縁東になる小柱穴は桁側から1.0m張出す。母屋の柱穴は一辺0.5~0.7mの方形で柱痕跡の直径

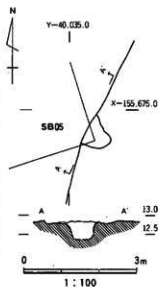


図15 SB05実測図

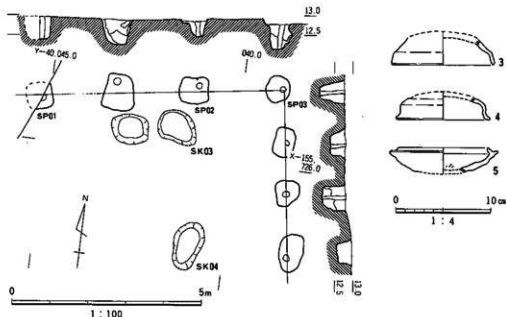


図16 SA01および出土遺物実測図

SP01:3 SP03:4 SP02:5

は0.1m、小柱穴の掘形は一辺0.3mで柱痕跡の直径は0.2mである。

SB05(図15)

I区の北西部で検出された平面がやや不定形な柱穴で、一辺0.7mの掘形で深さ0.3m以上である。調査区外に延びる掘立柱建物の南東の隅柱穴と考えられる。東西溝SD01とSD05の間にも建物が存在していたようである。



写真3 SP02遺物出土状態

ii) 櫓

SA01(図16・17、図版1・26)

西側に展開する中心建物を画する櫓の連続部分である。今回の調査区では櫓の北東の隅が判明した。調査区内で東西方向の柱が4本、東端から南へ折れる南北方向の柱が3本見つかった。南北方向の柱列は、その後行われた南側の調査地でも連続していることが確かめられている。北東の隅がおさえられたため、東西方向の櫓の総長が約35mと判明した。櫓の西辺の長さは34.5mなので〔南秀雄1987〕、約35mの正方形の中に中心建物が配されていることがわかった。櫓の方位は北辺が東で9°北に、東辺が北で5~12°西に、西辺が北で8°西に振っている。調査区内での柱間寸法は、東西部分が2.0~2.3mある

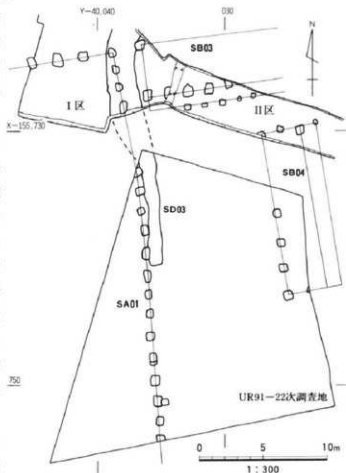


図17 UR91-22次調査地

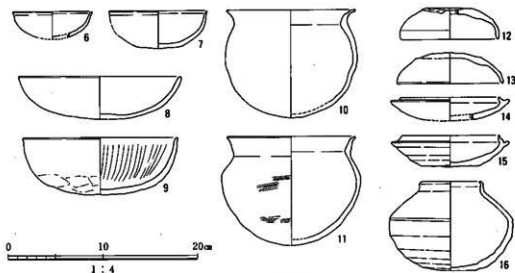


図18 SK01出土遺物実測図

のに対し、南北部分では1.3～1.7mと短い。北辺の既調査地でも柱間寸法は1.7～3.0mとばらつきがある。東辺の柱間寸法も南側のUR91-22次調査地では1.6～1.7mである。西辺の柱間寸法も1.4～2.3mとばらつきをみせている。このような事実から、北辺と東辺の規格に差があり、施工時が違うのではないかと推測することはあたらない。櫓の東辺の方位は今回の調査区の北端と南側調査区でやや異なっている。調査した時期が異なり、測量の誤りがなければ中央部でやや外へ張出しているようにみえる。しかし、西辺と東辺の櫓の距離は、狭いところで35.1m、広いところでも36.0mとほとんど変わらないことから、施工時の誤差の範囲におさまるものであり、東・西・北辺とも同時につくられたといえる。東辺の北端2間の芯々間が1.3mと狭いのは、北辺との取付き部分を強化するためであろうか。

東辺の柱4本は南北方向の溝SD03を埋めたのちに、埋土を掘って据えられており(図12)、SD03(古)―SA01(新)という関係である。

柱穴SP01から須恵器杯蓋3、SP02から須恵器杯身5、SP03から須恵器杯蓋4が出土した。5の内面にはナデの後に工具があたった痕がある。いずれも準上りⅢ段階である。

iii) 土壌

SK01(図9・18、図版26・27)

掘立柱建物SB01の北東方向に近接する円形の土壌である。直径約5m、検出面からの深さは約0.2mで、底は凸凹している。埋土は砂を含む灰黄褐色粘土混シルトである。

6～16の土器が出土した。6～11は土師器、12～16は須恵器である。6～9の土師器杯の径高指数(器高÷口径×100)を示すと、6は35、7は38、9は37である。7は外底面の中央に直

第Ⅱ章 調査の結果

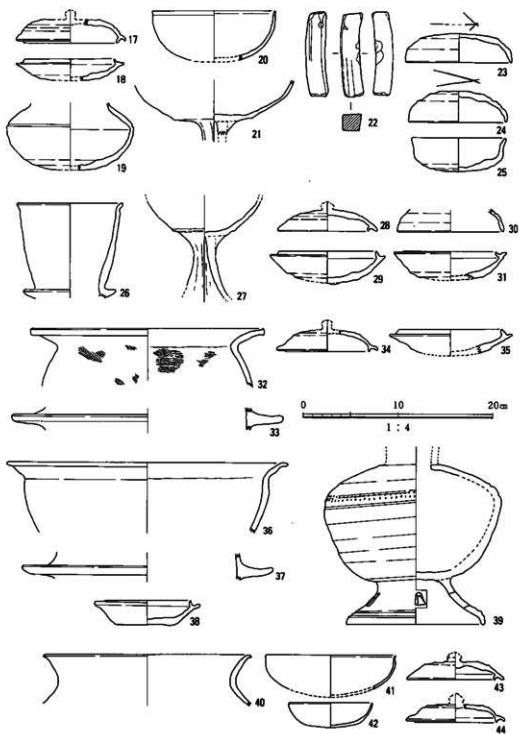


図19 出土遺物実測図

SD01 : 17~19 SK02 : 20~25 SD02 : 26~31 SK03 : 32~35 SD03 : 36~39 SK04 : 40~44

径6cmほどの黒斑がある。6・7は器面が荒れていて、暗文の有無はわからない。8には暗文はなかったようである。9は内面に放射状の暗文があり、底部外面はヘラケズリされている。10は器面が荒れていて、調整は観察できない。11は外面にハケメが残る。須恵器杯蓋12の天井はヘラ切りのままで、調整はない。復元径は10.4cmである。杯蓋13・杯身14・杯身15の復元径はそれぞれ11.2cm・10.6cm・10.4cmである。短頸壺16は体部最大径のところに浅い沈線が巡る。自然釉のつき方からみて正位置で杯のようなものが重ねられて焼かれたことがわかる。このほかにも細片のため図化していないが、多くの土器が出土した。土師器では杯・高杯・羽釜があり、須恵器では杯・高杯、16よりひとまわり大きい壺がある。須恵器の杯身と蓋は準上りⅡ段階のものであり、ほかのものも7世紀前半におさまる。

SK02(図9・19、図版27・28)

掘立柱建物SB01の西側にある不定形の土壌である。長径約3.5m、深さ約0.2mである。

20～25が出土した。土師器杯20は器面が荒れていて、暗文の有無はわからない。21は土師器の高杯で、脚柱部の外面はタテ方向にヘラケズリされている。22は須恵器で断面が四角形である。一方は折れているが、柱状であることから壺につくような脚であろうか。須恵器杯蓋23・24の天井にはヘラ記号がある。須恵器杯身25は底部をていねいに削って仕上げている。準上りⅡからⅢ段階にかけてのものである。

SK03(図12・19、図版28)

構SA01の内側にある楕円形に近い土壌で、長径1.1m、短径0.7m、深さ約0.2mである。

32～35・47の土器が出土した。32は内外面ともハケメが残る土師器の甕である。33・47は生駒西麓産の胎土で、33は羽釜、47は甕の底である。34・35は須恵器の杯蓋と身で、34が復元径9.0cm、35が復元径11.0cmである。準上りⅡからⅢ段階に属するものである。

この西隣にも似た形の土壌があるが、遺物は出土しなかった。

SK04(図12・19、図版28)

構SA01の内側にある。長径1.2m、短径0.9m、深さ約0.15mである。

40～44の土器が出土した。40～42は土師器、43・44は須恵器である。40は甕、41・42は杯である。41・42は器面が荒れていて暗文の有無はわからないが、径高指数はそれぞれ27・29である。43は復元径8.2cm、44は復元径8.8cmの杯蓋で、準上りⅢ段階と考えられる。

SK03・04とも構SA01の柱穴との直接的な切合いはなく、先後関係は不明である。

iv) 溝

SD01(図9・19、図版27)

橋SA01に囲まれた中心区画の北側に位置する、数棟の掘立柱建物を画する東西方向の溝の一部である。西側の調査区でも延長部分が見つかり、西方約18mの地点で南へ直角に折れる。幅約1.2～1.3m、検出面からの深さは0.2mほどである。調査区の東端、西端でも底のレベルはほとんど変わらない。埋土はシルト混りの粘土で、流れによる堆積物ではない。建物の周辺の排水を主たる目的にしたような溝ではなく、区画を目的とした溝であることは明らかである。

埋土から17～19の須恵器杯蓋・杯身・壺が出土した。

SD02(図12・19、図版1・27・28)

SD01と同じく、西側の調査区から続く溝で、北側にある深さ0.05m前後の南北方向の小溝群を切っている。調査区内ではやや蛇行しているが、SD01と平行するように配されている。幅は0.5～1.4m、深さは0.2mほどで、東側でSD03を切る。調査区の東と西端では、底の高低差はほとんどないが、中央部がやや高くなっている。灰黄褐色粘土混りシルト層が埋土となっている。全体の位置関係をみると、このSD02は、SD01が西方で南に折れ、さらに、東に向きを変え延びてきたもので、一連の建物群を区画する溝である。SB02の南西隅の柱穴がこの溝を切っている。また、東端近くで南に幅0.4～0.5m、深さ0.05mほどの小溝が直角に派生し、不定形の浅い土壌に注ぎ込むように終わっている。

埋土から26～31の土器が出土した。26は須恵器の捏鉢で、内外面ともいねいにクロコナデされている。27は土師器の高杯で、脚柱部内面にはシボリメが残る。28～31は須恵器の杯蓋と身で復元径はそれぞれ8.7cm、10.4cm、11.3cm、9.8cmで、準上りⅡからⅢ段階のものである。

SD03(図12・17・19、図版1・3・28)

幅2.2～2.6mで、検出面からの深さが0.4mほどの南北方向の溝である。埋没後に東西方向の溝SD02が掘られる。南側の調査地でもこのSD03の延長部分が確認され、全長18.5mの溝

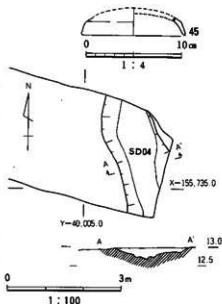


図20 SD04および出土遺物実測図

であることがわかった。先にも述べたが、槽SA01と切合っており、SD03(古)―SA01(新)である。この前後関係は、当然のことながら南の調査区でも同じである。

埋土から36・39・48・51の土器が出土した。36は土師器の鍋である。内面は器面が荒れている

が、砂粒が動いた痕跡があることからヘラケズリされていることがわかる。外面にはヨコナデを施す。37・48・51は生駒西麓産の胎土の羽釜と甕である。須恵器杯身38は、内外面ともいいねいな回転ナデのあとに、ヘラ切りによってロクロから切り離している。須恵器壺39は、脚部を貼付けたあとに全体のプロポーシオンを整えるためか、左回転のロクロの上で、体部の下半を下から上の方向にヘラケズリしている。体部の上半もヘラケズリされているが、砂粒の動きから、ロクロは右回転である。肩部の沈線の周辺に刺突文を施している。

SD04(図8・20、図版3)

槽SA01から東方34.5mに溝の中心が位置する南北方向の溝である。幅約1.0～1.5m、検出

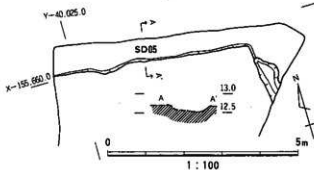


図21 SD05実測図

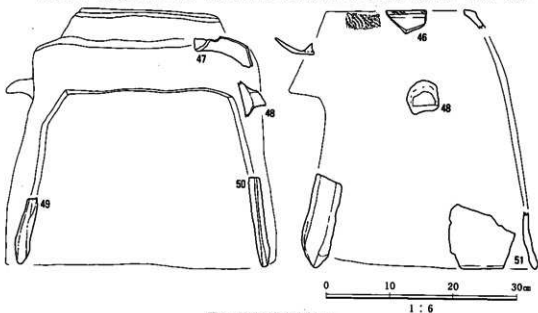


図22 生駒西麓産甕実測図

面からの深さは0.3mである。調査できたのは南北約3mの小範囲であるが、北でやや西に振れるような方位を確認した。SA01に平行するように配された溝と思われる。この溝を境にして、飛鳥時代の遺構は東にはなく、官衙的な建物群の東辺を画する溝であろう。埋土から須恵器の破片が出土した。図化できたのは45の須恵器杯蓋のみである。

SD05(図8・21)

I区の北端で検出した東西方向の溝である。調査区の端で南に直角に曲るものと思われる。東西部分は幅0.5m以上、検出面からの深さ0.2m、南北方向は幅1.5m以上、検出面からの深さは0.1m前後である。シルト混り粘土で、須恵器甕の破片が出土した。

なお、図22は、生駒西麓産の胎土の甕の破片である。別々の遺構あるいは包含層から出土したものであるが、1点1点を別々の図にすると全体の形状を推量しにくいので、あえて本来の形を推定して[村山始1992]図化¹⁾した。46の端面は同心円のタタキメがある。48は把手、50の先端は側面の下端のラインよりもさらに5cmほど下に延びる。

4) 小結

本年度の調査によって、飛鳥時代の官衙的建物群の構成が一層明確になった。特に、中心建物群を画する溝SA01の北東隅がおさえられたことは重要である。しかも、南北方向の東辺の溝以前に、ほぼ同じ位置に南北方向の溝SD03があって、建物群の東側は、当初、溝によって区画されていた可能性がでてきた。

また、溝SA01の東方に、建物群の東を画すると思われる南北溝SD04が確認された。この溝を境にして東には飛鳥時代の遺構はない。溝SA01の成立時期は準上りⅢ段階で、7世紀第2四半期に相当し、最近の難波宮の土師器編年観では、前期難波宮が建設される南編年の5期[南秀雄1992]、すなわち7世紀中葉にあたる。このころ、建物群の周囲に溝SA01を設け、建物配置を変更することにより威容を整えたのである。上記の中心建物群の北側に東西溝SD01・02で囲まれた南北20m、東西26m以上の区画があるが、区画内では建物も少なく、自然村落に近く、時期もややさかのぼる準上りⅡ段階であることも判明した。中心建物群はおそらく政治的意図をもって、自然発生的な集落と隣合わせの地に出現したが、7世紀中葉段階でいよいよその性格を明白にしたといえる。

(黒田・伊藤)

第2節 長原遺跡中央地区の調査

1) 調査地の層序(図24・25)

沖積層上部I

長原1～3層：0.8mの盛土である。旧耕土の上面のレベルはTP+9.8mである。

長原4層：小礫を含む中粒砂が主体となる地層である。ほぼ平坦に堆積し、層厚は0.1～0.2mである。長原4B層に相当すると思われる。

長原5層：0.3～0.4mの厚さの水成の粗粒砂層である。西に行くに従い徐々に厚くなる。

長原6層：東端は0.15m、中央部は0.30m、西端では0.20mの厚さの灰オリーブ色(5Y4/2)のシルト層である。上面には5層の水成層に覆われた水田の畦が残る。本層中、水成の粗粒砂が部分的に残っていることから、この水成層をはさんで2層に分層することが可能である。

本層中から土師器甕52が出土した。内面はハケのあとといわねいにナデている。外面はヨコナデが残る。

沖積層上部層II

長原7層：厚さ0.2mほどで、西へ徐々に薄くなる。オリーブ黒色(10Y3/2)のシルト層である。東側の約4mはやや高く、水田の畦が残る。この高い部分の下半は地山のブロックや土器片を含んでおり、水田を造成する際の客土の可能性が高い。出土した遺物から5世紀末～6世紀初めごろの整地と考えられる。

本層から土師器の甕53が出土した。良質の粘土に淘汰された砂を混ぜた胎土で、灰白色(7.5YR8/2)によく焼き上がっている。内外面ともハケメ調整である。

沖積層下部層

地山層：長原13層のオリーブ灰色(10Y4/2)の粘土層である。ほぼ平坦で、上面はTP+8.8mである。上記の、東端から西へ4mほどの客土と推定している地層の下面(本層の上

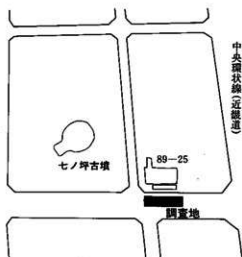


図23 調査地位置図

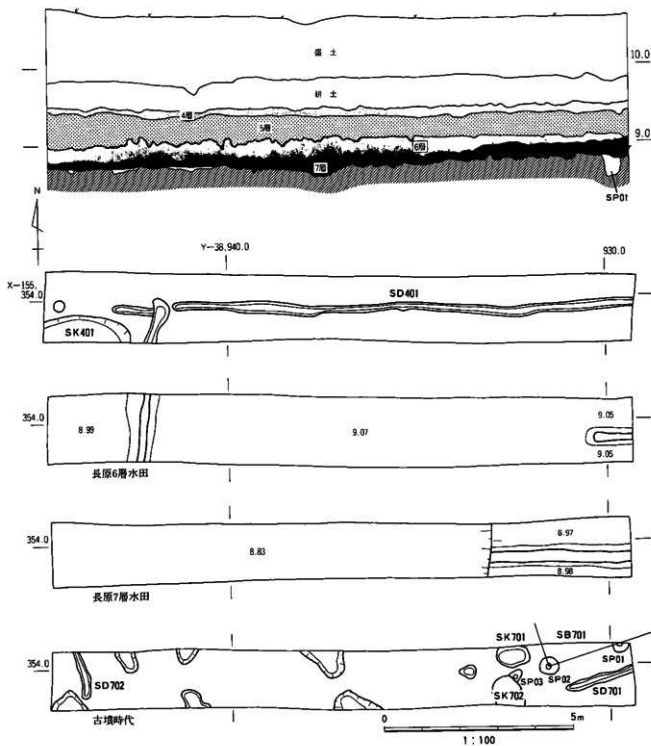


図24 北壁土層図および遺構実測図

面)は、他所より凹凸が多い。水田の耕作によるものであろう。



2) 古墳時代の遺構と遺物(図24・26、図版4・29)

i) 掘立柱建物

SB701

地山の上面で2つの柱穴が見つかった。この2つの柱穴は、その後の北側隣接地の調査成果と考え合わせると、2間×3間(5m×11m)の東西方向の建物の南西隅に当たるものと思われる。SP01・

02とも検出面からの深さは0.25mほどあり、柱痕跡の直径は0.15mであった。柱間寸法は1.85mである。SP02の西にやや小さく深い(深さ0.16m)柱穴がある。SB701の西面に平行する欄か、庇を支える柱かもしれない。

SP01から土師器の甕57が出土した。外面はタテ方向のハケメ、内面にはヨコ方向のハケメがある。口径27cmに復元できる。

SP03からは須恵器の蓋56が出土した。ほぼ完形で、5世紀後半のものである。北側隣接地の建物群からはTK23 型式~TK47

型式の須恵器が出土しており、SB701は5世紀後半~末頃に営まれた建物である。

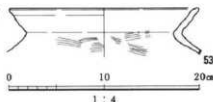


図25 長原 6・7層出土遺物実測図
6層:52 7層:53

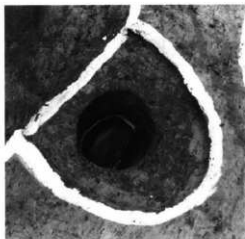


写真4 SP03遺物出土状態

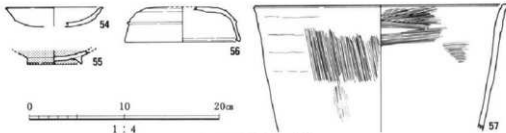


図26 出土遺物実測図
SK401:54・55 SB701(SP03):56 SB701(SP01):57

ii) 溝

SD701

幅0.20～0.25m、深さ0.05～0.10mで、SB701に平行する溝である。SB01の南西隅と判断したSP02のところでこの溝も止まることから、SB701を区画する溝と考えられる。SB701の柱筋からの距離は0.75mである。

SD702

幅、深さともSD701と同じような規模の溝である。SD701とは離れているが、方向的にはこれと直交することから、この溝も建物を区画するものと思われる。

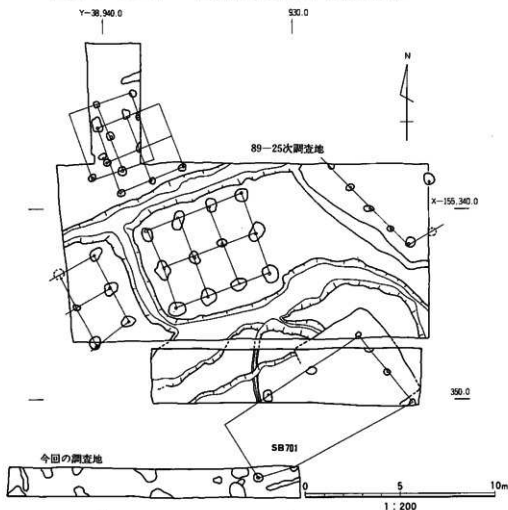


図27 古墳時代遊構配置図

iii) 土壌

SK701

東西0.9m、南北0.6m、深さ0.5mほどで、オリーブ灰色(10Y4/2)のシルトが埋土である。

SK702

東西0.8m、南北0.8m以上、深さ0.4mほどで、暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)のシルトが埋土となっている。SB701と関連すると考えたSP03を切っている。SK701・702とも埋土に炭を含んでいる。いずれの土壌からも土師器の細片が出土した。

これ以外の土壌状のものは、深さが数cmの浅いもので、出土遺物もない。

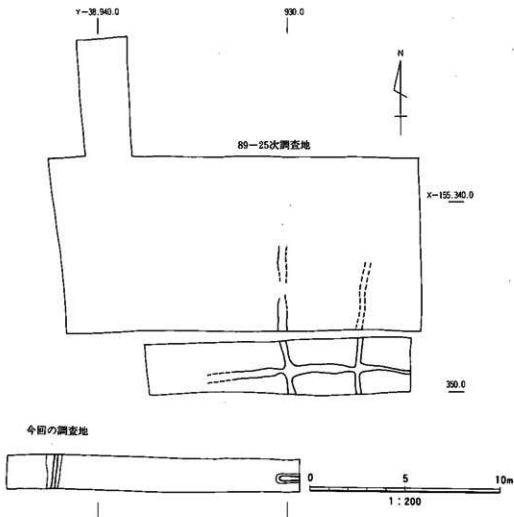


図28 長原6層畦畔配置図

3) 飛鳥～奈良時代の遺構(図24・図版4)

i) 水田

長原7層上面と6層上面で2面の水田が検出された。7層上面の水田には、東端で東西方向の畦があった。この畦の西端から西へは水田の上面のレベルが0.15mほど低くなっている。6層上面では南北方向と東西方向の畦が見つかった。7層の時期には水田面が西へ低くなる地形であったが、6層の時期になるとほぼ平坦な水田面となるようである。

4) 平安～鎌倉時代の遺構と遺物(図24・26)

i) 土壌

SK401

東西3.0m以上、南北0.7m以上で、灰オリーブ色(5Y4/2)の中粒砂が埋土となる。深さは0.1mの浅いものである。埋土から瓦器54や、黒色土器55が出土した。

ii) 溝

SD401

幅0.2～0.3m、深さ0.1mの断面U字形の溝である。11～12世紀ごろの耕作に係わる溝と思われる。

5) 小結

北隣接地での知見[佐藤隆1989]もふまえ、土地利用の変遷をおってみたい。

5世紀後半、当地周辺は数棟の掘立柱建物や、竪穴住居がある居住域であった(図27)。5世紀の末頃になると建物は廃絶し、水田となる。もともとあった建物を強制的に潰したのか、移転などの偶然の理由によって建物がなくなったところを水田にしたのかはわからない。集落は5世紀末頃に廃絶して水田となる。墓域も北へ拡がり、6世紀の前半にはすぐ北側に帆立貝形の前方後円墳(七ノ坪古墳)がつくられる。

居住域から耕地への変遷が5世紀の末頃にある。この画期は本調査地だけでなく長原のいたるところでも確認される。

(伊藤)

第3節 長原遺跡東南地区南半の調査

1) 調査地の層序(図30・31)

現大和川を南端とし、東西約200m、南北400mの区域に東西・南北にトレンチをいれた。調査区は南から北へ、西から東へ下がる地形である。地山(長原13層)が高いところでは、堆積作用が活発でなく、各層の層厚がきわめて薄かったり、本来堆積しているはずの地層も、後世の耕作などによって削平されている調査地も多い。したがって、長原遺跡の標準層序では細分されている地層でも、細分が不可能で、かなり大掴みな層序の把握となっていることは否めない。

沖積層上部層Ⅰ

長原Ⅰ～3層：近世以降、現代までの耕土である。本地区の現地表面の南北方向のレベルは、Ⅰ区南端ではTP+12.3m、Ⅲ区北端ではTP+11.7mである。東西方向はⅥ区西端ではTP+12.0m、Ⅳ区東端でTP+11.7m、Ⅶ区東端でTP+11.0mであり、ほぼ平坦な土地である。

長原4層：暗灰褐色の中粒砂、ないしシルト層である。Ⅰ区の一部やⅣ区の中央部では本層がないところがある。これは下層の地層が周辺より高く、後世に削平されたのであろう。Ⅱ区の本層中からウマの右上顎遊離歯の細片が出土した。

長原5層：本層は奈良時代後半(8世紀後半)の、わずかにⅢ区の北端で本層らしきものが確認できる水成層である。

長原6層：黒褐色(7.5YR3/1)ないしオリブ褐色(2.5Y4/3)のシルト層である。しかし、地山が高いⅠ区などでは、本層と下位の長原7層と分層できない。Ⅱ・Ⅲ区では、本層は比較的厚く堆積し、上

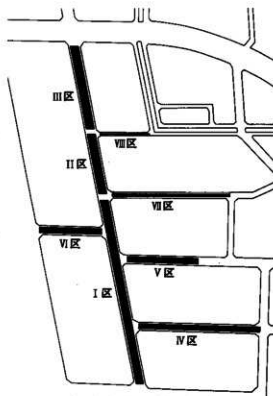


図29 長原遺跡東南地区南半調査地位置図

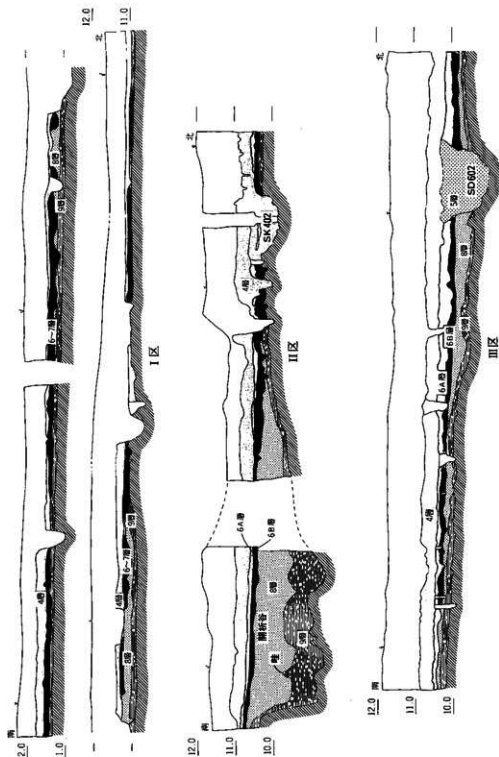


図30 南北方向（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区西壁）土層図

第3節 長原遺跡東南地区南半の調査

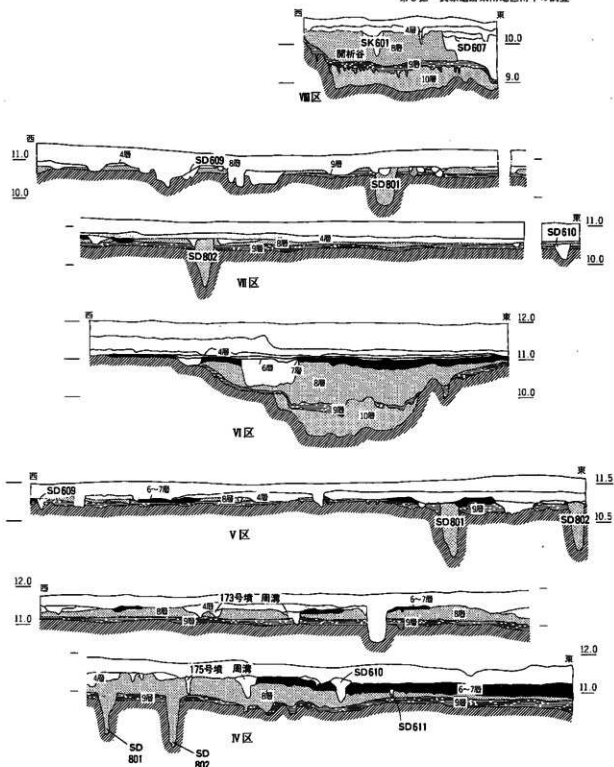


図31 東西方向(N・V・VI・VII・VIII区北壁)土層図

半(6A)と下半(6B)とに分けることができる。Ⅵ区では下位の長原7層相当層とともに遺構の埋土となっている。

沖積層上部層Ⅱ

長原7層：黒褐色(2.5Y3/2)のシルト～粘土層である。Ⅵ区の谷状の地形のところでは、水田の耕土となる。

長原8層：水成の中～粗粒砂層である。Ⅵ区からⅡ区とⅥ区へつづく開析谷や、弥生時代の水路SD801・802を埋めるのは本層であろう。水の

流れによって大量に運ばれた本層によって、谷や水路などが埋り、平坦な土地になるようである。Ⅰ区の本層中から骨の細片が出土した。哺乳類であること以外はわからない。

長原9層：褐灰色(10YR6/1)～オリーブ黒(7.5Y3/1)の粗粒砂層～シルト層である。ⅥとⅦ区の開析谷の底に厚く堆積する。

長原10層：オリーブ灰色(2.5GY6/1)の細粒砂～シルト層である。開析谷の最下層にのみ堆積している。

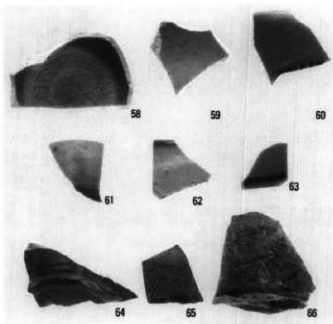


写真5 長原3層出土遺物



写真6 長原4層出土遺物

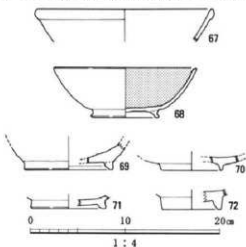


図32 長原3・4層出土遺物実測図
3層：69・70 4層：67・68・71・72

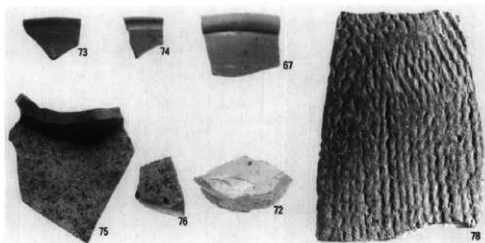


写真7 長原4層出土遺物

沖積層下部層

長原13層：灰白色、または黄色の粘土質シルト層である。平面的な調査は本層の上面まで行った。各所でサヌカイトのフレイクが出土した。

2) 各層出土の遺物

3層(写真5・図32)

I区で中国製磁器58～60、II区で灰軸陶器69・70が出土した。III区では灰軸陶器61～66が出土した。青磁58は浅黄橙色(10YR8/3)の胎土である。ほかの磁器に比べ、軟らかい感じがある。高台端面は軸剥ぎされている。

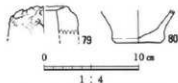


図33 長原7層出土遺物実測図

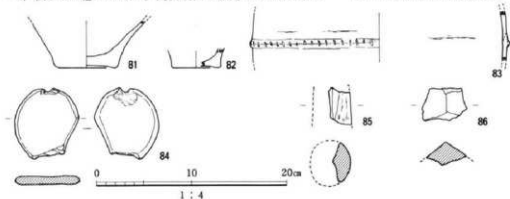


図34 長原9層出土遺物実測図

IV区：81・84 VI区：82・83・85・86

第II章 調査の結果

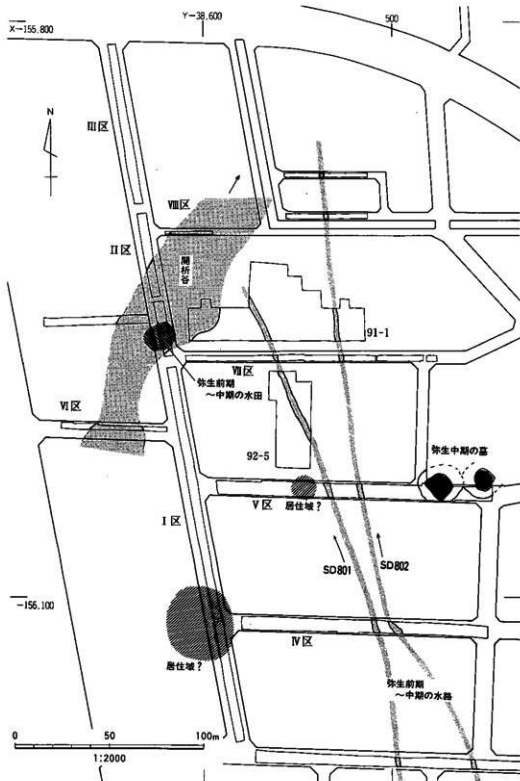


図35 長原遺跡東南地区南半縄文時代晩期～弥生時代中期遺構配置図

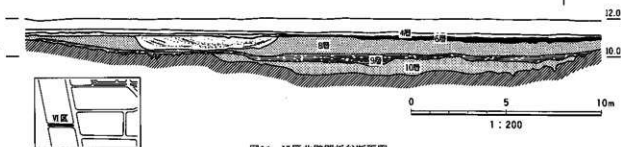


図36 VI区北壁開析谷断面図

59は内面にクシ描き文があり、高台内は露胎である。青磁60は外面に蓮弁を影花で表わしている。釉の厚い部分には、細かな気泡がたくさん含まれている。61は白磁碗で、高台周辺は露胎となっており、口縁部は重ね焼きによる釉着を防ぐためか、釉禿ぎされている。62は白磁の碗である。63は青磁で、内面には型押しによる文様がある。64は高台内も含め、全面に施釉された緑釉陶器である。高台の直径が8cm前後に復元できることから、鉢のような大きい形のものである。見込みに直径6cmほどの圏線が入る。胎土は淡赤橙色(2.5YR7/4)で、硬く焼きしまっている。65も緑釉陶器である。胎土は64と違い、須恵質である。66は須恵器の壺の底部である。内、底面に自然釉がかかっていることから、口の広い形の壺であろう。69・70は灰釉陶器である。

4層(写真6・7、図32、図版29)

Ⅱ区では67・68・71～76、Ⅳ区では77の須恵器、Ⅶ区では78の須恵器が出土した。67は玉縁をもつ白磁、68は内面が黒い黒色土器、71は緑釉陶器、72は白磁で高台周辺は露胎となっている。73は緑釉陶器、74は青磁、75・76は灰釉陶器である。77の左は全長4.0cm、同右は4.5cmで、粘土紐を捻ったようなもので、ジョッキ形須恵器に付く把手であろうか。78は長辺が5.5cmで、外面には縄文がある。内面には当て具痕はなく、板状工具でナデつけたような擦痕がある。断面は赤褐色(10YR5/4)で、よく焼けている。

6層(図版52)

Ⅶ区でウマの左上顎の第3あるいは第4前臼歯の破片が出土した。歯根は形成初期段階で、年齢は5～10才と推定される。古墳～奈良時代のものである。

7層(図33、図版29)

Ⅶ区から79・80が出土した。79はフイゴの羽口の先端である。SD701の上面から出土しており、この溝に伴うものかもしれない。80は弥生土器の可能性はある。

9層(図34、図版29)

Ⅳ区から壺の底部81、砂岩製の鍾84(71.1g)が出土した。Ⅵ区では縄文土器82・83、結晶片岩の石棒85、石製品の破片86が出土した。

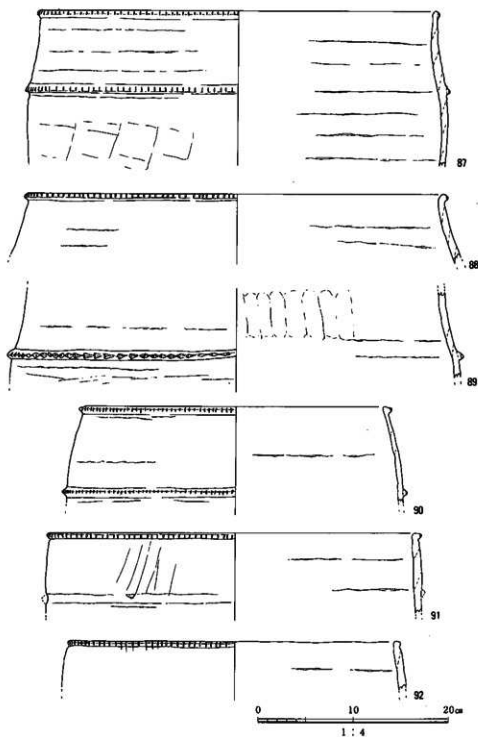


図37 窪区開析谷出土長原式土器実測図(1)

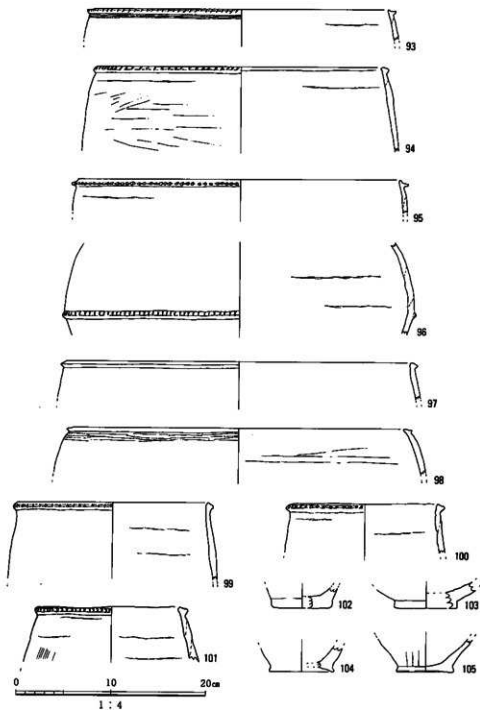


図38 篠区開析谷出土長原式土器実測図(2)

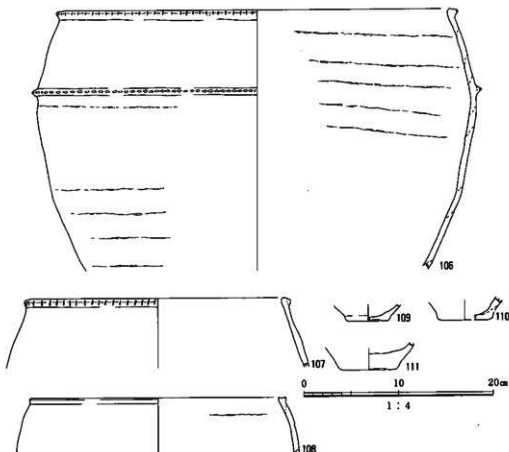


図39 VI区開析谷出土長原式土器実測図(3)

3) 縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構と遺物

i) 開析谷(図35～39、図版5・30～32)

南西から北東へと流れる自然の谷である。谷の幅はⅥ区では約35m、Ⅱ区の辺りでは30～40mとなる。底のレベルはⅥ区でTP+9.0m、Ⅲ区ではTP+8.7～8.8m、Ⅷ区では、谷の中心が開析谷のさらに東側に当たるため不明であるが、TP+8.8mより低いことは確実である。この谷は弥生時代前～中期に堆積した長原 8B層の水成層によって埋没する。

Ⅷ区ではこの開析谷の肩部から、まとまった量の長原式土器87～111が出土している。このうち87～106は生駒西麓産の胎土、107～111は白っぽい胎土の非河内系の胎土である。口縁があるものについては、いずれも口縁端部に突帯が巡る。突帯にキザミメがつくものが多いが、97・98・108にはキザミメがない。キザミメの有無は河内産の胎土・非河内産の胎土とも共通する。93・97は突帯を貼付けたあと、直下に工具の先端を押しあて、

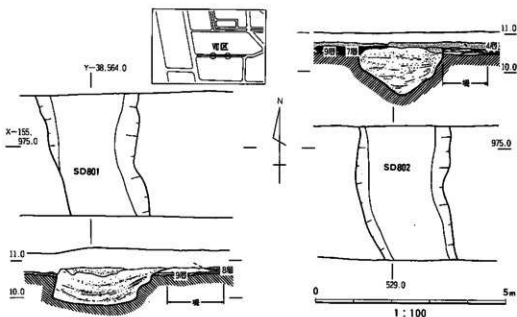


図40 Ⅱ区SD801・802実測図

引いた水平方向の条線がある。93は左右6.0cm、98は左右4.5cmと小片のため確実ではないが、条線はあまり長いものではない。数cm程度で器面から工具が離れている。106は全周の1/4程度が残っており、粘土紐の継目の傾きから左回りに粘土の紐を積み上げていったことがわかる。粘土紐の重なりは、確認できたものについてはすべて外傾であり、内傾のものはない。底部は7点あるが、深鉢の底なのか壺の底なのかはわからない。この中には弥生土器の底が含まれている可能性がある。109についてはほかのものに比べ、薄づくりである。浅鉢はないようである。

なお、河内産の胎土、非河内産の胎土の割合は、図に示したものの以外の細片も含め、体部の破片(約60点)では10～15%が非河内産、底部の破片(8点)では20%ほどが非河内産である。底部には弥生土器が含まれている可能性があるので、全体としては15%前後が非河内産の胎土である。

ii)水路(図35・40、図版6・7)

SD801・802

本地区を南から北に向って流れる水路である。東西方向の土層図からもわかるように、地山の高いところに位置し、自然の溝ではないことは明らかである。長原9層を切って掘られている。その後の調査でこの水路の、南と北への延長部分も見つかっている。SD801・802とも同じような規模である。上流のⅣ区から150mほど下流のⅡ区まで、幅は2.5～2.7m

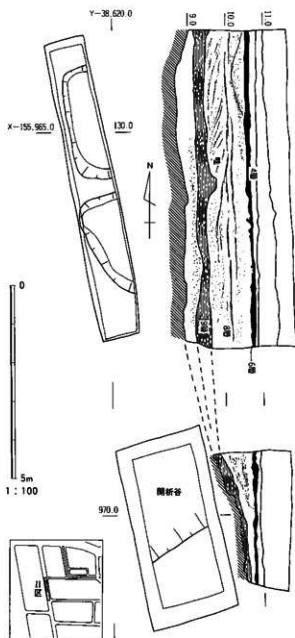


図41 Ⅱ区長原9層畦畔実測図

ように人工的に土を盛っており、畦であることはまちがいない。斜面につくられた田のためか、一筆の面積はさほど大きくはないようである。水田面のレベルは、当然のことながら谷の岸に近い南側が高く、谷の中心に近い北側がやや低い。開析谷の肩部という低いところに立地する水田なので、下に流れる谷底からの給水は不可能である。先に述べた東側

とあまり変化はなく、底のレベルもTP+9.5m前後である。Ⅶ区ではどちらの溝も右岸(東岸)に堤状の盛土が残っていた。その後のⅧ区の南側の92-5次調査では、SD801が40mにわたって検出された。ここでは両岸に堤状の盛土がなされていることが確認された。地山の高いところに配された水路で、水量を人為的に調節し、東側と西側の低いところに営まれていた水田に、必要に応じて水の出し入れを行っていたのであろう。しかし、本年度の調査範囲内では、水の調節を行うような施設は見つからなかった。この水路を埋めるのは、いずれの地点でも長原8層の砂層(8C層か)である。長原9層を切込んで掘られ、長原8層で埋没していることから、弥生時代前～中期の間に機能していた水路である。

iii) 水田(図41、図版5)

Ⅱ区の開析谷の東側肩部(右岸)で、長原9層のシルト層を耕土とする水田が見つかった。調査区の幅が1mほどであったため、畦が確認できたにすぎないが、断面写真に示した

の高いところを南北に貫く水路SD801から水を落としたのであろう。この水田は水成の長原8層の砂によって、谷もろとも埋没する。

iv) 不明遺構(図42、図版8)

長原8層の水成の砂層を外した段階で、長原9層の上面を掘込む遺構が確認されたところがある。I区では溝とピットが検出された。溝は断面がU字ないしV字形で、深さは0.05~0.10mで切合いもある。直角方向に曲るものや、弧状に曲るものもある。平面形からは竪穴住居の壁溝のようでもあるが、周辺から土器などの遺物は出土していない。何であったのかはわからない。

V区では、地山(長原13層)が周辺よりやや高いところに、長原9層が堆積していた。この上面で多数のピットが見つかった。ピットは直径0.1m前後で、深さは0.10~0.15mである。直径0.2~0.4mの円形、もしくは隅丸方形のやや大きいものもある。深さはやはり0.10~0.15mほどである。長原9層が堆積していても低いところで遺構は見つからなかった。やはりここでも、遺物は見つからなかった。

4) 古墳時代の遺構と遺物

i) 古墳

171号墳(図44・45、図版9・33)

I区の中央で見つかった。後世の削平と、近年まであった南北方向の溝に壊され

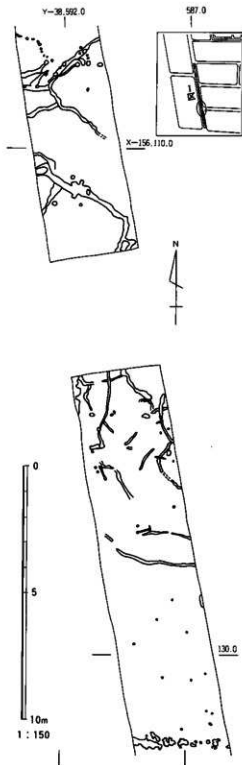


図42 I区長原9層上面検出遺構実測図

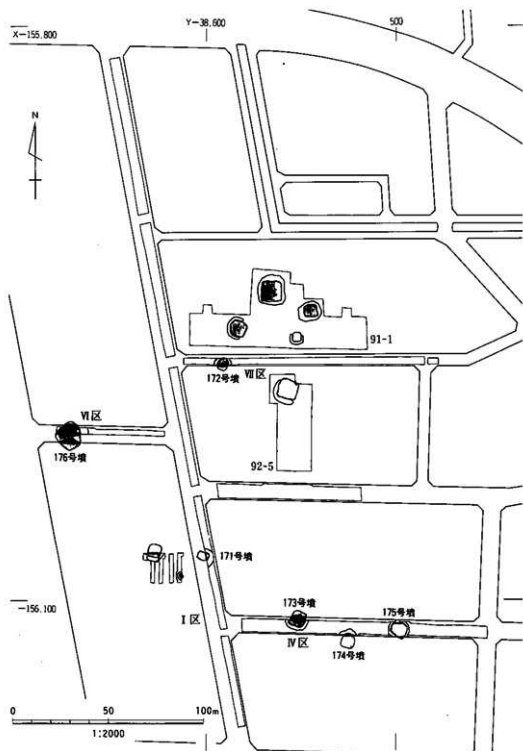


図43 長原遺跡東南地区南半古墳時代遺構配置図

て、かろうじて周溝が確認されたにすぎない。周溝の深さは0.1mほどであった。墳丘の盛土もまったく残っていなかった。周溝の曲り方から方墳であろう。

周溝の埋土から112～120の遺物が出土した。埴輪には黒斑がなく、竈窯で焼かれたものである。112は幅1cmほどの長方形の穴がスカシ孔状に開けられ、114には直径1cmに満たない円形の穴がある。このような通常のスカシ孔とは異なる特異な穿孔がある埴輪が、本古墳の特徴であろうか。114～116ともタガに切られる一次調整のヨコ方向のハケメのみで、二次調整のハケメはなされていない。113の朝顔形埴輪以外には形象埴輪らしきものはない。117～120は須恵器で、118は把手付高杯、119・120は把手付碗である(118～120は図版33)。5世紀後半の古墳である。

172号墳(図46・47、図版10・34)

Ⅷ区の西端で見つかった。後世の溝や攪乱で壊されているものの、一辺約5mの方墳であることがわかる。周溝の底面は凹凸が激しい。周溝の埋土の最下層は地山のブロックを多

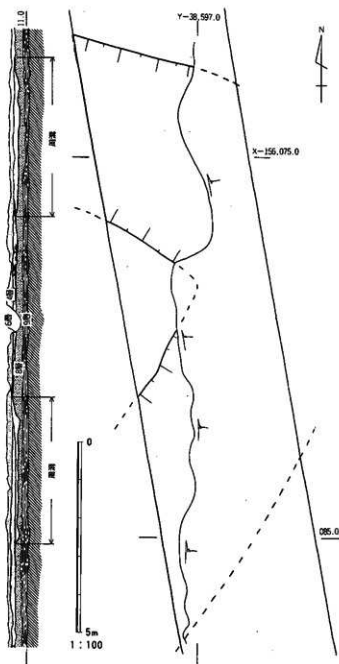


図44 171号墳実測図

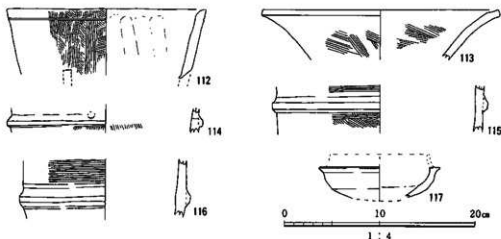


図45 171号墳出土遺物実測図

く含み、周囲から流れ込んだものではない。一旦周溝を掘上げたのちに、人為的に土を入れているのかもしれない。

古墳を壊す後世の南北方向の溝から須恵器121～123・126が出土した。本来この古墳に伴っていたものと思われる。121は口径48～49cmに復元できる大甕である。体部の破片もあるが、残念ながら口縁部から下には接合しなかった。126は大甕の破片である(図版34、下端の一辺は14cm)。湾曲のようすから写真左側の面が底面となるが、これと反対の面、すなわち甕の内面にも別の破片が軸着している(写真右側)。また、古い割れ口の断面にも軸着物や自然釉がかかっており、新しい割れ口との違いは明らかである。両面に軸着物があること、割れ口の断面にも軸着物や自然釉がかかっていることから、大甕の破片を利用した

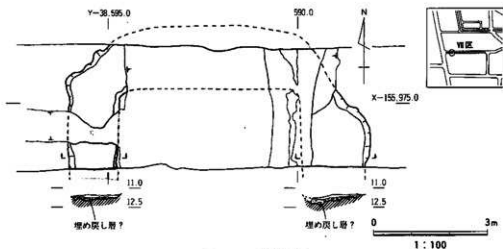


図46 172号墳実測図

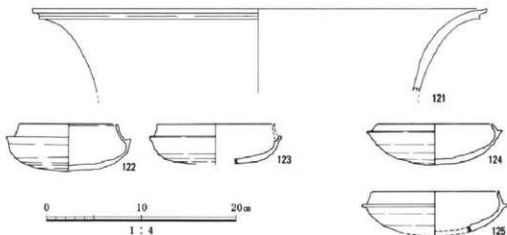


図47 172号墳周辺出土遺物実測図
 墳丘部：121～123 SD702；124 SD703；125

焼き台ではなかろうか。底に焼き台がくっついたままの製品(いわば不良品)が、この古墳に墓用として運ばれてきたのであろう。出土している須恵器から、5世紀後半でも中頃に近いころに造営された古墳と考えられる。周辺からの埴輪の出土は少なく、埴輪が樹立されていなかった可能性もある。

173号墳(写真8、図48・49、図版11・34)

Ⅳ区で見つかった、一辺約8.5mの方墳である。周溝の幅は1.5m前後で、後世の削平を受けているとはいえ、やや狭いことが特徴的である。また、この古墳も172号墳と同じく、周溝の埋土の最下層は周辺から流れ込んだような土ではない。粗粒砂と地山のブロックが混る土で、整地を思わせるような状況である。

周溝の底から127～129の須恵器が出土した。埴127は、底面に通常よくみられるタタキメがなく、ナデられている。内面にも底部を突き出したような痕跡はない。底の中心部、直径4cmほどが凹んで器壁が薄い。平底をつくったのちに、内側から棒状のもので底部を突き出して丸底をつく



写真8 173号墳全景(西から)

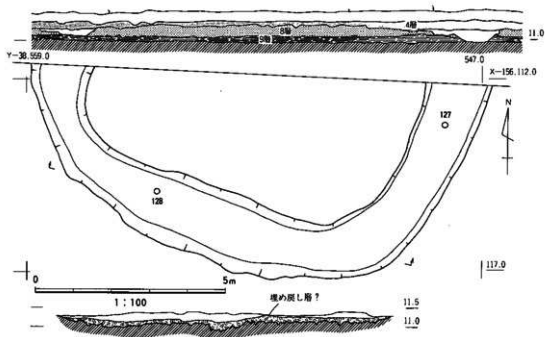


図48 173号墳実測図

るといったやり方[植野浩三1982]とはちがう方法で、丸底をつくっている。128の体部の下半はおおむね水平方向に削られており、把手は波状文が施されたあとに貼付けられている。127・128とも非常に細かい櫛で波状文をつけている。周溝内から埴輪は出土していない。5世紀後半でも中頃に近いころにつくられた古墳と思われる。

174号墳(図49・図版35)

調査地内で周溝の一部が見つかった。敷地いっぱいまで拡張したが、墳丘へのあがりは

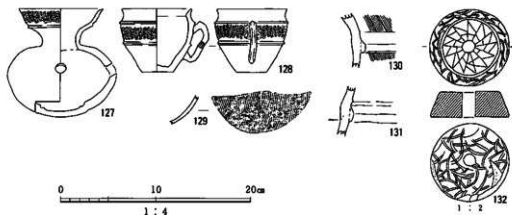


図49 173・174号墳出土遺物実測図

173号墳：127～129 174号墳：130～132

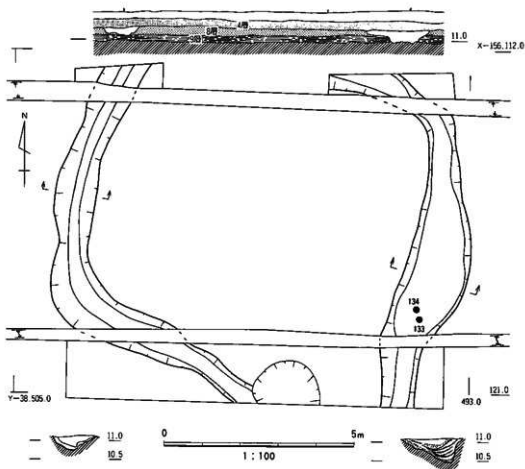


図50 175号墳実測図

確認できなかった。埋土から須恵器片、埴輪片が出土したため、古墳の周溝と判断した。

埴輪は130・131のように一次調整のタテハケメのみであり、5世紀後半の古墳である。周溝の底から浮いた状態で滑石製の紡錘車132(図は1/2)が出土した[伊藤純1989]。軸を差込む穴を穿孔したのちに、外面に直弧文状の線刻が施されている。重さは36.2gである。

175号墳(図50・51、図版12・35)

Ⅳ区で見つかった、東西約8.5m、南北約8.0mの方墳である。墳丘の盛土はすっかり削平されていて、周溝だけが残っていた。南東の角は直角にはならないが、調査区外となってしまう、本来の形は不明である。周溝の幅は1.0～1.7mで、173号墳と同じくやや狭い。この古墳の周溝の底には、172・173号墳で確認されたような整地層らしき土層はない。

東側の周溝の底から土師器133・134が出土した。133・134とも半分ほどしか遺存していないことから、もともと周溝の底に据え置かれていたものではなく、墳丘の裾近くに置か

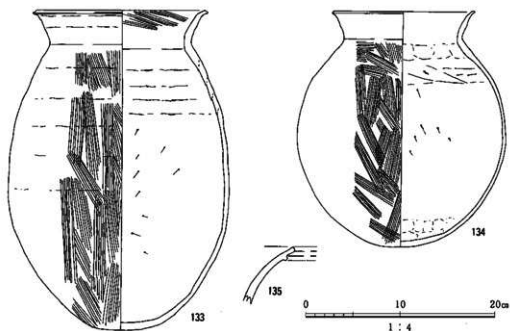


図51 175号墳出土遺物実測図

れたものが、古墳築造後、早い時点で割れた半分が周溝の中に転げ落ちたのであろう。133の外面にはタテ方向のハケメがあり、内面の下から1/3ほどにはヘラケズリの痕が残る。粘土紐の縦目は水平方向であり、粘土紐を輪積みにしていったことがわかる。134は頸部の直下を除いて、おおむねタテ方向に近いハケメが残る。内面はヘラケズリである。133は粗粒砂がポツポツと入る胎土、134は中粒砂がかなり多く含まれる胎土である。このように133と134はつくり方や粘土が異なり、同一人物の作とは考えにくい。135は須恵器の口縁

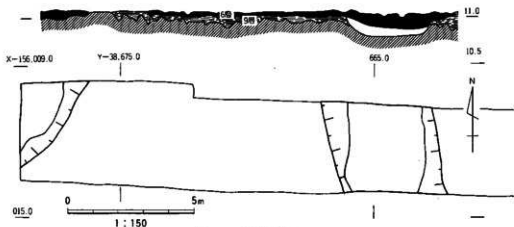


図52 176号墳実測図

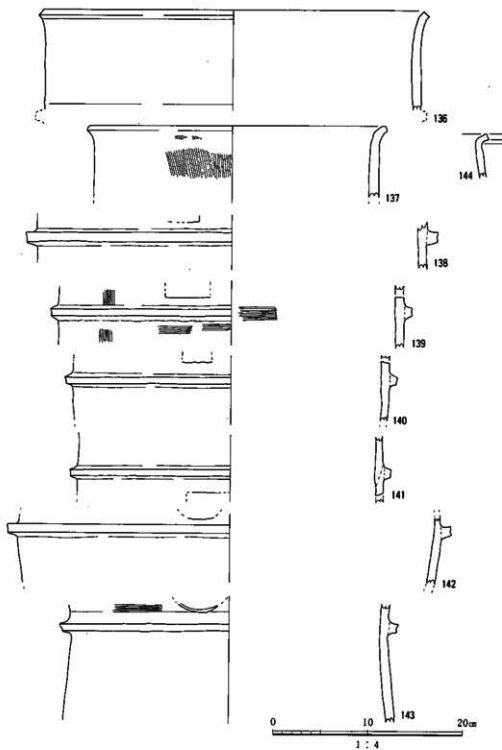


図53 176号墳出土埴輪実測図(1)

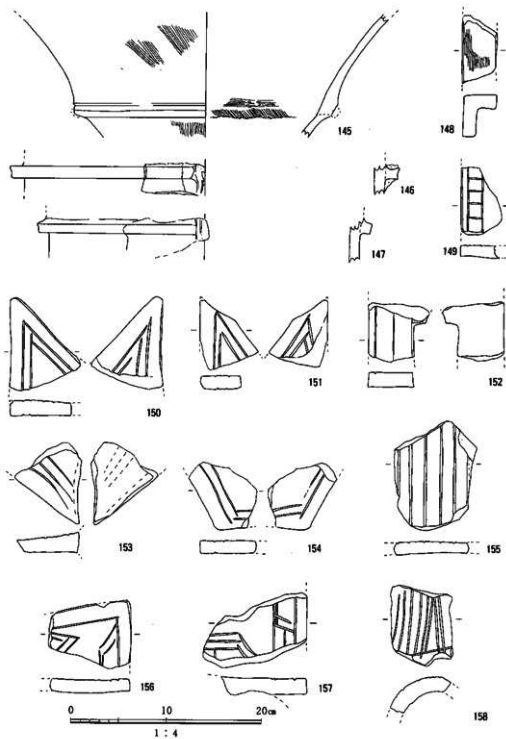


図54 176号墳出土埴輪実測図(2)

で、周溝の埋土から出土した。ほかには須恵器の小片があるのみで埴輪はなく、出土遺物は少ない。5世紀後半の古墳である。

176号墳(図52～54、図版13・36～38)

Ⅵ区の西端で周溝の一部が見つかった。東側の周溝は幅4.2m、深さは0.2m前後である。墳丘の盛土はすべて削平されている。周溝のようすから円墳ではなく、方墳と思われる。

周溝の埋土と近辺から、この古墳に樹立されたと思われる埴輪が出土した。円筒埴輪136～144のスカシ孔の形は、円形と方形の数はほぼ同じである。口径は30cm前後の小型のものと、45cm前後の大型のものがある。朝顔形埴輪145や、鱗付の円筒埴輪146・147もある。鱗は円筒に付けられたタガを切離したのちに貼付けている。衣蓋形埴輪150～154、盾形埴輪156・157、家形と思われるもの148・149や、本来の形がわからないもの155・158もある。円筒埴輪には黒斑がある。須恵器が伴わないことから、5世紀代の前半に築造された古墳であろう。

ii) 溝(図47・55、図版10・29・34)

各所で埋土のようすと、出土遺物から、古墳時代と判断できる溝が何本あった。しかし調査地全域で遺構面が削平されており、ここでは比較的遺存状態のよかったⅥ区の溝を報告する。

SD701

弥生時代中期に埋没した水路SD801に重なって検出された溝である。SD801は水成の砂で埋っており、このSD701の埋土は長原7層の黒褐色(2.5Y3/1)のシルトであり、違いは明瞭であった。

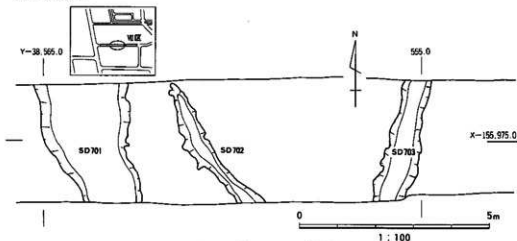


図55 Ⅵ区SD701～703実測図

埋土の上面から前述のフィゴの羽口79が出土した。

SD702

幅約0.5～0.8mで、北端は削平のためか途切れている。須恵器杯124と鉄滓が出土した。

6世紀後半中頃の溝である。

SD703

幅約1.0m、深さ約0.2mで、断面はU字形である。須恵器杯125が出土した。

6世紀前半～中頃の溝である。

なお、本調査地では建物や井戸、ゴミ穴と考えられるような土壌は見つからなかった。

5) 奈良時代の遺構と遺物(図56)

長原 6B 層の時期

i) 掘立柱建物

SB601(図57・58、図版14)

Ⅲ区で見つかった、1間×1間の南北方向の建物である。周辺にこれと組み合わせる位置に柱がなかったため、1間×1間の建物として復元した。梁間は1.3m、桁行は1.8mで面積は2.3㎡である。主軸は北で9°東に振る。

SB602(図57・59、図版14・39)

南北3間×東西2間以上の建物である。南北方向の柱間寸法は平均約1.6m、東西方向の柱間寸法はやや狭く、1.4mほどである。南北方向の柱筋は北で7°東に振る。

この建物を構成するSP01から羽釜159が、SP02からは土師器の皿160が出土した。159は生駒西麓産の胎土で、外面はていねいなタテ方向のハケメ、内面にはユビオサエの痕が明瞭に残る。器面のハケメ調整がよく残っており、周囲に転がっていたものが、柱を据える際に埋めた土に紛れたといった感じではない。掘穴の中に大割りの破片を立てて、意図的に埋め込んでいる可能性がある。160は底部内面に螺旋状の暗文があり、8世紀前半のものである。

ii) 溝

SD601(図57・58)

建物SB601の中心を南北に貫く溝である。方位はSB601と同じであるが、この建物に伴うものかどうかは不明である。幅約0.2mで、底面の中央に4～5cmの幅で少し深い部分がある。この深い部分のラインは、この溝を平面的に検出した当初から確認できていたので、

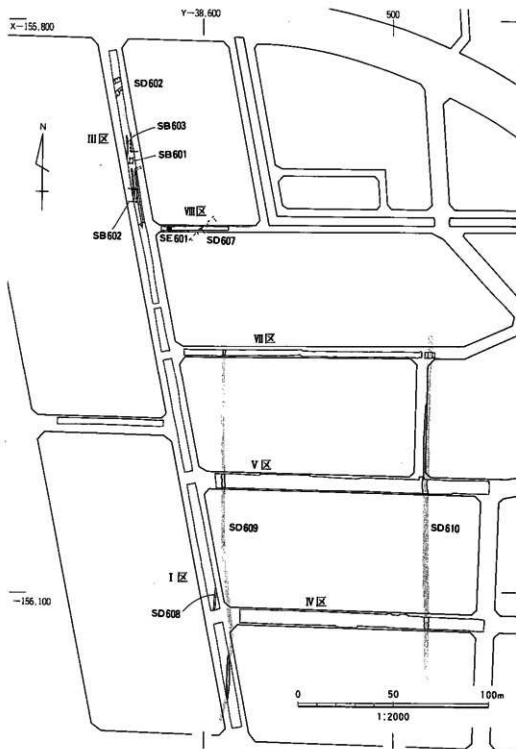


図56 長原遺跡東南地区南半奈良時代遺構配置図

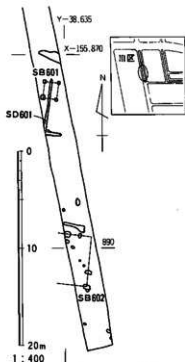


図57 III区SB601・602配置図

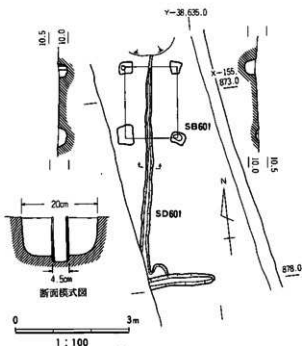


図58 SB601・SD601実測図

模式図に示したように板を入れた構造だったと考えられる。底のレベルは、南端の西壁にかかるところでTP+10.26m、北端の掘乱にかかるところでTP+10.18mで、南から北へ水を流す樋であろうか。

長原 6A層の時期

i) 掘立柱建物

SB603 (図60・61、図版15)

南北3間以上、東西1間以上の建物である。柱穴の底のレベルは一定していないが、いずれも平面形が似ており、一棟の建物として組み合うものと判断した。南北の柱列の柱間寸法は平均約1.5m、東西方向の柱間寸法は約1.8mで、柱痕跡は直径20cm前後である。南北の柱筋は北で7°東に振る。

ii) 井戸

SE601 (図60・62～64、写真10、図版16・39・40)

Ⅲ区の西端で検出された。掘形は東西1.15m、南北0.95mの隅丸の長方形に近い形をしている。検出面からの深さは約1mである。段掘りの掘形で、底に近くなると狭まり長方形となる。底近くからは曲物が、中層からは板材が出土した。これらの出土状態と掘形の形状

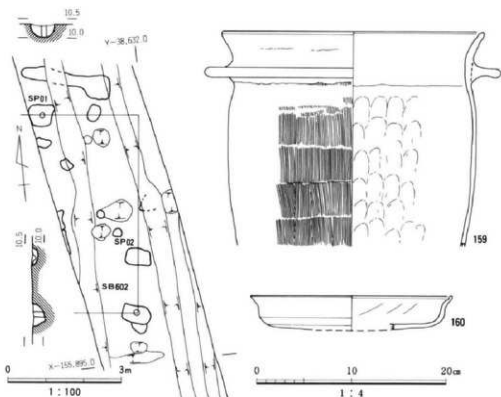


図59 SB602および出土遺物実測図

から、井戸の本来の構造は、底に高さ15cm(5寸)、直径30cmほど(1尺)の曲物を三段重ねて水溜にし、この曲物より上方には板材を用いて井戸側をつくっていたと想定できる。井戸側の平面形は東西0.50m、南北0.35mの長方形である。

周辺の井戸に近接する位置には、井戸屋形を復元できるような柱はなかった。この井戸は、後述するSD604～606によって区画された一画に位置している。

この井戸の埋土から161～168・171～173が出土した。161～163は須恵器の杯蓋である。164は土師器の鍋だが、外面にススの付着はない。165・166は土師器の杯で、内面に暗文はない。土師器甕167は底面から口縁の端までススが付着している。168の甕は、体部

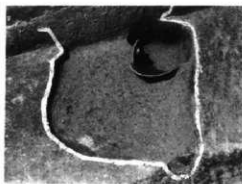
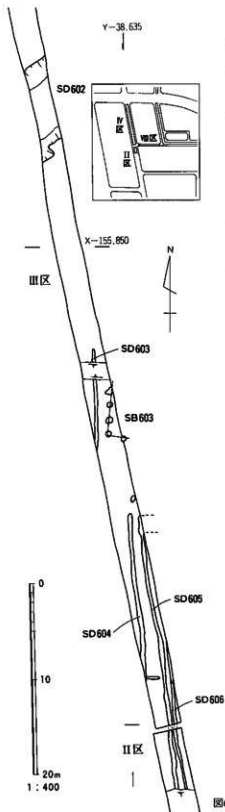


写真9 羽釜159出土状態



最大径より下にススの付着がみられる。171は須恵器の甕、172は製塩土器である。173は土師器甕の底部である。外面にはハケメがみられ、ススが付着する。内面には、須恵器でみられるような同心円文らしきものがある。一見するとハケメにも見えるが、凹んだ部分により明瞭に残っており、板状の工具でナデつけるハケメであれば、凹んだ部分には条痕が残りにくいのが通例である。須恵器の中型の甕をつくる際、まず平底につくった底部を突き出して丸底にするやり方があるが、これと同じ技法が土師器にもあったことがうかがえる資料である。

出土している遺物から、この井戸は8世紀後半～末頃に埋められたことがわかる。

iii) 土壌

SK601(図60・63、図版39)

Ⅵ区、井戸SE601の東へ約8mにある土壌である。東西2.5m、南北1.3m以上で、深さは0.8mである。

埋土から169・170の土器が出土した。169は土師器の高杯の脚である。外面にはヘラケズリの痕が残り、内面には左上がりの粘土紐の継目が残る。脚を成形する段階では、完成品としての正位置とは天地が逆の状態で粘土紐を巻上げており、この工程で、粘土紐は左回りに積み上げられていることがわかる。170は須恵器壺の口縁部である。

SE601と同じころの土壌である。

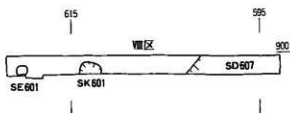


図60 II・Ⅲ・Ⅵ区遺構配置図

iv) 溝

SD602(図60・65、図版40・41)

Ⅲ区の北で検出された、幅約8m、深さ約1mの南西—北東方向の溝である。南岸の肩部が西端でやや広がっているのは、小溝が流れ込み、合流点になっているからである。流れ込む小溝は、幅0.5m、深さ0.5mの規模である。埋土は水成の細～粗粒砂が互層になっている。底面は凹凸が激しく、水流が強かったことがうかがえる。調査区内では護岸施設などは見つからなかったが、周辺の水田への灌漑用の水路として利用された溝であろう。

この溝の埋土から174～184の遺物が出土した。174は8世紀初頭の土師器杯で、南岸の肩部の小溝との合流点で出土した。内面には暗文があり、底外面には「上総」の墨書がある[黒田慶一1988]。175は8世紀後半の土師器の皿で、暗文はみられない。176は口径8.5cm、高さ5.5cmの土師器の小品である。実際に煮炊きに使えるような大きさではなく、祭祀用と考えられるような甕である。177も小さな破片であるが、176と同じような大きさに復元できる甕である。178は土師器の甕である。端正な口縁で、須恵器のそれに近い形をしている。内面には同心円文は確認できないが、外面には明らかにタタキ具の痕跡がみられる。「韓式系土器」に分類されるものであろう。179・180は須恵器の杯蓋、181は壺の底部、182は甕である。以上は奈良時代後半以前の時期のものであり、この溝が長原5層の洪水層によって埋没したことを物語っている。183は口縁端部から下へ4.5cmほどタテハケメがあり、それより下はタテハケメを切るヨコナデがある。破片の下端は、そのまま真っぐ下に延びようではなく、外に広がる湾曲がはじまる。鐙が付くのであろうか。184は羽釜である。183・184とも平安時代中頃に出現するものに似ている。このSD602が埋没したのち直上を覆うのは、瓦器を含む地層、長原4層であるため、上層の遺物が混入したのかもしれない。

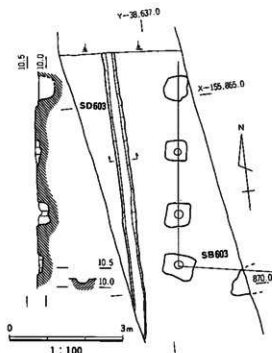


図61 SB603・SD603実測図

SD603(図60・61、図版15)

幅0.35～0.40m、深さ0.10mほどで、長さ7.7mにわたって検出した。ほぼ正南北方向の溝である。位置関係から見てSB603に伴う溝であろう。

SD604(図60、写真11、図版15)

幅0.3～0.4m、深さ0.1mほどで、北で5°西に振る。北の端の地点が確認できる。

埋土から製塩土器185・186が出土した。

SD605(図60・66、図版15・41)

幅0.3～0.4m、深さ0.05～0.10m、北で3°西に振る。この溝もSD604の北端より北には延びず、東に折れる。

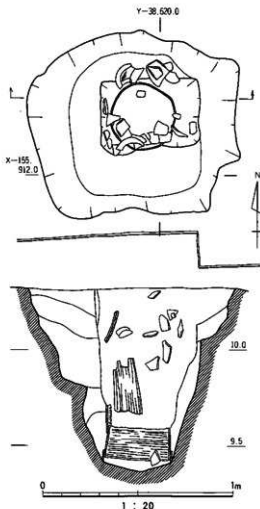


図62 Ⅲ区SE601実測図

埋土から187～191の土器が出土した。

187は手捏ねのミニチュア土器で、長原遺跡では8世紀後半～9世紀初めにみられるもので、上層の遺物が混入している可能性がある。188は土師器の杯で、器面が荒れていて暗文の有無はわからない。189は須恵器の杯蓋、190は鉄鉢形の須恵器で、外面をていねいにナデたあと、ヨコ方向へのヘラミガキを施す。191は土師器の鍋で、外面を水平方向にヘラケズリしている。このヘラケズリは、頸部のヨコナデの後になされている。

SD606(図60、図版15)

幅約0.3m、深さ0.10～0.15m、長さ16m以上あり、北で3°西に振る。

SD603～606は形態が似ており、南北方向に平行していることから、いずれも集落内を区画する溝と思われる。SD604・605は北端が同じ地点であることから、層位的には確認できていないが、同時に存在している掘直された溝であると思われる。

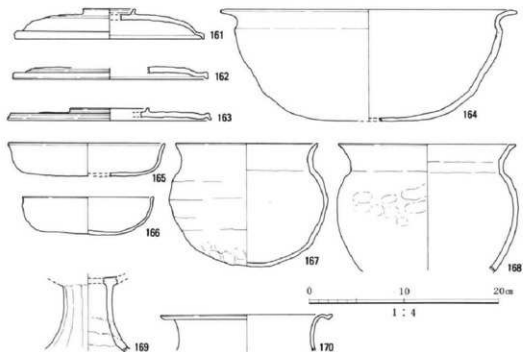


図63 SE601・SK601出土遺物実測図
SE601：161～168 SK601：169・170



図64 土師器壺173内面拓影(1/2)

SD607(図60)

罎区の東端で西側の肩が検出された。水成の砂とシルトが互層に調査区外へ延びる。調査区の東端に溝の

最深部がきそうなことから、15～16m幅の溝と考えられる。もともと本地点の下層には、地山を削込んで縄文時代晩期～弥生時代中期まで間析谷があり、この谷が土砂によって埋

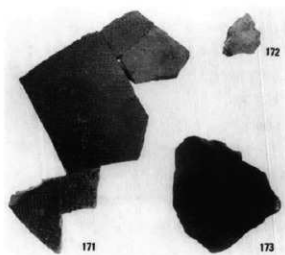


写真10 SE601出土遺物

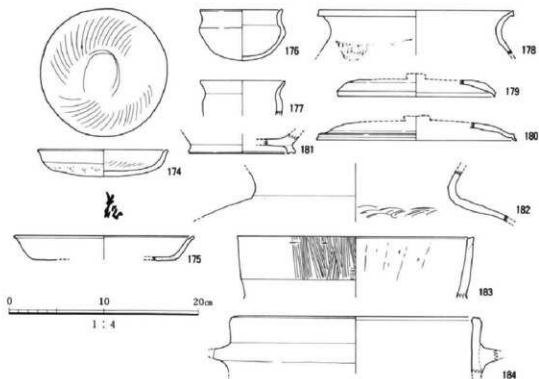


図65 Ⅲ区SD602出土遺物実測図

没し平坦に近い土地になっても、水が抜ける道になっていたものと思われる。互層になった水成の砂とシルトがこの溝を埋めている。

SD608 (図67・図版41)

I区の中央を走る南北方向の溝である。幅は北の方が0.5m以上あり、南になるに従いだんだん細くなるが、これは溝のベースとなっている長原8層の上面がわずかな

がら南方へ高くなっているため、削平されたものと思われる。深さは0.1m前後である。Ⅱ・Ⅲ区で見つかった南北方向の溝SD603～606と似た形態である。

土師器の甕192が出土した。

SD609 (図56・69～71、図版41)

V区の西端と、Ⅷ区で延長部分が見つかった。V区とⅧ区では南北に70mほど隔たって

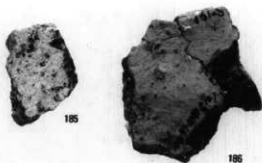


写真11 Ⅲ区SD604出土埴土器

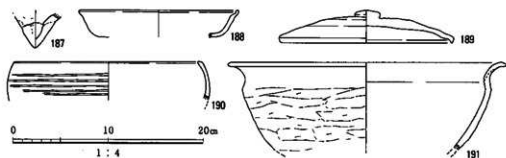


図66 III区SD605出土遺物実測図

いるが、方向が同じことと、長原6層が埋土であることから同一の溝と考えた。幅はV区では1.0～2.2m、Ⅵ区では1.2～1.5mである。底のレベルはV区ではTP+10.7m、Ⅵ区ではTP+10.5mで、ほとんど勾配がない溝である。

V区では土師器の細片しか出土しなかったが、Ⅵ区では196～199の土器が出土した。196は土師器の碗で、外面にユビオサエの痕がある。197は土師器碗で器面が荒れており、調整は見えない。198は須恵器の杯で、この溝が切る172号墳に伴うものかもしれない。199は土師器の甕で、器面が荒れていて調整はわからない。

SD610(図56・68～71、図版17・41)

南北約140m離れて検出された溝であるが、SD609と同じく、方向と埋土のようすからⅣ・Ⅵ区で検出された溝を同じものと考えた。Ⅳ区とⅥ区の間、V区の東への延長部分を1988年度に調査したが(88-1次調査)、ここでも予測される位置に同じ規模の溝が確認できたので、やは

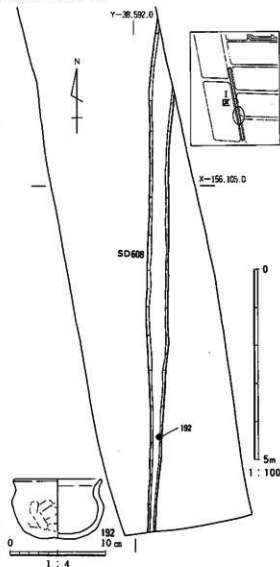


図67 I区SD608および出土遺物実測図

第Ⅱ章 調査の結果

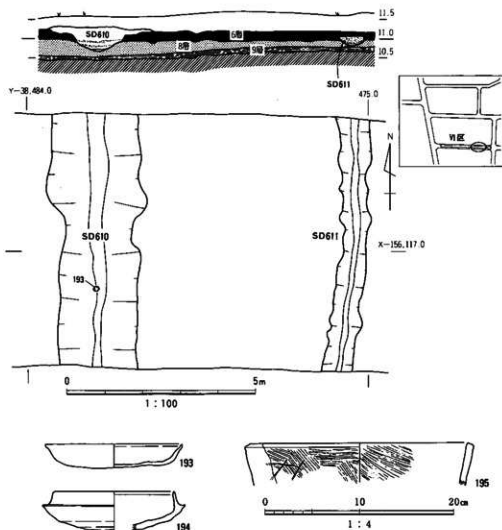


図68 Ⅳ区SD610・611および出土遺物実測図

り一連の溝と考えてまちがいない。底のレベルはⅣ区ではTP+10.7m、Ⅵ区ではTP+10.0mである。

Ⅳ区にかかる部分から193～195が出土した。193はSD610の底から出土した土師器の皿である。194は須恵器の杯、195は線刻のある埴輪である。Ⅶ区からは、土師器碗200、須恵器201が出土した。奈良時代の後半～終わりに埋ったことがわかる。SD609とSD610の距離は、Ⅴ区では110.5m、Ⅵ区では110.0mとなる。110m前後といえば、1町(約109m)という単位に近似した数値である。したがって、SD609・610とも坪境の溝と思われる。

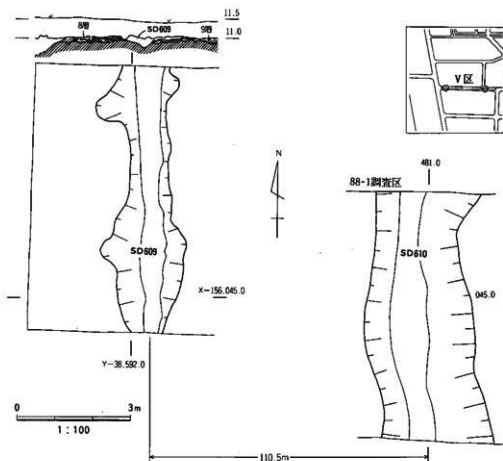


図69 V区SD609・610実測図

SD611(図68)

Ⅳ区で検出されたSD610と平行する、南北方向の溝である。層位的には明らかにSD610より下位にある。SD610に先行する溝であろうか。

6) 平安～鎌倉時代の遺構と遺物(図72)

i) 掘立柱建物

SB401(図73・74・76、図版18・42)

Ⅱ区の北端で見つかった、南北2間、東西2間以上の建物である。西側の柱筋は、ほぼ南北方向である。南北方向の柱間寸法は1.7m、東西方向は1.8～2.0mである。

この建物の南西隅の柱SP04から、土師器皿223が出土した。11世紀ごろのものである。

周辺にはいくつかの柱穴らしき遺構がある。調査範囲が狭いため、ほかの建物は復元で

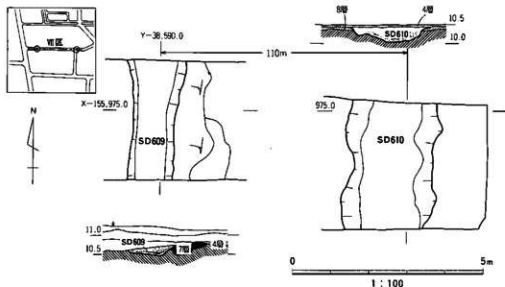


図70 VII区SD609・610実測図

きなかったが、何回かの建物の建替えがあったものと思われる。

SB401として組み合う柱ではないが、SP05からは瓦器碗220が、SP06からは製塩土器221が出土した。

ii) 櫓

SA401(図73・74・76、図版18・42)

Ⅱ区の北端からⅢ区へ延びる櫓で、北で4°西に振る。北の端は確認できたが、南は調査区の外へ延びている。柱間寸法は最長2.5m、最短1.7m、平均1.95mである。

SP01から土師器皿203、黒色土器碗204が出土した。SP02から土師器盤207が、SP03から土師器碗205・206が出土した。この櫓の柱穴から出土した遺物には瓦器はなく、203～

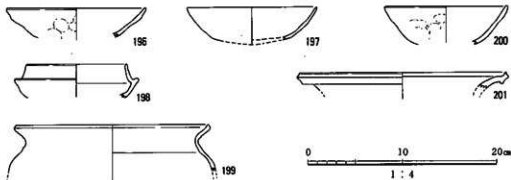


図71 SD609・610出土遺物実測図

SD609：196～199 SD610：200・201

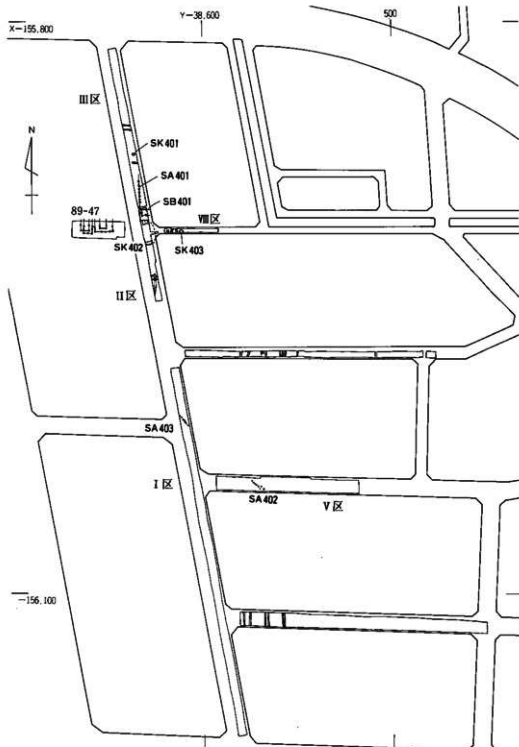


图72 長原遺跡東南地区南半平安～鎌倉時代遺構配置図

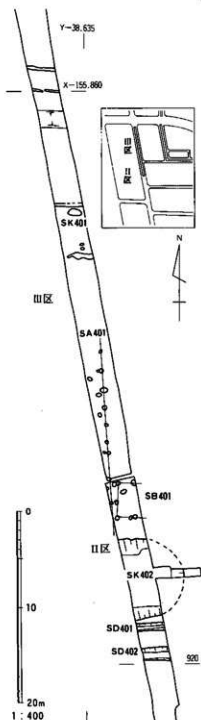


図73 II区遺構配置図

207はすべて瓦器出現以前の時期のものである。

橋SA401は、位置関係から、掘立柱建物SB401に伴う可能性が高い。

SA402(図72)

V区で見つかった柱列である。削平されていて深さは数cmと浅いが、なんらかの遺構であることはまちがいない。建物として組み合うような位置に柱が検出されなかったことから、櫓と考えた。北で47°西に振る。柱間寸法は平均0.7mである。

SA403(図72)

I区の北半で見つかった柱列である。SA402と同じく、検出面からの深さは数cmほどである。周辺にこれと組み合うような柱がなく、櫓と考えた。北で41°西に振る。柱間寸法は平均0.7mである。

SA402とSA403との位置関係を見ると、ほぼ一直線上に位置している。検出された面も長原4層であり、一連の櫓の可能性はある。しかし、周辺ではこのような北西-南東方向の軸をもつ遺構は見つかっていないため、長原4層より新しい時期の遺構であるかもしれない。

iii) 土壌

SK401(図73・76)

Ⅲ区で検出された、東西1.3m、南北0.8mの長円形の土壌である。深さは0.1mと浅い。埋土から黒色土器202が出土した。

SK402(図73・76、図版18・42)

南北約8.5m、深さ約1mで、当初東西方向の流路と考えたが、東側の拡張区で肩部が確認できたので土壌であることがわかった。

埋土から208～219の土器が出土した。208は内黒の

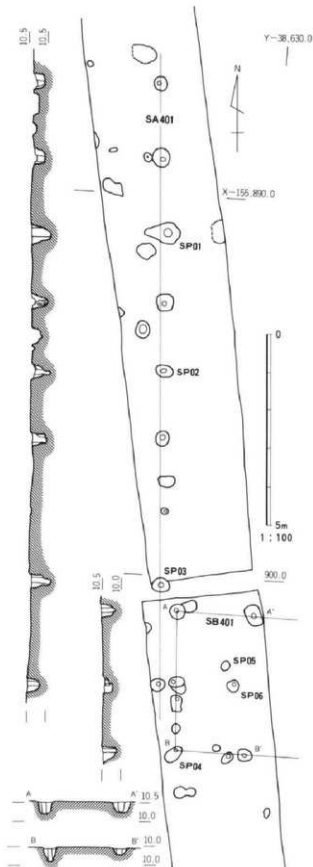


図74 SB401・SA401実測図

黒色土器である。209～212は瓦器、213～215は土師器小皿、216は土師器台付皿の高台、217は土師器椀、218は瓦質の鉢である。219は土師器の甕で口縁の端までススが付着する。

12～13世紀ごろにかけて埋った土壌である。

iv) 溝

SD401(図73・75・76)

幅0.70m、深さ0.45m、埋土は粘土やシルトのブロックを含む砂で、人為的に埋められている。東で5°北へ振る。

土師器椀224が出土した。

SD402(図73・75・76、図版18・42)

幅1.3～1.5m、深さ0.5m、埋土はシルトや粗粒砂が互層になり、ラミナがみられる。ほぼ東西方向である。白磁碗222が出土した。内底面には圈線が巡る。高台周辺は露胎となっている。

SD401・402は長原4層を掘込む溝である。SK401は埋没後に4層が覆っており、層位的にSK402(古)―SD401・402(新)という関係である。

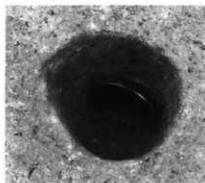


写真12 瓦器碗220出土状態

v)その他

SK403(図72)

Ⅱ区の南側の壁際で見つかったため、全体の形は掘めなかった。平面形は直径0.7mの円

形と思われ、深さは0.5mの素掘りの穴である。長原3層が埋土となっている。瓦器が1点出土した。

7)小結

本調査区の南北を貫くSD801・802は、周辺の低い水田へ水を落とすことを目的とした灌溉用水路であることはまちがいない。高所を流れるこの水路から水を落とすことによって、Ⅱ区の開析谷斜面で水田耕作も可能になったのであろう。弥生時代前～中期の水田経営のあり方がよくわかる。

前の時代には耕地であった土地が、5世紀の前半～中頃になると墓域になる。(5世紀前半～中頃)176号墳→172・173・175号墳→

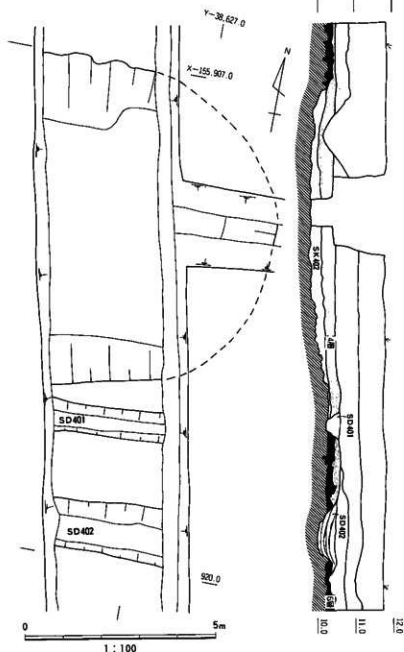


図75 SK402・SD401・402実測図

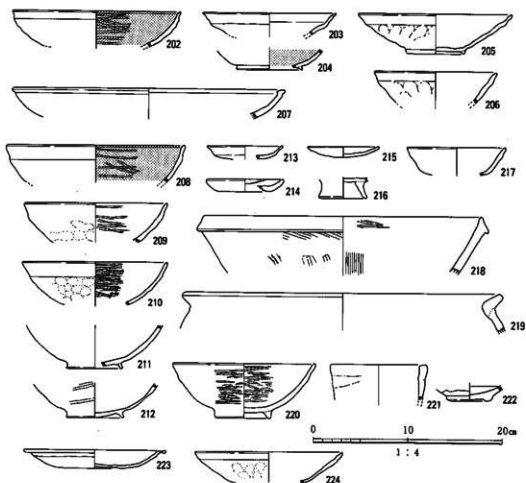


図76 各遺構出土遺物実測図

SK401 : 202 SA401(SP01) : 203・204 SA401(SP03) : 205・206 SA401(SP02) : 207
SK402 : 208~219 SP05 : 220 SP06 : 221 SD402 : 222 SB401(SP04) : 223 SD401 : 224

171・174号墳といった順序で築造されたのであろうか。

奈良時代の遺構としては、Ⅱ・Ⅶ区で屋敷地の一部が、Ⅲ区では灌溉用水路SD602が見つかった。11世紀にはⅡ・Ⅲ・Ⅶ区が屋敷地の一部となっていたこともわかった。

(伊藤)

第4節 長原遺跡東南地区北半の調査

1) 調査地の層序(図78・79)

沖積層上部層Ⅰ

長原1～3層：室町時代以降、現代までの地層である。

長原4層：淡青緑灰色または灰色の細粒砂ないし砂礫である。Ⅳ区の中央部がもっとも厚く、0.5mほど堆積する。また、Ⅰ区の北半のように下位の長原5層が高いレベルまで堆積しているところは、後世の削平のためか、本層はない。

長原5層：水成の中粒砂～黄褐色シルトである。Ⅰ区北の谷状の地形のところや、Ⅲ区の長原6層段階に流路があったところには厚く堆積し、これらを埋没させている。

長原6層：暗灰色のシルト層である。Ⅰ区南半の地山(長原13層)が高いところは薄い。北端のⅣ区では、0.8m近い厚さで堆積する。本層上面を長原5層が覆っている部分には、水田の畦畔が遺存する。

沖積層上部層Ⅱ

長原7層：Ⅰ区の南半や、Ⅱ区の地山の高いところには堆積していない。本層は水田の耕土となっており、上面に水田の畦畔が残る。

長原8層：黄色ないし緑灰色の水成の砂層である。Ⅳ区の中央部やⅤ区の東半、Ⅵ区に堆積する。

長原9層：灰色(7.5Y4/1)のシルト層である。Ⅴ区の東半や、Ⅵ区に堆積する。

沖積層下部層

地山層(長原13層)：Ⅰ区の南端でTP+9.8～9.9mともっとも高く、北東方向へ下がっていく。Ⅳ区東半ではTP+7.5mとなり、Ⅴ区の東端ではTP+7.0mでも地山に達しない。

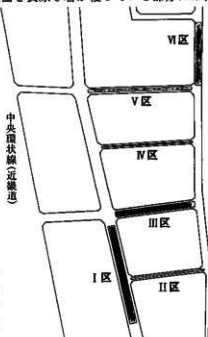


図77 長原遺跡東南地区北半調査地位置図

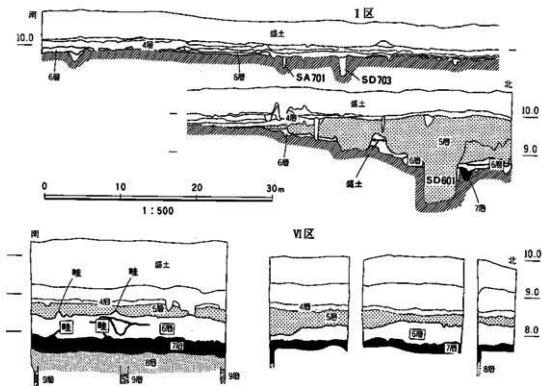


図78 南北方向(Ⅰ・Ⅵ区西壁)土層図

2) 各層出土の遺物(図80、図版43)

2～3層

225～238の遺物が出土した。Ⅲ区で225～228・230～236が、Ⅴ区で229が、Ⅵ区では237・238が出土した。225は外面にクシメ、内面には蓮花文がある。いわゆる珠光青磁と呼ばれているものである。226・228は白磁、227は外面に蓮弁のある青磁である。230～232は白磁で内面に線刻があり、高台周辺は露胎である。白磁234の内面は蛇の目状に軸剥ぎがなされている。233は須恵器、235・236は緑釉陶器である。237は革帯に付く石製の丸鞆で、左右4.2cm、天地2.5cm、表面はていねいに磨かれ、裏面に帯に縫いつけるための糸通しの潜り孔が3箇所ある。238はミニチュアの羽釜である。

Ⅰ区の3層中から、ウマ(*Equus caballus* Linnacus)の上顎第2後臼歯M₁が出土している(図版52)。歯根は未完成で、年齢は5才弱と推定される(註1)。歯冠のエナメル質部分での計測値は、長さ26mm、幅24mm、下側での高さ68mmである。また、Ⅳ区では下顎遊離歯の破片が出土している(図版52)。

第II章 調査の結果

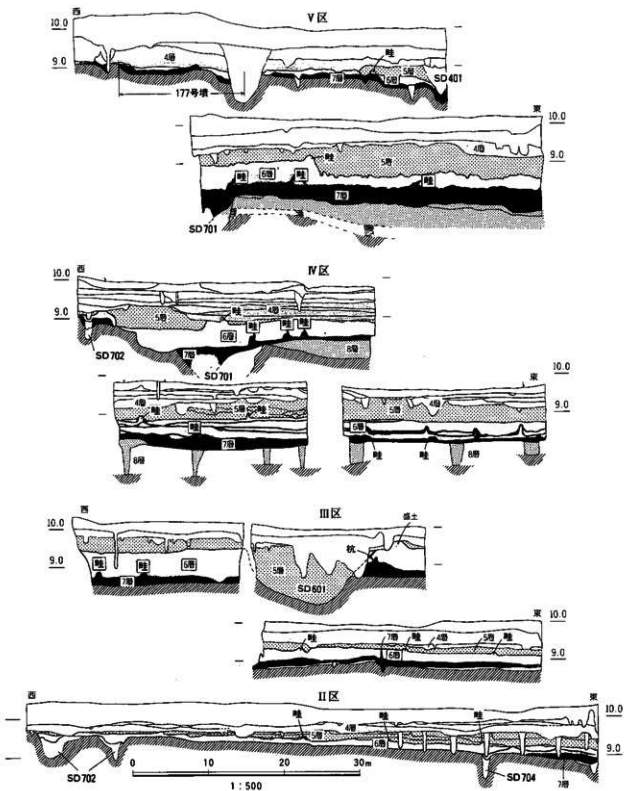


図79 東西方向(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区北壁)土層図

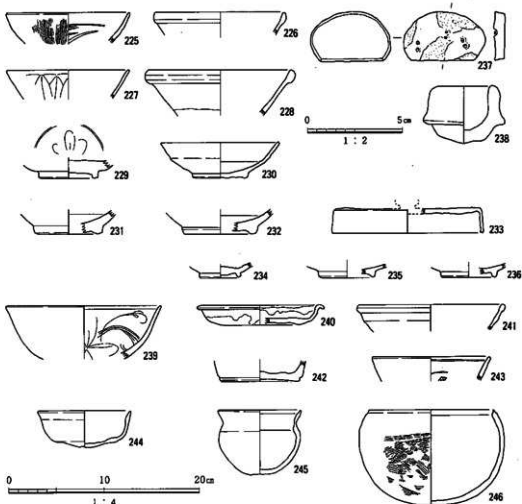


図80 長原2～7層出土遺物実測図

2～3層：225～238 4層：239～242 5層：243 7層：244・245 不明：246

4層(写真13)

I区から239・240、IV区から242、V区から241・247・248が出土した。239は内面に画花のある青磁、241は白磁である。240は口縁の内・外面のみに釉薬をかけた、灰釉の皿である。242は須恵質の焼きで、底面には糸切り痕が明瞭に残る。外面はていねいにナデられていることから、灰釉陶器の可能性もある。247は焼き締め陶器で、外面に自然釉がかかる。常滑焼であろうか。248は備前焼と思われる。

5層

V区で青磁243が出土した。内面に画花らしき文様がある。

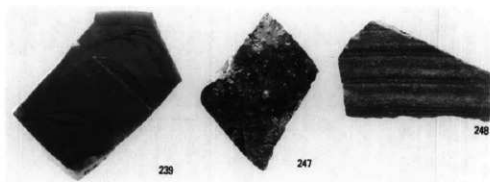


写真13 長原4層出土遺物

6層

V区で、延喜通宝249(図版43)が出土した。外径19.2mm、厚さ1.9mm弱、重さ1.93gの銀銭である。延喜通宝は907(延喜7)年に初鑄された、皇朝十二銭のうち11番目のものである。出土地点の本層の上には長原4層が堆積していたことから、4層に含まれていたものが混入したと思われる。なお、V区本層中からウマの骨が出土した。これは稿を改め、詳述する。

7層

V区から須恵器244、土師器小型甕245が出土した。

出土層位は不明であるが、土師器の鉢246がV区から出土している。外面にハケメがあり内面はナデている。飛鳥時代のものと思われる。

(伊藤)

3)長原6層中から出土したウマの骨(図版24・52)

V区の長原6A層からは、残存状態のよいウマの骨が出土した。しかし、取上げた後の崩壊がひどく、保存処理したのち、出土時の形状に復元するよう努めたが充分でない。資料は左右の下顎骨と右腕骨の2点である。

下顎骨は右側の臼歯6本と左側の第3前臼歯 P_3 から第1臼歯 M_1 の範囲はごく一部を欠損するのみで残りはよい。右側第1切歯 I_1 から犬歯Cと左側第1切歯 I_1 は、歯槽に歯根を

表2 ウマ右下顎臼歯の計測値 (歯冠咬面の長さ×幅mm、括弧を付したものは現存値を示す)

第2前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1後臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯
(30.0) × (14.9)	28.5 × 17.1	27.3 × 16.3	24.8 × 15.3	26.1 × 13.9	31.8 × 13.3

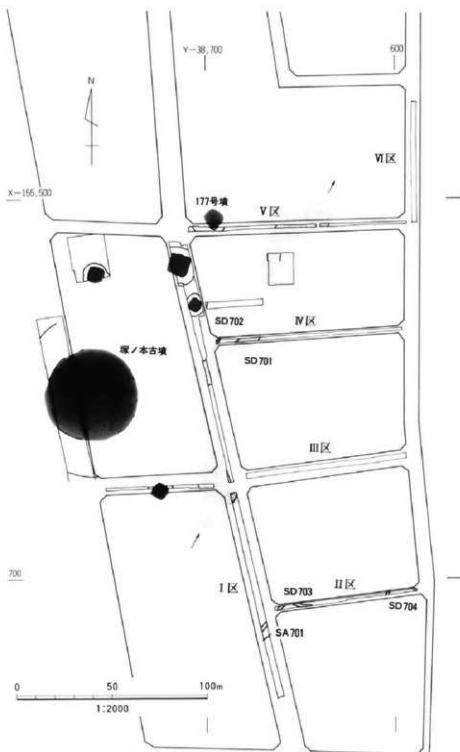


図81 長原遺跡東南地区北平古墳時代遺構配置図

残すのみで、歯冠は粉々に割れてしまっている。左側第2切歯I₂から犬歯Cの範囲は破損している。また、右側の下顎角付近までの破片はあるが、下顎頭の破片は見あたらない。左第2後臼歯M₂より遠心側も同様である。出土状態は左頬側が上になっていたため、これらの部分は耕作によって欠損した可能性がある。発達した犬歯があることから雄と考えられる。また、年齢は歯根の形成状態からみて5～10才と推定される。

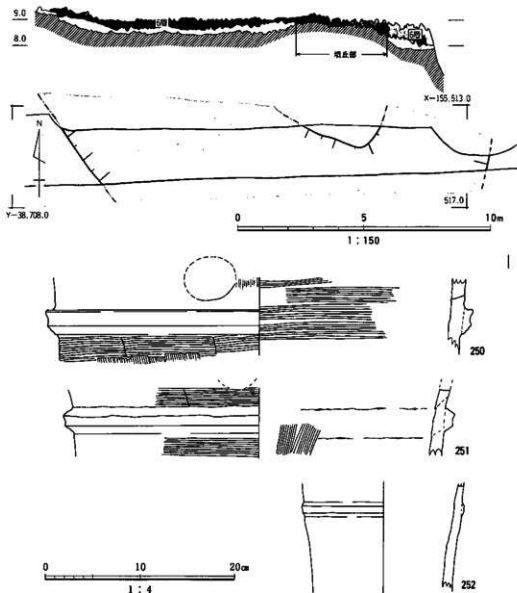


図82 177号墳および出土遺物実測図

次に、形質について、残りのよい右側臼歯部分を用いて記す。まず、咬合面での臼歯列長〔Driesch1976〕の計測箇所(No.6a)は169mm、歯槽端間の臼歯列長(同6)は175mm、第2前臼歯前縁での下顎体高(同22c)は56mmであった。各臼歯の歯冠長と幅は表2に示すとおりである。咬合面での臼歯列長を、ほぼ同時期の大阪市城山遺跡と平城京址から出土したウマと比較する。松井章氏によると、前者は156mm(ただし上顎)、後者は165・167・170mm(すべて下顎)である〔松井章1988〕。両例とも在来馬でいうところの中型馬と報告されている(註2)。今回の個体は169mmなので、奈良時代の畿内のウマでも大きな部類に属するものと推測される。

橈骨は出土時にはほぼ全体が残っていたが、その後崩壊してしまった。近位端から骨幹部分は細片になり、かろうじて遠位端のみが観察できる状態である。それによると、骨端は癒着しており、成獣と考えられる。計測値は欠損部分が多く満足なものは得られなかった。

さて、上記の骨が出土したV区の長原6A層上面の水田面には、南北方向で0.3~0.4mの段差があり、東西方向の畦畔がある。正確な出土地点が記録にされていないことは惜しまれるが、当時の水田の区画の要所に当るようなところに位置している。完形に近い下顎骨と橈骨が出土したのは、単なる廃棄の結果ではなく、なんらかの意味があるのかもしれない(註3)。しかし、水田耕土中から見つかったもので、人為的に埋めた状況ではなく、面的な骨の分布状態を検証できなかったことから、これ以上の推測は避けたい。

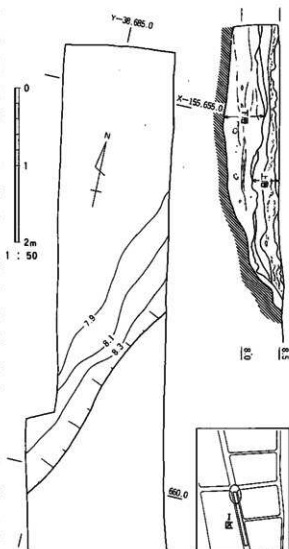


図83 I区 SD701実測図

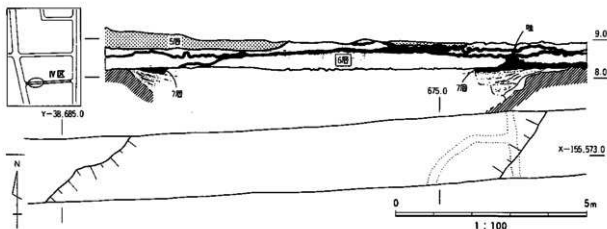


図84 IV区 SD701実測図

長原遺跡では、古墳時代の集落からウマの骨が多く見つかることは強調してきたことはある。飛鳥時代以降には耕作地からの出土がめだつようになる。これは、ウマの利用方法の変遷に関して重要なことと考えられるので、機会を改めて時代ごとのウマの骨の出土地点の集成を行う必要がある。

(久保和士)

4) 古墳時代の遺構と遺物

i) 古墳

177号墳(図82、図版44)

V区の西半で見つかった。墳丘の端と、周溝の一部が確認できたのみである。長原6層の段階で水田耕作によって削られ、墳丘の盛土はまったく残っていない。墳丘端部の形から方墳と考えられる。墳丘に相当する部分の上面のレベルは、TP+8.9m前後である。西側の周溝の幅は6~7mで、底のレベルはTP+8.8mである。東側の周溝は幅4~5mで、底はTP+8.6mである。東側の溝の底が西側の底より低いのは、地山が西から東へ低くなっているからであろう。この古墳に確実に伴うと判断できる出土状態の遺物はない。

250~252(図版44)は古墳の近辺から出土した埴輪である。周溝埋土を覆う長原6層中から出土したものである。いずれにも黒斑はない。250は丸いスカシ孔、外面は一次のヨコハケメ、この上にタテハケメがあり、内面にはヨコハケメがある。251も丸いスカシ孔で、一次のタテハケメがある。250・251は直径40cm前後に復元できる。252は直径15~16cmと小型のものである。器壁が荒れていて確実ではないが、外面の調整にハケメが用いられてい

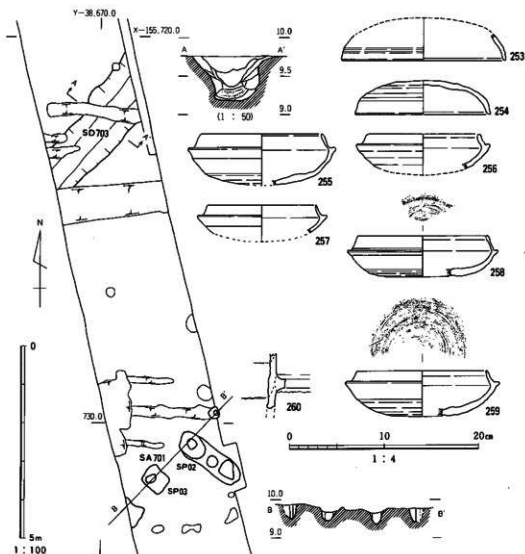


図86 I区SD703・SA701および出土遺物実測図

やはり埋没した後は長原7A層が覆い、水田となる。調査面積の関係から底までは調査できなかったが、各地点で確かめられた埋土の状況から、古墳時代以前から水が抜ける自然の谷状の地形で、それが徐々に自然の力によって埋ったことがわかる。すっかり埋没し、平坦になったのち、7世紀の中頃、長原7A層の黒色粘土を耕土とする水田となる。

SD702(図85)

Ⅳ区の西端での地山がもっとも高いところに掘られた、自然流路SD701と平行する方向の溝である。幅約1.2m、検出面からの深さは0.5mである。図85の土層図に示したように、

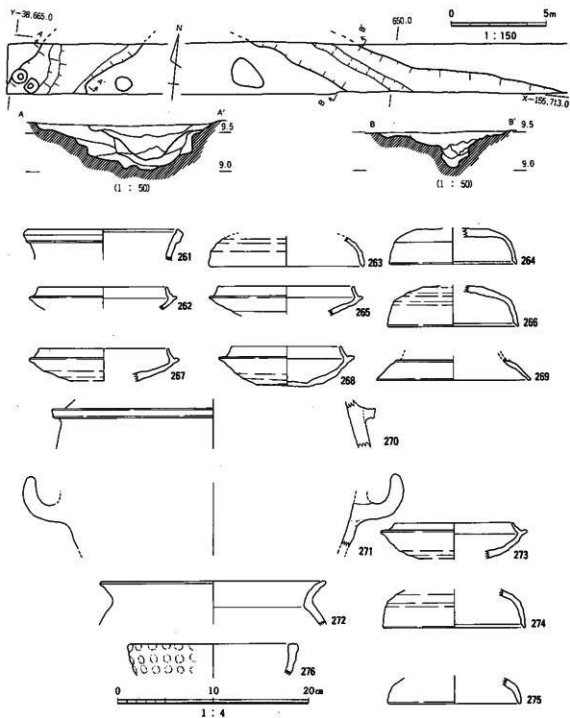


図87 II区SD703および出土遺物実測図

上層：261～270 下層：271～276

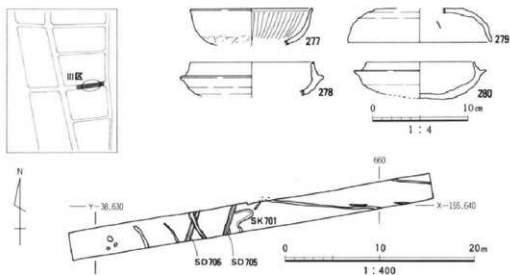


図88 III区遺構および出土遺物実測図
SD705：277・278 SD706：279 SK701：280

長原7A層の段階で一度埋ってしまったのちに、再び掘直されている。溝の肩のレベルはTP+9.0m、底はTP+8.5mである。地山は東に向かって徐々に下がり、上記の自然の流路SD701の西岸の肩部でTP+8.6mである。地山の高いところに位置していることから、人工の溝であることはまちがいない。層位的にはSD701と同じ時期である。SD701の上流で、このSD702に水を落としたものと思われる。地山の高いところに水を導くことによって、周辺の低いところの水田に灌漑したのであろう。

この地域にとって重要な機能をもっていたことは、一度埋没してしまったのちにも、同じ位置で掘直されていることからもうかがえる。掘直された溝も、再び



写真14 III区検出遺構(東から)

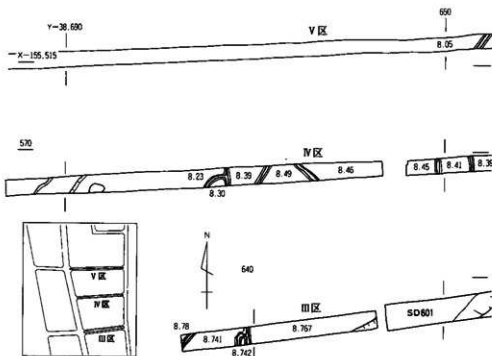
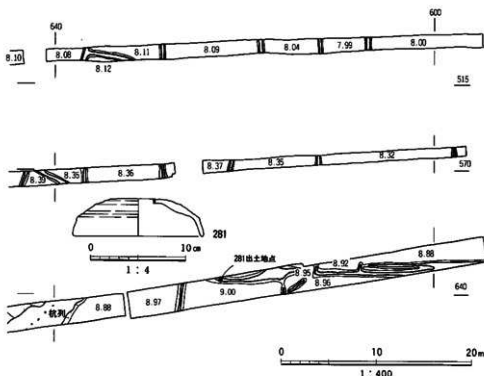


図90 Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区长原7層水田およびⅢ区畦畔出土実測図

長原6層の時期に埋没してしまう。その後、長原5層の時期にも、やはり同じ位置に細い溝らしきものがあるのを北壁の断面で確認した。この溝の後身であろうか。

SD703(図81・86・87、図版19・20・44・45)

I・Ⅱ区で見つかった溝である。I区では幅1.2m、検出面からの深さは約0.6m、二段掘りである。埋土の下から1/3ほどは、粘土と砂が互層になる水成層が堆積する。これより上は人為的に埋められている。この溝はⅡ区の西端に延び、Ⅱ区の北側の調査区外で直角に折れ、再び調査区内に現われる。Ⅱ区の西側の部分では幅2.5m、検出面からの深さは約0.6mである。東側の部分は幅1.1m、深さ0.6mで、なだらかに落ちるテラス状の斜面から、幅0.45mのU字形の溝が掘込まれ、二段掘りようになる。西側部分の埋土は上・下2層に分けられる。最下層には厚さ0.05mほどの水成層が堆積している。上層は地山の粘土のブロックが多く混ることから、人為的に埋められていることがわかる。東側部分でも、最下層には水成の黒色粘土が0.15mほど堆積している。I・Ⅱ区の西側部分は、一度没水によって埋ってしまったものを再び掘直したような状況がうかがえる。この部分の方向、南西→北東は自然の地形が下がっていく方向なので、水の流れによって運ばれた土砂によって一



度埋ってしまった溝を、掘直したと考えられる。

I区の部分からは、253～259の須恵器が出土した。これらの多くは二段掘りの肩部から出土したものである。258・259の内面には、同心円文の当て具が何回か当たっている痕が明瞭に残る。II区の西側部分では、上層と下層とを掘り分けることができた。261～270は上層から、271～276は下層から出土したものである。261は須恵器の壺、262～268は杯・杯蓋、269は高杯の脚部である。270は朝顔形埴輪の肩部であろうか。黒斑がある。271は甗、272は土師器の甕、273～275は須恵器の杯・蓋である。276は生駒西麓産の胎土の弥生時代中期の壺の口縁部である。下層には古い時期の遺物が含まれるものの、大半は上層から出土した遺物と時間差はない。水に運ばれてきた土砂で埋没し、直後に掘直されたが、なんらかの事情でほとんど埋められてしまったことがうかがえる。

SD704(図81)

II区の東半で検出された溝である。幅約1.1m、深さ0.6m、最下層には、厚さ0.2mほどの粗粒砂とシルトが互層になる水成層が堆積する。

埋土から土師器の丸底壺の底部が1点出土した。

SD705(図88、写真14、図版46)

Ⅲ区の東半で検出された幅約0.5m、深さ約0.2mの溝である。埋土は水成層ではない。

土師器碗277、須恵器杯278が出土した。277には暗文があり、底部はヘラケズリである。

SD706(図88、写真14、図版46)

SD705と平行する溝で、幅約0.5m、深さ約0.15mである。

須恵器蓋279が出土した。

このほかに、Ⅲ区の東半には何本かの似たような規模の溝があるが、いずれも古墳の周りに巡らされたような周溝ではない。近辺に古墳があったことをうかがわせる遺物もない。建物などは確認されていないが、建物の周辺を区画するような溝である。

iii) 櫓

SA701(図86、図版19)

I区の南半で、柱4本分が見つかった。柱穴の平面形は0.6m×0.5mの方形である。遺構面が削平されているものの、検出面からの深さはいずれも0.5mほどあり、しっかりした構造であったことがうかがえる。調査区内で全体を確認し得たSP02とSP03は、柱抜き取り穴が確認でき、この櫓が自然の状態で朽ち果てたのではなく、人為的に改変されたことが推定される。櫓の方向は北側に位置するSD703と平行することから、溝と一体のものであろう。SD703との芯々距離は約7.5mである。

SP03の抜き取り穴から、円筒埴輪260が1点出土した。

iv) 土壌

SK701(図88、図版46)

Ⅲ区の東半で見つかった土壌で、SD705と切合っている。SD705(新)－SK701(古)という関係である。平面形は不定形で、検出面からの深さは0.1m弱で浅い。底面はかなりの凹凸がある。須恵器杯280が出土した。

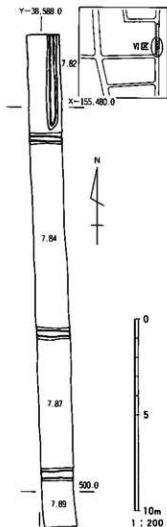


図91 VI区長原7層水田実測図

第II章 調査の結果

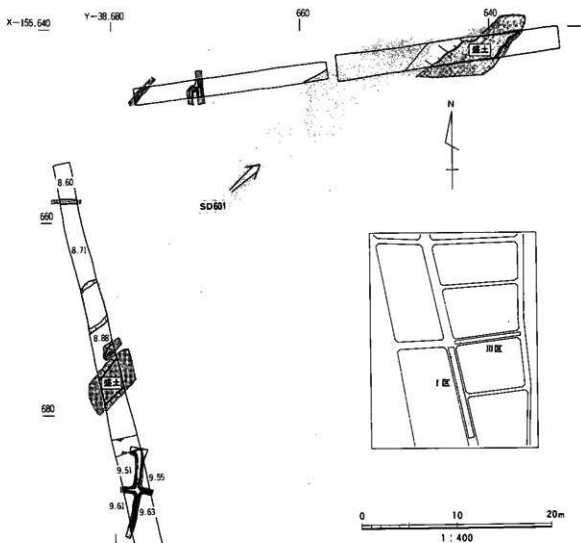


図93 I・II区遺構配置図

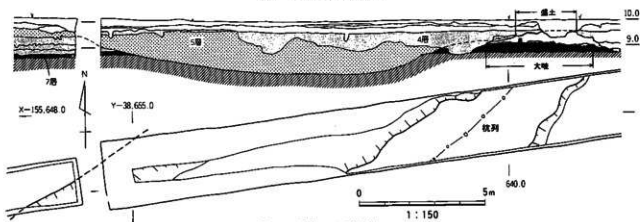


図94 III区SD601夾断面図

5) 飛鳥～奈良時代の遺構

と遺物(図89・92)

飛鳥～奈良時代(7世紀後半～8世紀)には、当調査区は一面に水田が拡がっている。水田は2時期以上あり、層相から下位の水田は長原7A層、上位の水田は長原6層を耕土とする。また、これらの水田と係わると思われる流路SD601がある。水田の層位に合わせ、2時期に分けて報告する。

長原7層の時期

i) 水田(図90・91、図版21・46)

I・II区の、長原7層の粘土～シルト層が堆積していないところを除いて、各調査地区で畦畔が見つかった。長原7層の段階ではほぼ平坦な土地になったとはいえ、水田面のレベルを見ると、III区の中央に近いところが高くなり、北東方向へ低くなり、最北端のVI区とは1m以上の比高がある。III区からV区までは東西方向の細い調査区のため、東西方向の畦が検出されたところは少ないが、南北方向の調査区であるVI区では、東西方向の畦も検出されており、当然のことながら、東西-南北方向の畦が張り巡らされていたと思われる。調査区全域を見渡すと、おおむね東西-南北という方位を目指していたことがうかがえる。

水田の耕土層からの出土遺物は少ないが、III区の東半、東西方向の畦畔の中から須恵器杯蓋281が見つかった。特に水口での祭祀を連想さ

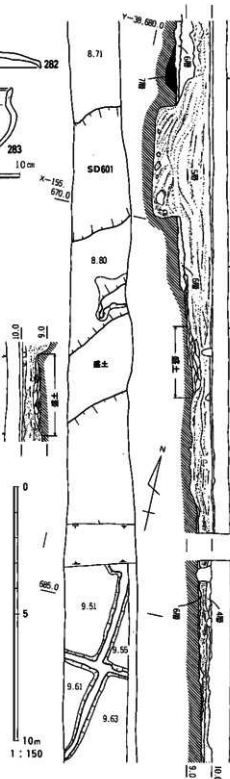
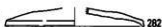


図95 I区SD601および出土遺物実測図

第Ⅱ章 調査の結果

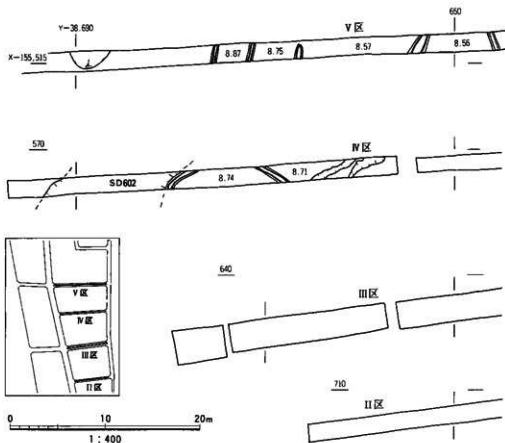


図96 Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区长原6層水田実測図

せるような出土状態ではなかったが、水田の時期を知ることができる数少ない遺物である。

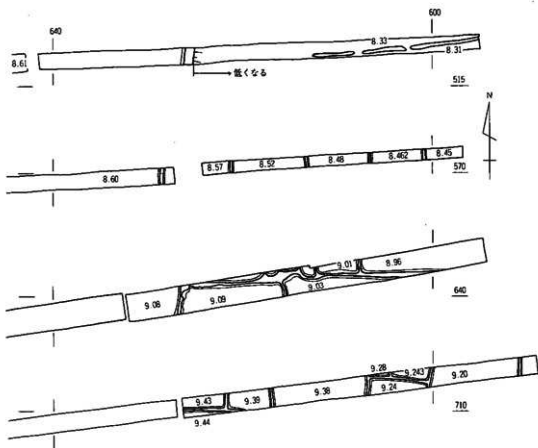
長原6層の時期

i) 溝

SD601(図93～95、図版22・46)

I区の北端からⅢ区の中央部へ、南西から北東方面に流れる溝である。I区では幅約4.5m、岸からの深さは約1m、底のレベルはTP+7.5mである。Ⅲ区では幅約5.5m、岸からの深さは1.5mほどあり、底のレベルはTP+8.0mである。I区でもⅢ区でも右岸(東岸)には、岸からやや離れた位置に堤状の盛土がある。この盛土が長原6層の段階でなされていることは、土層断面の観察から明らかである。SD601は最終的に長原5層の砂礫層で埋没する。

一方、Ⅲ区ではこの堤状の盛土をはずした段階、すなわち長原7A層の上面で杭列が見つ



かった。すでに、この段階でSD601の前身となる溝が存在し、この溝に向って低くなる水田面から水を逃がさないようにするためか、あるいは大水の際の、あふれ出る水に抗するためか、下端の幅で3m前後の堤を築き、さらに、杭を打ち込み、なんらかの施設をつくっていることがわかる。I区では長原7層段階でこのような施設は確認できなかった。

I区のSD601を埋める水成層から須恵器蓋282、土師器小型甕283が見つかった。8世紀中頃のものである。したがって、SD601は長原7A層の時期から長原5層の砂礫層で埋没するまで、100年ほど水が流れていたといえる。

SD602(図96)

IV区の西端近くで検出された、南西から北東に流れる自然の流路である。幅約8m、深さ約0.4mで、最終的に長原5層の水成の粗粒砂で埋っている。もともとこの流路のやや東側の

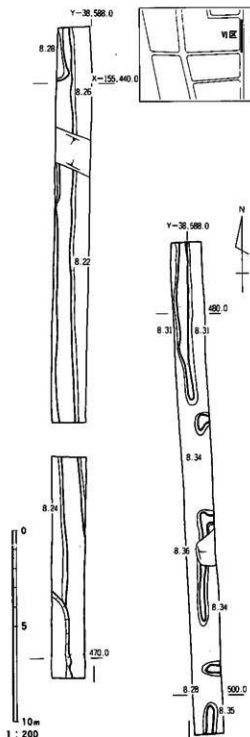


図97 VI区長原6層水田実測図

下位、長原7A層をはさんで1mほど下には、古墳時代から7A層までの間、水が抜けていた流路SD701がある。SD701が埋没した後も、地形的にはやや凹んでいて、水が抜ける道になっていたものと思われる。この流路に向けて水田の水が流れ出るのを防ぐためか、東岸に沿ってやや太い畦畔がある。また、水田面上には数多くの踏込みが残るが、流路の底にはまったく踏込みはなかった。

ii) 水田 (図96・97、図版22・23)

長原7層が分布していなかったⅠ区やⅡ区でも、長原6層のシルト層が堆積し、水田となっている。各所で長原5層の水成の砂層によって覆われた畦畔が見つかった。Ⅰ区の堤のある流路SD601以南では、流路向って低くなる地形を克服するために、水田耕土である長原6層の黒色粘土層より下の地山までを削込んで、水平面をつくり出している。Ⅱ区の畦畔の間隔にバラツキがあるのは、西端と東端の間、東西方向40mで、地山のレベルはTP+9.3mからTP+8.8mへと下がっていくことを克服するためであろう。土地の傾斜に合わせ、必要に応じて畦畔をつくっている。Ⅲ区の流路以東では、長原7層の時期の畦畔とほぼ同じ位置に、長原6層の段階でも畦がつくられる。Ⅳ区では、西端に近いところにある流路の東岸の肩に沿ってやや太い畦がある。西側の流路向って下がる土地で、水田を営むための努力であろう。Ⅴ区は西から東に水田面が下がっていくが、東端から約30mの所の

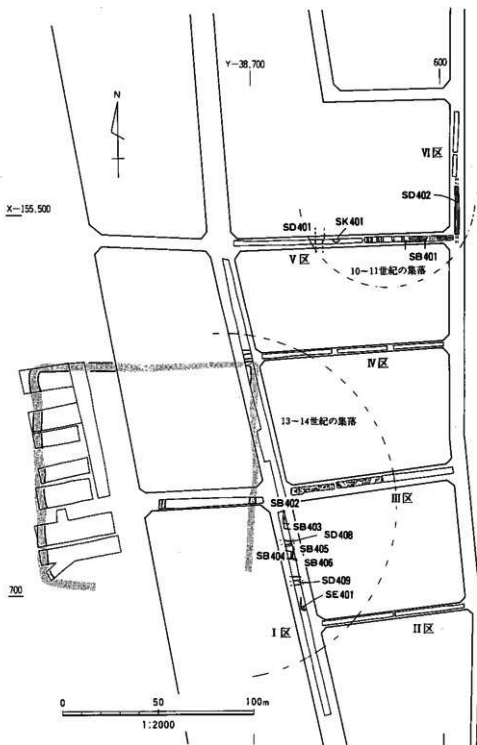


図98 長原遺跡東南地区北半平安～鎌倉時代遺構配置図

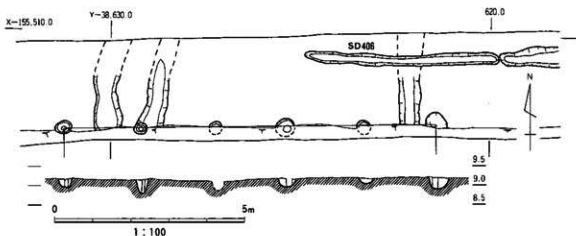


図99 V区SB401実測図

幅約0.7mの太い畦を境に、西側と東側の水田面の比高が0.5mほどある。VI区全体が条里制地割の、東西方向の坪境にすっぽり入る位置に当る調査区のほぼ中央を、南北方向の畦が貫く。北半(X-155,470)では、下幅1.5m、上幅は1.0m前後であるのに比べ、南半では下幅は1.0m以内となり、上幅は0.5m以下となる。畦畔の太さが変化するのは、南北方向のX-155,470の付近が、条里制地割の東西・南北の坪境の交点となっているためであろうか。

6) 平安時代の遺構と遺物(図98)

時期を決したのは、遺構の埋土に瓦器が入っているか否かを基準とした。瓦器出現以前を、便宜的に平安時代とした。この時期の遺構は、V・VI区のみに分布し、ほかの調査区ではこの時期の遺構はなかった。

i) 掘立柱建物

SB401(図99)

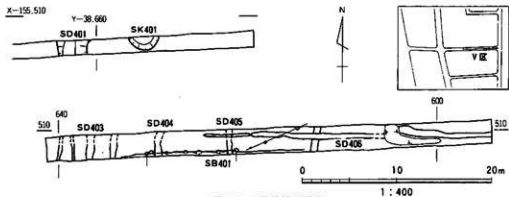


図100 V区遺構配置図

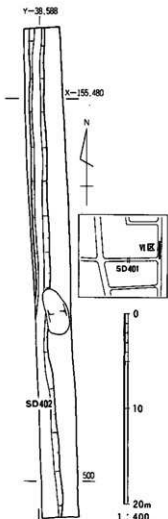


図101 VI区SD402実測図

現代の溝によって柱穴の南半分が壊されて、かろうじて平面形の一部が確認できたのみである。東西5間(9.9m)で、北側には組み合う位置に柱がないので、南方へ延びる建物と思われる。柱間寸法は最小1.9m・最大2.1m、平均1.98mである。柱痕跡からみて用いられた柱の直径は10~15cmである。この柱筋はほぼ東で7°北に振る。西端から2本目の柱穴は、南北方向の小溝に切られていることから、建物SB401(古)―南北方向の小溝(新)という関係である。柱穴から時期を知る手がかりになる遺物は出土しなかったが、層位的に見て、同じ面で検出された溝との先後関係から、瓦器出現以前の時期の建物と判断した。

ii) 土壌

SK401(図100・102、図版46)

東西3.5m、南北1.5m以上、深さ約0.3mで、北半は調査区外に延びる。

埋土から土師器の甕289が出土した。10世紀ごろのものである。

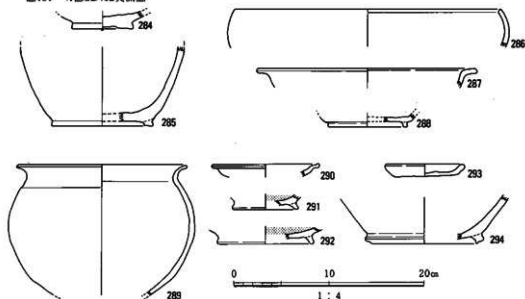


図102 V区出土遺物実測図

SD401 : 284・285 SD403 : 286 SD404 : 287・288 SK401 : 289 SD405 : 290~292 SD406 : 293・294

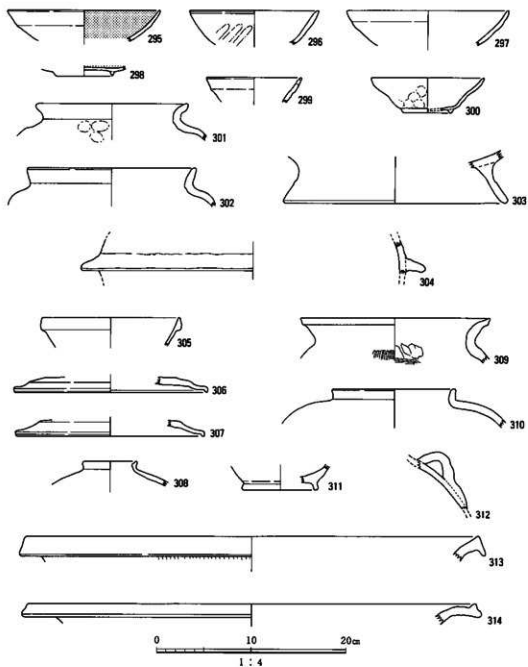


図103 VI区SD402出土遺物実測図

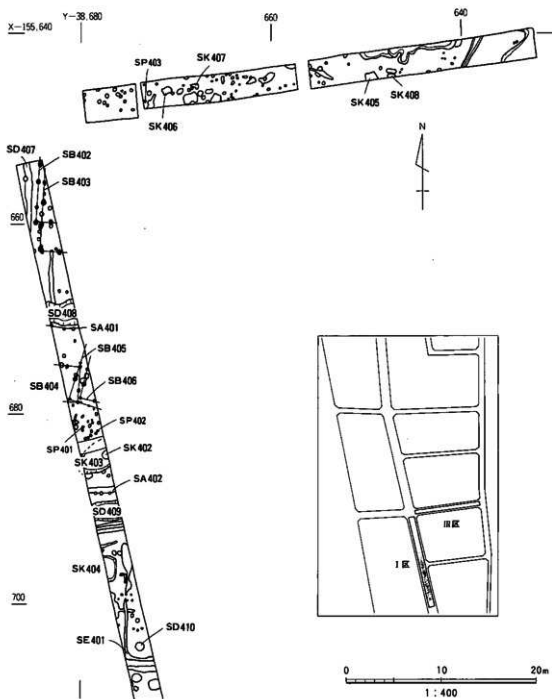


図104 I・II区遺構配置図

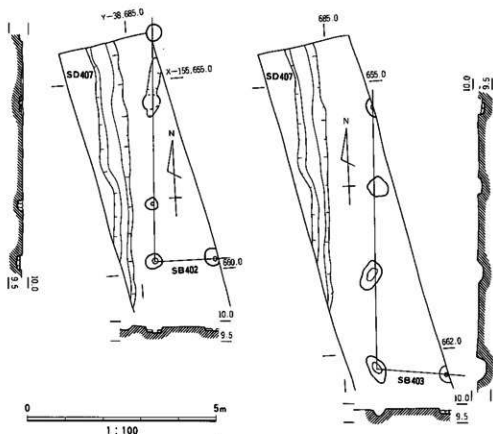


図105 I区SB402・403実測図

iii) 溝

SD401(図100・102、図版46)

幅3～3.5m、深さ0.8～0.9mの断面U字形の溝である。埋土は滞水状態で溜ったものである。この溝は、南隣接の調査地87-26でも延長部分が確認されている。ほぼ南北方向であることから、宅地を区画するような溝と考えられる。

埋土から284・285が出土した。284は緑釉陶器の皿で素地が須恵質であり、近江産と思われる。285は高台が付く灰釉陶器の壺である。高台内まで施釉されている。

SD402(図101・103、図版47)

VI区の南半で検出された南北方向の溝である。幅0.8～1m、深さ0.1m前後で、断面はU字形である。SD401との間隔は約75mである。

埋土から295～314が出土した。295・298は内黒の黒色土器である。土師器碗296には口縁部直下に沈線が巡る。土師器碗299には直径約5mmの穴が焼成前に開けられている。303

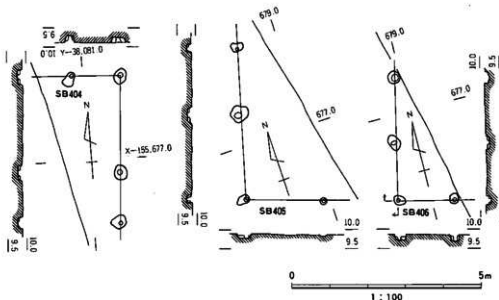


図106 I区SB404～406実測図

は土師器高台付皿、304は羽釜、305は白磁である。306～314は須恵器である。出土した遺物に瓦器は含まれておらず、10世紀中頃～11世紀の初めごろに埋った溝であることがわかる。

小溝(図100、図版46・47)

V区で検出された、幅0.3～0.8m、深さ0.1m前後の素掘りの南北方向の溝である。掘立柱建物SB401が廃絶したのちに耕地になったようで、耕作に伴うものと思われる。

SD403から鉄鉢形の須恵器286が、SD404からは土師器甕287、須恵器杯288が、SD405からは土師器小皿290、内黒の黒色土器291・292が出土した。いずれも10～11世紀のものである。

SD406

30mほど連続する東西方向の溝である。南北方向の小溝を切る。東半から土師器小皿293、須恵器高台付壺294が出土した。

7) 鎌倉時代の遺構と遺物(図98・104)

前代の遺構は、調査地北東の調査区V・VI区に集中していたが、この時期になると、南のI・III区に集中する。

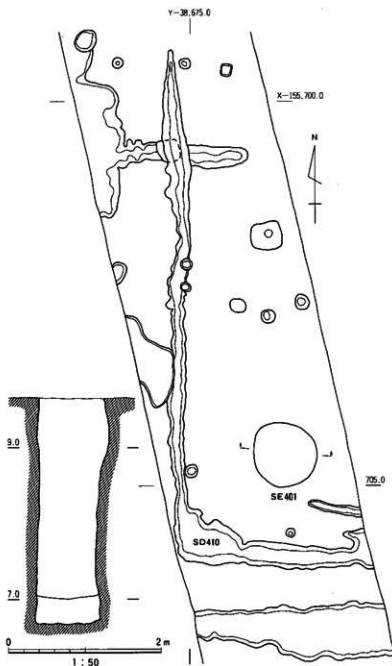


図107 I区SE401・SD410実測図

i)掘立柱建物

SB402

(図104・105、図版25)

1間(1.6m)以上×3間(6.0m)以上の建物である。北で3°東へ振る。

SB403

(図104・105、図版25)

1間(1.8m)以上×3間(6.8m)以上で、北で4°東へ振る。SB401とは切合っていないため先後関係は不明であるが、方位が同じであることから、いずれかが先に建てられ、一方が建替えられたものと思われる。

SB404(図104・106)

1間(1.3m)以上×2間(3.8m)の東西方向の建物で、東側の柱列は北で4°東に振る。

SB405(図104・106)

1間(2.1m)以上×2間(3.9m)で、北で10°東に振る。

SB406(図104・106)

1間(1.5m)以上×2間(3.2m)以上、北で13°東に振る。

SB404～406の周辺には、ほかにも柱穴が多数ある。数棟の建物が重なっていることはま

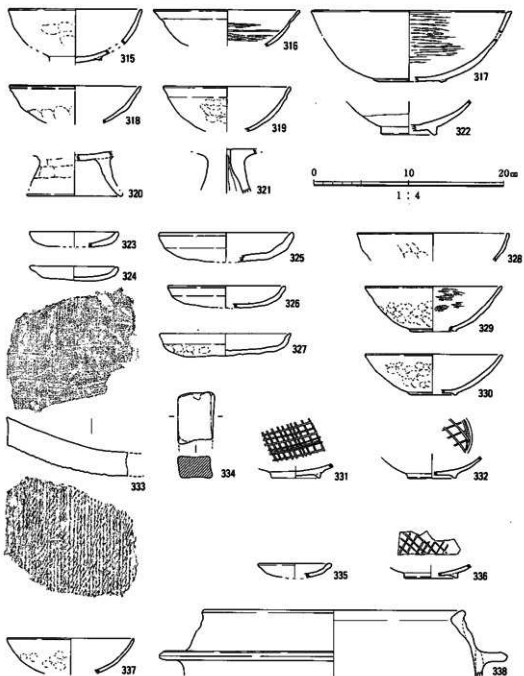


図108 I区出土遺物実測図(1)

SK402 : 315~322 SK403 : 323~334 SK404 : 335~338

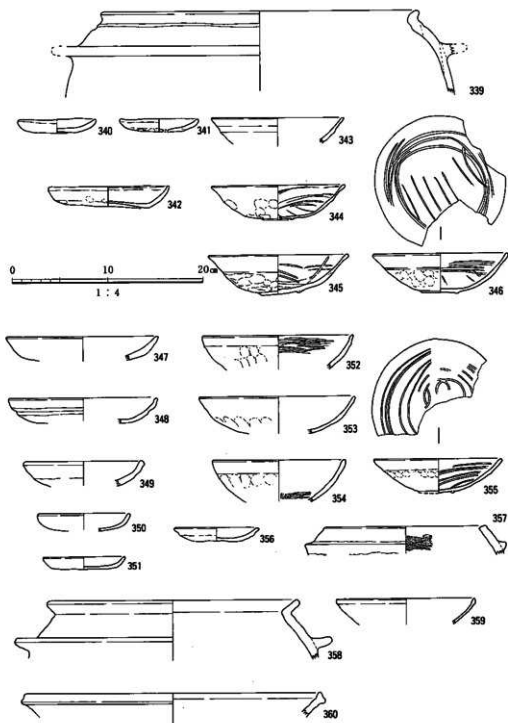


図109 I区出土遺物実測図(2)
SD408 : 339~346 SD409 : 347~360

ちがない。また、SB405・406が建物として組むのであれば、方位が北で15°前後東へ振るという共通性がある。

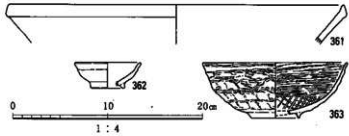


図110 I区出土遺物実測図(3)

SD407: 361 SP401: 362 SP402: 363

I区北端のSB402とSB403の関係と同じよう

に、SB405とSB406は同じ場所而建替えられた先後関係のある建物であろうか。

SB404～406の南側にも多数の柱穴がある。このうちの1つSP401から瓦器小碗362が、SP402から瓦器碗363が出土した。

SB402・403に隣接するⅢ区東半でも多くの柱穴が見つかった。建物を復元することはできなかったが、何棟かの掘立柱建物があったことは確実である。

ii) 橋

SA401(図104)

溝SD408の南岸に並ぶ3本の柱である。建物として組み合うような位置に柱がないこと、溝に沿っていることから橋であろう。

SA402(図104)

SD409の北岸に沿う橋である。

iii) 井戸

SE401(図104・107、図版25)

I区の中央にある井戸である。直径0.7～0.8m、検出面からの深さは約3m、埋土には砂礫や黒い粘土、地山のクリーム色の粘土などが混り、人為的に埋められていることがわかる。

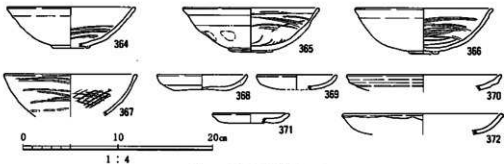


図111 Ⅲ区出土遺物実測図

SK405: 364～366 SP403: 367 SK406: 368～370 SK408: 371 SK407: 372

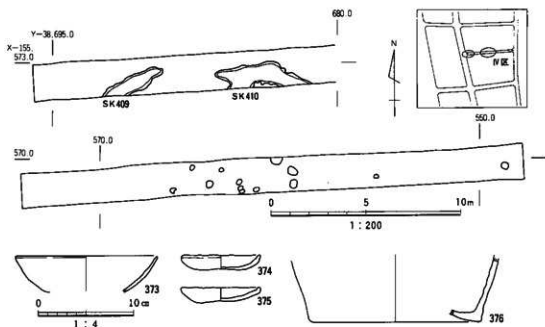


図112 IV区遺構配置図および出土遺物実測図
SK409: 373 SK410: 374・375 ビット: 376

井戸側らしきものはなかった。埋める際にすべて抜き取ったのか、素掘りの井戸であったのかはわからない。埋土から遺物は見つからなかった。

iv) 土壌(図104・108・111・112、図版48～51)

SK402

I 区の掘立柱建物が集中する地点の南側にある土壌である。SK403が埋ったのちに掘られたものである。径0.7m、深さ0.6mである。東半は調査区外に延びる。

315～322の遺物が出土した。315・316・318・319は瓦器碗である。317は瓦質の鉢である。口縁端部は面をなす。外面は器面調整がなされておらず凹凸である。内面はヨコ方向の密なヘラミガキによる調整がある。320は土師器台付皿の高台である。321の高杯には、中央に焼成前にされた穿孔がある。322は灰釉がかかる陶器である。高台は貼付けではなく削出しである。中国製の粗製の青磁であろうか。

SK402(新)－SK403(古)という関係である。

SK403

長径3.0m以上の長円形の土壌で、深さは0.2mほどである。

323～334の遺物が出土した。323～327は土師器皿、328～332は瓦器である。333は須恵

質に焼き上がった瓦、334は砥石である。なお、SK402として取上げた遺物と、本土墳として取上げた遺物に接合するもの(324・325・330・332)があり、SK402とSK403の遺物は混っている可能性がある。

SK404

I区で検出された、長径約2.7m、深さ0.2mの方形に近い土壌である。西半は調査区外に延びる。

335～338の遺物が出土した。335～336は瓦器、337は土師器、338は羽釜である。

SK405

Ⅲ区の東半に位置する、東西約1.3m、深さ0.7mの方形の土壌である。調査区内に最深部があることから、南北長は1.2～1.3mほどと推定される。

底から364～366の瓦器が出土した。いずれも高さ4.5cm前後、口径15cm弱で、高台の断面形は三角形ではなく、台形である。特に365は高台底面(畳付)の幅が3～5mmほどあり、特徴的である。13～14世紀のものである。

SK406

Ⅲ区の西半で検出された、長径約1.0m、短径約0.7m、深さ0.2mの土壌である。

368～370の土師器皿が出土した。370は口径から下に向け、二段の屈曲がある。12世紀ごろのものである。

SK407

Ⅲ区の西半、SK406の東側にある土壌で、土師器皿372が出土した。口縁直下に線刻が施されている。

SK408

SK405の東にある、東西0.9m、南北0.4mの方形の土壌である。

土師器小皿371が出土した。

Ⅲ区の中央から西端には、このほかにも不定形をした土壌が多くある。いずれもいかなる用途であったのかはわからない。

SK409・410

Ⅳ区の西半で検出された、不定形の土壌である。溝の一部かもしれない。どちらも深さは0.1～0.15mである。

SK409からは土師器碗373が出土した。SK410からは土師器小皿374・375が出土した。

また、Ⅳ区の中央にはいくつかのピットがある。この内の1つから灰釉陶器376が出土し

た。体部側面と底面に釉がかけられ、内面と底部の縁には施釉されていない。内面にはロクロメがよく残る。底面が盛り上がっていることから、伏せ焼きしたと思われる。

v) 溝(図104・109・110、図版49～51)

SD407

I 区の建物SB402・403の西側に平行する南北方向の溝である。幅0.5～0.8m、深さ0.1～0.2mである。遺構面が削られているため、本来はより幅が広がったであろうから、SB403に伴う可能性が高い。

埋土から361の須恵器が出土した。東播系のものである。

SD408

I 区の建物が集中するところにある幅約2.0m、深さ0.4mのしっかりした溝である。埋土の下半は水成のシルト層であり、上半は人為的に埋められた砂混りのシルト層である。2.5mの幅の調査区であるが、底のレベルは東端で約9.6m、西端で9.65mあり、わずかながら西から東へ低くなることが確認できる。この溝の下には、長原6層の時期に西から東へ流れる流路SD601があり、平坦な土地に近づきつつあっても自然の営力を完全には克服できず、同じ位置に数百年後にも水対策のための溝がつくられているのであろう。

なお、この溝の南岸には、先に述べた溝SA401があり、水対策だけでなく、北側の建物SB402・403と南側の建物SB404～406を画する役割りもあったのだろう。

埋土から339～346が出土した。339は土師器の羽釜、340～342は土師器皿、343～346は瓦器碗である。344～346の高台は退化が著しく、粘土紐を貼付けた程度である。

SD409

幅約2.0m、深さ0.2mで、SD408とは異なり、水が流れていたような形跡はない。北岸には溝SA402があり、集落内を区画する溝と考えられる。

埋土から347～360が出土した。347～351は土師器皿、353は土師器碗、352・354・355は瓦器碗、356は瓦器小皿、357は瓦質の羽釜である。358は土師器羽釜、359は白磁、360は須恵質の捏鉢である。

SD408とSD409は遺物から見ると、同じ時期に埋ったことがわかる。

SD410

幅0.2～0.3m、深さ0.05m前後で、調査区の中で直角に折れ曲る。マンガンの沈殿が多い、褐色の粗粒砂混りのシルトである。素掘りの溝というよりも、板塼などの構造物の基礎に相当するような布掘りの溝の可能性もある。この溝に囲まれた内側には井戸SE401があり、

位置関係から井戸の周囲を区画する、なんらかの構造物に伴う溝と思われる。

8) 小結

I・II区で検出された古墳時代の溝SD703と、これに伴う溝SA701は、地下鉄工事に伴う調査[大阪市文化財協会1982]や、83-76次調査、89-76次調査で連続する部分が確認されている。図上で復元すると、一辺60m強の方形の区画が浮かび上がってくる。西辺の溝は北で30°~40°東へ振る方位である。この方位はSD701やSD601が流れる方向、南西から北東方向に低くなるといった当時の地形に規制されているものと考えられる。飛鳥~奈良時代に

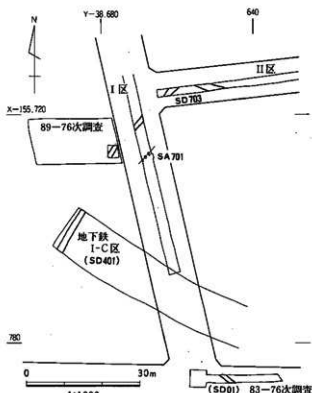


図113 古墳時代方形区画

かけて流れていたSD601の右岸の堤状の盛土は、水田経営のための自然の力に抗する手段と考えられる。

平安時代の集落は、本調査地の北東隅周辺にあったようである。鎌倉時代までこの集落は存続せず、集落は移動するようである。平安時代と鎌倉時代の集落は同じ地点で連続しないことがわかったことは重要であろう。

(内田・伊藤)

註

- (1) 本報告書中のウマ臼歯からの大まかな年齢推定は、[PETER C. Goody 1983]によった。
- (2) 林田氏は、日本の在来馬を、木曾馬(体高124~142cm)や御崎馬(体高125~140cm、平均132cm)に代表される中形馬と、トカラ馬(体高108~121cm、平均115cm)に代表される小形馬の2つに分類している[林田重幸1974]。
- (3) 後藤信義氏は、池島・福万寺遺跡の11~13世紀の坪境溝から出土したウシなどの骨を、農耕儀礼と関連付けている[後藤信義1994]。溝埋土中からは骨のほかに、土器・こぼし大の石・武器形木製品らしきものも出土し、上顎骨と下顎骨はそれぞれ土壌に埋納されていた。

第三章 まとめ

1987年度の調査によって判明した事実と、その後の周辺の調査成果を踏まえ、気づいたことを以下に記しておく。

1) 長原式土器の胎土について

長原遺跡東南地区南半窪区の開析谷の肩部から見つかった長原式土器の大半は、河内産の胎土のものが大半を占めるが、15%前後は白っぽい非河内産の胎土であった。深鉢の口縁部の形態は、長原式のうちでも新しい段階の特徴をもつものばかりである[松尾信裕1983]。したがって、非河内系の胎土の占める割合15%というのが、長原式土器の古い段階から新しい段階までを通しての比率なのか、本調査地点のみの比率なのかは比較検討できる資料がないのでわからない。今後、細かい形態差による時期ごとの河内系・非河内系の胎土の比率を出していくことによって、集団の動きといったことにも迫れるようになるかもしれない。

2) 弥生時代前～中期の水路と水田

長原遺跡東南地区南半の地山の高いところを南北に貫く2本の水路SD801・802は、その後の調査で300m以上にわたって続く水路であることが確認されている。このうち西側のSD801は両岸に堤状の盛土があり、水の制御に苦心があっ



図114 長原遺跡東南地区南半の縄文時代晩期～弥生時代中期古地図【趙哲清1994】に加筆修正

たようすがうかがえる。

この2本の水路によって、西側と東側の低い土地に抜がっていた水田の灌漑を行ったのであろう。特に、Ⅱ区の開析谷の斜面に営まれた水田への水の供給は、2本の水路の開発なくしては成し得ないことである。この2本の水路へは、東側に流れる自然の川をかなり上流で堰き止め、水を落としたのであろう。自然の川→SD801・802→(小溝)→各水田へといった、太い幹から枝が分れ、その先に実がたわわにつくといったような状況が、この地に展開していたようすが目に浮かぶ。

3) 長原古墳群のはじまりと面期

東南地区南半Ⅵ区で見つかった176号墳からは、黒斑のある埴輪が出土した。200基を超える長原古墳のほとんどが無黒斑の埴輪をもち、5世紀の後半以降に築造されたことがわかっている。これまでに有黒斑の埴輪をもつ古墳は、今年度の176号墳のほかに、塚ノ本古墳・40号墳・一ヶ塚古墳(85号)・高廻り1号墳(169号)・高廻り2号墳(170号)・196号墳の7基が見つかる。これら有黒斑の埴輪をもつ古墳、すなわち長原古墳群の造営開始時期には、今のところ前方後円墳はない。また、7基のうちの多くが豊富な種類の形象埴輪をもっていることも特徴的である。しかも、塚ノ本古墳・40号墳・一ヶ塚古墳・176号墳が鰐付円筒埴輪をもっている。塚ノ本古墳からは直線距離で約2.5kmの距離にあ

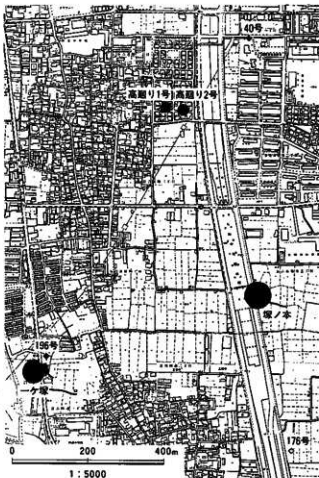


図115 黒斑をもつ古墳分布図

る、古市古墳群内最古の津堂城山古墳にも鰐付埴輪がある。全国で70を越える古墳で鰐付埴輪が確認されているが、長原周辺で6個所という数は、大和に次いで密な分布である。大和の大王陵クラスの古墳には必ずしも鰐付埴輪が伴っていないようである。大王陵より下のクラスの規模の古墳には鰐付埴輪が多い。長原古墳群の造営のはじまりを考えていく上で重要な事実であろう〔伊藤純1994〕。

長原での古墳築造は5世紀の後半にピークがあり、6世紀の中頃には終了する。古墳造営の期間にあって、6世紀の初めごろに画期があるようである。長原中央地区では5世紀の末頃まで居住域であったところに土を入れ、水田としている。また、東南地区北半Ⅰ・Ⅲ区で見つかった、一辺約60mの方形の区画をなす溝SD703が人為的に埋められ、この溝に伴う溝SA701の柱が抜かれるのも6世紀の初めごろである。これまでの調査によってこのような変化が各所でおさえられている。その後、それまで約100年間、200基以上つくられた古墳の中には、前方後円形の古墳はない。七ノ坪古墳と南口古墳〔木原克司1989〕が唐突に出現し、この2基を最後に長原における古墳の築造が終る。

土地利用の変化と前方後円墳の出現という事実は、長原古墳群内での要因によるものとは考えがたく、より上位の規範、王権、あるいは「国家」といったものの体制、制度の変化が長原の地で具現化した結果であろう。

(伊藤)

表3 有黒斑の埴輪をもつ古墳

	墳形	規模	埴輪	文 献
塚ノ本古墳 (1号墳)	円墳	直径約55.0m	円筒(鰐付)・朝顔 家・衣蓋	長原遺跡調査会1978 大阪文化財センター1978
40号墳	方墳	?	円筒(鰐付)・家・盾 敷・草摺・衣蓋・簪	高井健司1990 櫻井久之1991
一ヶ塚古墳 (85号墳)	円墳	直径46.5m	円筒(鰐付)・壺・朝顔・家 圓・盾・敷・草摺・簪・衣蓋	大阪市文化財協会1990 京嶋覚他1993
高廻り1号墳 (169号墳)	方墳	15.0m×15.0m	円筒・朝顔・家・船 敷・盾・短甲・草摺・簪	大阪市文化財協会1991
高廻り2号墳 (170号墳)	円墳	直径約19.0m	円筒・壺・家・船・敷 盾・短甲・草摺・簪	大阪市文化財協会1991
176号墳	方墳	?	円筒(鰐付)・朝顔 家・盾・衣蓋	本書
196号墳	方墳	一辺6.0m	円筒・壺	(未報告)

付 1984年度瓜破遺跡東南地区井戸SE01出土土師器(追加報告)

『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ(pp.22-29)で報告した、瓜破遺跡東南地区の井戸SE01(図8)から出土した遺物のうち、土師器の一部がうかつにも報告洩れとなっていた。本書を借り追加報告する。

今回報告するのは、土師器の甕12点である。大きさから小型の甕1-5、中型の甕6-10、大型の甕11・12がある。

小型の甕はいずれも体部の外面の上半には下から上への縦方向のハケメがあり、下半は水平から斜め方向のハケメがある。ハケメの新古の関係は、上半のハケメ(古)-下半のハケメ(新)という関係である。頸部から口縁部にかけて、下からの縦方向のハケメを切って、ナデによる調整がある。1・4の口縁部の内面は、横方向のハケメが残るものがある。内面は下から上にヘラケズリされている。1・3は底から頸部まで一気に削っている。2・5は底部にユビオサエの痕がある。4は底近くを水平方向に削っている。いずれも、内面のヘラケズリは口縁内面のヨコハケメを切っている。

中型の甕は小型の甕と同じつくり方のもの6・7と、これとは異なるもの8-10とがある。8-10の体部外面の上半にはハケメはなく、下半に粗いハケメがある。8は器壁を薄くするためか、外面をヘラケズリし、この後にハケメによる外面の調整を行っている。9の外面上半には、左上がりのユビナデがある。内面は、8-10とも底はユビオサエ、上半は水平方向に工具が動いた痕が残る。この工具の痕は、1-7でみられるような明瞭なヘラケズリとは異なる。器壁を薄くするために粘土を削り取った痕跡ではなく、板状の工具を押当て、器面をナデつけた痕であろう。

大型の甕11は体部外面の上半1/3ほどは下から上へのハケメ、下半は斜め方向のハケメによる調整である。内面の底にはユビオサエの痕が残り、全体的には下から上へのヘラケズリがなされる。口縁の内面には横方向のハケメがある。12は体部外面の上半2/3ほどは下から上方向のハケメで、下半はこれを切る横方向のハケメである。内面はすべて下から上方向のヘラケズリである。

次に、製作技法について検討したい。既報告のものは番号に()をつけて用いる。

まず、外面の調整手法は、上半に縦方向のハケメ、下半には斜めから横方向のハケメがあるもの…①、下半にのみ斜めと横方向のハケメがあるもの…②、まったくハケメがなく、

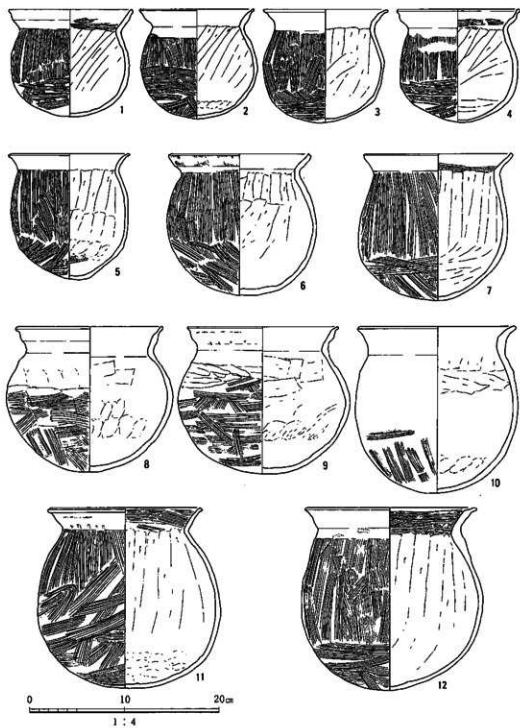


图116 SE01出土土師器(1)

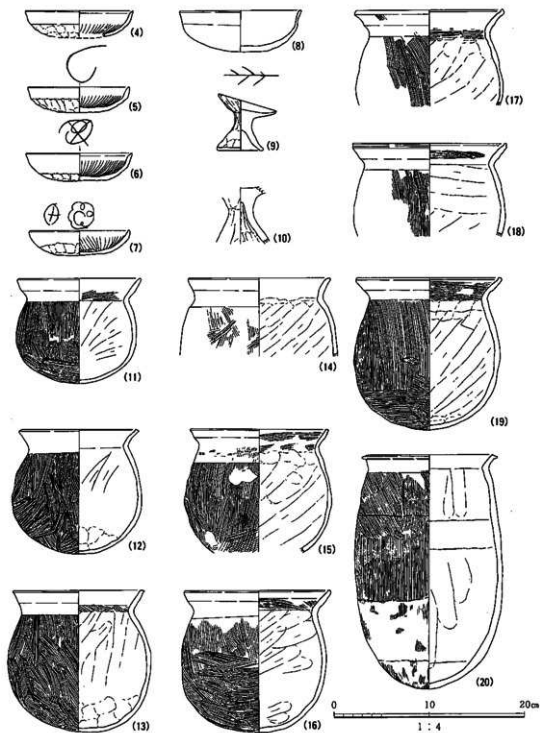


図117 SE01出土土器(2) [大阪市文化財協会1992]

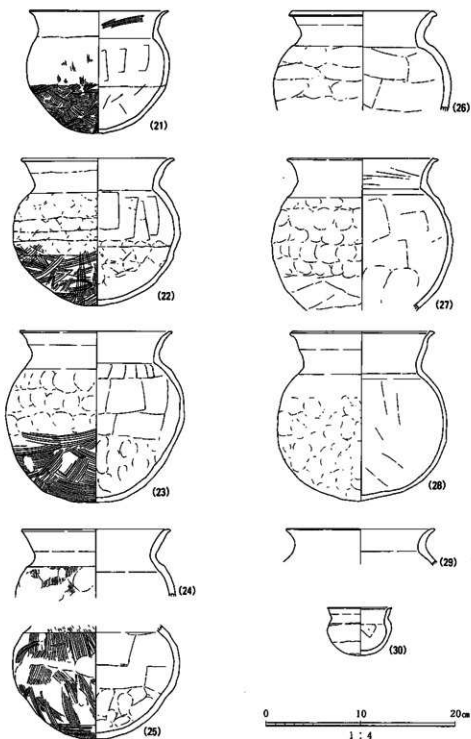


図118 SE01出土土師器(3) [大阪市文化財協会1992]

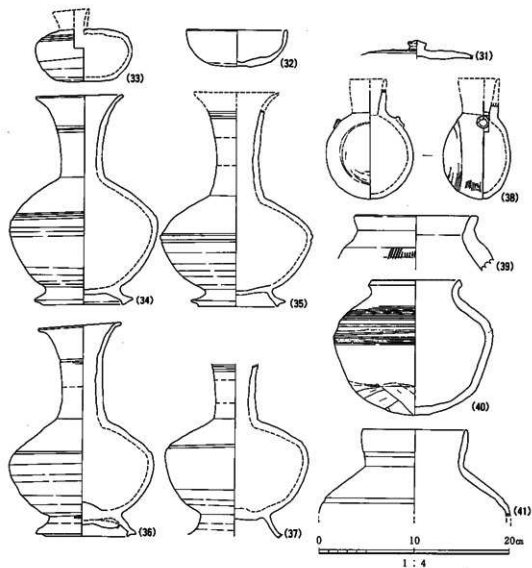


图119 SE01出土须惠器(1) [大阪市文化財協会1992]

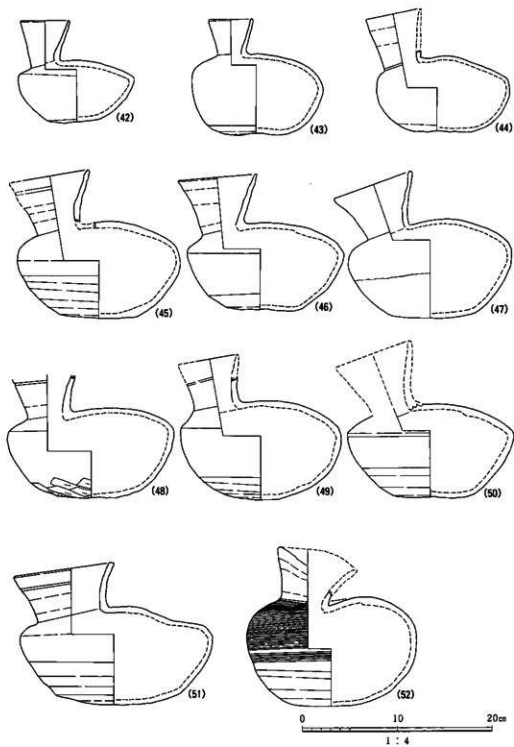


圖120 SEOI出土須恵器(2) [大阪市文化財協会1992]

外面に亀裂が残るもの…③に分類できる。

これらの内面のようなは、外面に密なハケメがあつて①に分類されるものであつても、底から頸部までヘラケズリをしているもの…①-1、底面にユビオサエの痕跡が残るもの…①-2がある。外面の下半に粗いハケメがあつて②に分類されるものは、底にはユビオサエの痕が残し、上半は水平方向に近いケズリ状の痕跡がある。このケズリ状の痕跡は①のヘラケズリとは明らかに異なり、板状の工具で強くナデつけたように見える。外面に残された情報と、内面に残された情報とが整合し、ほかと区別できる。③は①・②に用いられた工具よりも幅の広い板状の工具でナデつけたあとに、軽くナデている。内面を工具で擦りつけることによって、まだ軟らかい粘土を外へ伸ばし上げ、器壁を薄くすることによって必要とする大きさにしたのであろう。内側から力が加えられることによって、外面(表面)には地割れのような亀裂が入っているもの(27)・(28)がある。

以上のように、製作技法からこの井戸の土師器を分けると、以下の4通りとなる。

- ①-1 1・3・4・6・7・12・(11)・(16)である。小型・中型・大型を問わず用いられた技法であることがわかる。
- ①-2 2・5・11・(12)・(13)・(19)である。これも小型・中型・大型を問わない技法である。
- ② 8・9・10・(21)・(22)・(23)・(25)である。中型から大型の器を作る際、器壁を削るために、手にもった工具を、器内で水平方向に動かすことができるにはそれなりの大きさが必要である。小型の甕には採用できないやり方である。
- ③ (26)・(27)・(28)にみられ、中型を作る際の②と共通する部分の多い技法である。

この4種類の技法のうち①-1と①-2は、目的とする大きさに器の形をつくってしまい、内面を削って器壁を薄くするといった技法である。これとはまったく異なるのが②と③である。器壁の厚い小さな形の器を作っておいて、まだ粘土が軟らかいうちに内側から力を加えて伸ばし上げ、目的とする大きさの器を作る技法である。外

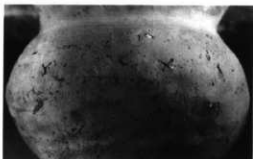


写真15 土師器甕(22)外面

面の亀裂の有無は、粘土の乾燥程度によるのであろう。粘土がより軟らかければ、器壁は外へ外へ伸び、乾燥がやや進んでおれば外側に拡がりながらも、こすりつけた工具の痕跡が内側に残り、結果的にはケズリと似た痕が器面に残る。最終調整としての外面のハケメの有無にかかわらず、②と③は同じ発想による技法と判断できる。なお、(20)は長胴形をしていて、一見してほかのものと異なる形である。外面はハケメ、内面は板状工具でこすりつけているが、粘土紐の継ぎ目が消しきれていない粗い作りである。上記のものとは違う例外としておく。

技法から見ると、SE01から出土した土師器の甕には、製作技法において基本的に発想の異なる技法、①目的とする大きさの形を作っておいて内側から器壁を削り、必要な厚さにする方法と、②まず、厚い器壁の小さなものを作り、粘土が軟らかいうちに内側から力を加え、壁を伸ばし拡げながら必要な大きさを作る方法がある。①の技法のうちの個人差のようなものが①-1、①-2で、やはり②の技法で成形した後の外面の調整の個人による差異が、ハケメの有無として表れるのであろう。

次に製作技法を離れ、器としての使われ方を見たい。通常の遺物整理作業として土器を洗浄してしまっているので、内面の付着物を分析することによって用途を知る手掛かりはない。外面にススが付着しているか否か、すなわち、火にかけられているか否かに注目した。今回報告する12点と既報告(11)～(29)の計31点のうち、外面にススが付着しているのが14個、ないものが17個である。製作技法で例外とした(20)にはススが付着していない。ほぼ半々であるが、製作技法と重ね合わせると、外面に密なハケメがあり、内面を削って器壁を薄くしている①の技法のもの18点のうち、6・(13)・(16)・(18)を除く14個体、8割近くにススが付着し、火にかけられたものであることがわかる。一方、粘土が軟らかいうちに内側から力を加えて形を作る②の技法のものは、10だけにススの付着が認められ、ほかは火にかけられたようすはない。これらの事実から①の技法で作った器は煮炊き用の甕、②の技法で作った甕は火にかけないで用いる器という想定ができる。製作技法の違いが用途の違いとはほぼ一致する。

なお、報告する12点は、完形に近いものばかりだったので、頸部の括れまで、2～3mm大の粒状のものを入れ、内容量を計測した。実際に、内容物を頸部の括れまで入れると、満杯で、入れ過ぎの感が強い。しかし、おさまり具合を考え、適量となるように内容物の量を加減したのでは、それぞれの個体ごとの容量を比較できないので、一応、括れまでものを入れて容量を計った。

小型の甕1～5は800cc前後(750～1000cc)、中型の甕6～10は2000cc前後(1700～2200cc)、大型の甕11～12は3000cc強である。既報告のものでは(11)が小型、(12)～(19)・(21)・(22)・(25)・(28)が中型、(20)・(23)・(27)が大型の容量である。実際にものを入れて用いる時のことを考えると、小型甕2杯分で中型甕の適量となり、小型甕3～4杯で大型甕が適量となるようである。(京嶋寛・伊藤)

表4 SE01出土土師器一覧 (括弧内は推定値)

番号	器形	口径(cm)	器高(cm)	容量(cc)	外 面	内 面	外面スス	技法
1	甕	13.2	11.1	750	密なハケメ	ケズリ	付着	①-1
2	甕	12.3	11.5	750	密なハケメ	ケズリ	付着	①-2
3	甕	13.3	11.8	800	密なハケメ	ケズリ	付着	①-1
4	甕	13.0	11.8	750	密なハケメ	ケズリ	付着	①-1
5	甕	13.3	13.2	1000	密なハケメ	ケズリ	なし	①-2
6	甕	15.2	14.8	1700	密なハケメ	ケズリ	なし	①-1
7	甕	15.5	15.3	1900	密なハケメ	ケズリ	付着	①-1
8	甕	15.5	15.3	1900	下半に粗いハケメ	ヨコ板ナデ	なし	②
9	甕	16.2	15.5	2000	下半に粗いハケメ	ヨコ板ナデ	なし	②
10	甕	16.4	17.5	2200	下半に粗いハケメ	ヨコ板ナデ	付着	②
11	甕	16.5	19.1	3200	密なハケメ	ケズリ	付着	①-2
12	甕	18.2	19.5	3000	密なハケメ	ケズリ	付着	①-1
(4)	杯	11.5	3.0					
(5)	杯	11.0	2.7					
(6)	杯	11.5	3.0					
(7)	杯	10.0	2.7					
(8)	杯							
(9)	高杯	6.5	6.0					
(10)	高杯							
(11)	甕	13.0	11.0		密なハケメ	ケズリ	付着	①-1
(12)	甕	12.5	13.0		密なハケメ	ケズリ	付着	①-2
(13)	甕	14.0	15.0	1500	密なハケメ	ケズリ	なし	①-2
(14)	甕	15.0			粗いハケメ	ケズリ	付着	①
(15)	甕	14.5	(14.0)	1400	密なハケメ	ケズリ	付着	①
(16)	甕	15.0	15.0	1500	密なハケメ	ケズリ	なし	①-1
(17)	甕	15.5			密なハケメ	ケズリ	付着	①
(18)	甕	16.0			密なハケメ	ケズリ	なし	
(19)	甕	15.0	16.0		密なハケメ	ケズリ	付着	①-2
(20)	甕	14.0	24.5	2600	密なハケメ	ナデ	なし	例外
(21)	甕	14.5	13.0		下半ハケメ	ヨコ板ナデ	なし	②
(22)	甕	16.0	15.2	1800	下半ハケメ	ヨコ板ナデ	なし	②
(23)	甕	16.0	18.0	2600	下半ハケメ	ヨコ板ナデ	なし	②
(24)	甕	15.5			ハケメ	ヨコ板ナデ	なし	
(25)	甕				ハケメ	ヨコ板ナデ	なし	②
(26)	甕	15.0			不調整	ヨコ板ナデ	なし	③
(27)	甕	16.0	(17.5)		不調整	ヨコ板ナデ	なし	③
(28)	甕	15.0	17.8	2300	不調整	ヨコ板ナデ	なし	③
(29)	甕				?	?	なし	
(30)	ミナツア	7.0	5.0		不調整	ナデ		

別 表

別表1 遺物一覧 (括弧内の数値は推定値)

番号	地 区	区	層位・遺構	質	器 形	口径 _(cm)	器高 _(cm)	底径 _(cm)	備 考
1	瓜破遺跡東南地区	I	SB02(SP01)	須恵器	杯蓋	(9.8)	3.1	—	
2	瓜破遺跡東南地区	I	SB02(SP01)	土師器	壺	—	—	—	
3	瓜破遺跡東南地区	I	SA01(SP01)	須恵器	杯蓋	(10.9)	(3.6)	—	
4	瓜破遺跡東南地区	I	SA01(SP03)	須恵器	杯蓋	(9.9)	(3.0)	—	
5	瓜破遺跡東南地区	I	SA01(SP02)	須恵器	杯身	(9.8)	(2.7)	—	
6	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	土師器	杯	(8.4)	(2.9)	—	
7	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	土師器	杯	(10.4)	(4.0)	—	
8	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	土師器	杯	(17.1)	4.5	—	
9	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	土師器	杯	(16.4)	6.0	—	
10	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	土師器	壺	(13.6)	11.2	—	
11	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	土師器	壺	(13.6)	11.3	—	
12	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	須恵器	杯蓋	(10.4)	3.2	—	
13	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	須恵器	杯蓋	11.2	3.2	—	
14	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	須恵器	杯身	(10.6)	(2.5)	—	
15	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	須恵器	杯身	(10.4)	3.3	—	
16	瓜破遺跡東南地区	I	SK01	須恵器	短頸壺	(6.7)	9.2	—	
17	瓜破遺跡東南地区	I	SD01	須恵器	杯蓋	(10.0)	(2.4)	—	
18	瓜破遺跡東南地区	I	SD01	須恵器	杯身	9.5	(2.4)	—	
19	瓜破遺跡東南地区	I	SD01	須恵器	短頸壺	—	—	—	
20	瓜破遺跡東南地区	I	SK02	土師器	杯	(13.2)	(5.3)	—	
21	瓜破遺跡東南地区	I	SK02	土師器	高杯	—	—	—	
22	瓜破遺跡東南地区	I	SK02	須恵器	罍?	—	—	—	
23	瓜破遺跡東南地区	I	SK02	須恵器	杯蓋	(11.3)	3.1	—	ヘラ記号
24	瓜破遺跡東南地区	I	SK02	須恵器	杯蓋	10.4	3.2	—	ヘラ記号
25	瓜破遺跡東南地区	I	SK02	須恵器	杯身	(10.1)	3.5	—	
26	瓜破遺跡東南地区	I	SD02	須恵器	控鉢	(11.2)	—	—	
27	瓜破遺跡東南地区	I	SD02	土師器	高杯	—	—	—	
28	瓜破遺跡東南地区	I	SD02	須恵器	杯蓋	(8.7)	(3.1)	—	
29	瓜破遺跡東南地区	I	SD02	須恵器	杯身	(10.4)	3.5	—	
30	瓜破遺跡東南地区	I	SD02	須恵器	杯蓋	(11.3)	(3.2)	—	
31	瓜破遺跡東南地区	I	SD02	須恵器	杯身	(9.8)	(3.1)	—	
32	瓜破遺跡東南地区	I	SK03	土師器	壺	(25.0)	—	—	
33	瓜破遺跡東南地区	I	SK03	土師器	羽釜	—	—	—	生駒西麓産
34	瓜破遺跡東南地区	I	SK03	須恵器	杯蓋	(9.0)	(2.3)	—	
35	瓜破遺跡東南地区	I	SK03	須恵器	杯身	(11.0)	(2.9)	—	
36	瓜破遺跡東南地区	I	SD03	土師器	鍋	(30.0)	—	—	
37	瓜破遺跡東南地区	I	SD03	土師器	羽釜	—	—	—	生駒西麓産
38	瓜破遺跡東南地区	I	SD03	須恵器	杯身	9.2	2.6	—	
39	瓜破遺跡東南地区	I	SD03	須恵器	長頸壺	—	—	14.7	
40	瓜破遺跡東南地区	I	SK04	土師器	壺	(22.1)	—	—	
41	瓜破遺跡東南地区	I	SK04	土師器	杯	(13.9)	(4.1)	—	
42	瓜破遺跡東南地区	I	SK04	土師器	杯	(9.0)	2.7	—	
43	瓜破遺跡東南地区	I	SK04	須恵器	杯蓋	(8.2)	(2.9)	—	
44	瓜破遺跡東南地区	I	SK04	須恵器	杯蓋	(8.8)	(2.9)	—	
45	瓜破遺跡東南地区	II	SD04	須恵器	杯蓋	(11.0)	(2.8)	—	
46	瓜破遺跡東南地区	I	—	土師器	壺	—	—	—	生駒西麓産
47	瓜破遺跡東南地区	I	SK03	土師器	壺	—	—	—	生駒西麓産
48	瓜破遺跡東南地区	I	SD03	土師器	壺	—	—	—	生駒西麓産

番号	地 区	区	層位・遺構	質	器 形	口径 _(cm)	器高 _(cm)	底径 _(cm)	備 考
49	瓜破道跡東南地区	I	包含層	土師器	甕	—	—	—	生駒西麓産
50	瓜破道跡東南地区	I	包含層	土師器	甕	—	—	—	生駒西麓産
51	瓜破道跡東南地区	I	SD03	土師器	甕	—	—	—	生駒西麓産
52	長原道跡中央地区	—	長原6層	土師器	甕	(18.2)	—	—	
53	長原道跡中央地区	—	長原7層	土師器	甕	(20.1)	—	—	
54	長原道跡中央地区	—	SK401	瓦器	皿	(10.3)	(2.1)	—	
55	長原道跡中央地区	—	SK401	黒色土器	椀	—	—	5.6	
56	長原道跡中央地区	—	SB701(SP03)	須恵器	杯蓋	12.2	3.8	—	
57	長原道跡中央地区	—	SB701(SP01)	土師器	甌	(27.0)	—	—	
58	長原道跡東南地区南半	I	長原3層	青磁	碗	—	—	4.0	(写真5)
59	長原道跡東南地区南半	I	長原3層	青磁	碗	—	—	(5.4)	(写真5)
60	長原道跡東南地区南半	I	長原3層	青磁	碗	—	—	—	(写真5)
61	長原道跡東南地区南半	II	長原3層	白磁	碗	8.0	—	—	(写真5)
62	長原道跡東南地区南半	II	長原3層	白磁	碗	—	—	—	(写真5)
63	長原道跡東南地区南半	II	長原3層	青磁	碗	—	—	—	(写真5)
64	長原道跡東南地区南半	II	長原3層	緑釉陶器	椀	—	—	(8.0)	(写真5)
65	長原道跡東南地区南半	II	長原3層	緑釉陶器	椀	—	—	—	(写真5)
66	長原道跡東南地区南半	II	長原3層	須恵器	甕	—	—	(11.0)	(写真5)
67	長原道跡東南地区南半	II	長原4層	白磁	碗	(18.4)	—	—	
68	長原道跡東南地区南半	II	長原4層	黒色土器	椀	(15.0)	5.3	6.7	
69	長原道跡東南地区南半	II	長原3層	灰釉陶器	壺	—	—	(9.0)	
70	長原道跡東南地区南半	II	長原3層	灰釉陶器	椀	—	—	(6.0)	
71	長原道跡東南地区南半	II	長原4層	緑釉陶器	椀	—	—	(7.7)	
72	長原道跡東南地区南半	II	長原4層	白磁	—	—	—	(6.2)	
73	長原道跡東南地区南半	II	長原4層	緑釉陶器	椀	—	—	—	(写真7)
74	長原道跡東南地区南半	II	長原4層	青磁	碗	—	—	—	(写真7)
75	長原道跡東南地区南半	II	長原4層	灰釉陶器	甕	—	—	—	(写真7)
76	長原道跡東南地区南半	II	長原4層	灰釉陶器	—	—	—	—	(写真7)
77	長原道跡東南地区南半	IV	長原4層	須恵器	把手?	—	—	—	(写真6)
78	長原道跡東南地区南半	V	長原4層	須恵器	—	—	—	—	縄文文(写真7)
79	長原道跡東南地区南半	V	長原7層	土製品	7ヶの羽口	—	—	—	
80	長原道跡東南地区南半	V	長原7層	弥生土器?	—	—	—	(5.6)	
81	長原道跡東南地区南半	IV	長原9層	弥生土器?	底部部	—	—	6.6	
82	長原道跡東南地区南半	VI	長原9層	縄文	底部	—	—	(5.1)	
83	長原道跡東南地区南半	VI	長原9層	長原式土器	深鉢	—	—	—	
84	長原道跡東南地区南半	VI	長原9層	石製品	鉢	—	—	—	71.1g
85	長原道跡東南地区南半	VI	長原9層	石製品	石棒	—	—	—	結晶片岩
86	長原道跡東南地区南半	VI	長原9層	石製品	?	—	—	—	
87	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	(42.8)	—	—	生駒西麓産
88	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	(45.0)	—	—	生駒西麓産
89	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	—	—	—	生駒西麓産
90	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	(31.3)	—	—	生駒西麓産
91	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	(38.9)	—	—	生駒西麓産
92	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	(34.4)	—	—	生駒西麓産
93	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	(31.2)	—	—	生駒西麓産
94	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	(30.3)	—	—	生駒西麓産
95	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	(34.0)	—	—	生駒西麓産
96	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	—	—	—	生駒西麓産
97	長原道跡東南地区南半	V	開析谷	長原式土器	深鉢	(36.4)	—	—	生駒西麓産

番号	地 区	区	層位・遺構	質	器 形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備 考
98	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	深鉢	(35.4)	—	—	生駒西麓産
99	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	深鉢	(20.3)	—	—	生駒西麓産
100	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	深鉢	(15.3)	—	—	生駒西麓産
101	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	深鉢	(14.7)	—	—	生駒西麓産
102	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	底部	—	—	(6.4)	生駒西麓産
103	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	底部	—	—	(6.8)	生駒西麓産
104	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	底部	—	—	(6.8)	生駒西麓産
105	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	底部	—	—	(6.1)	生駒西麓産
106	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	深鉢	(41.6)	—	—	生駒西麓産
107	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	深鉢	(27.3)	—	—	非河内系
108	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	深鉢	(26.2)	—	—	非河内系
109	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	底部	—	—	4.5	非河内系
110	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	底部	—	—	(5.6)	非河内系
111	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	開析谷	長原式土器	底部	—	—	6.0	非河内系
112	長原遺跡東南地区南半	I	171号墳	埴輪	円筒	(20.8)	—	—	特異なスカシ
113	長原遺跡東南地区南半	I	171号墳	埴輪	朝顔	(25.4)	—	—	
114	長原遺跡東南地区南半	I	171号墳	埴輪	円筒	—	—	—	特異なスカシ
115	長原遺跡東南地区南半	I	171号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
116	長原遺跡東南地区南半	I	171号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
117	長原遺跡東南地区南半	I	171号墳	須恵器	杯身	(10.5)	(5.0)	—	
118	長原遺跡東南地区南半	I	171号墳	須恵器	高杯	—	—	—	(図版33)
119	長原遺跡東南地区南半	I	171号墳	須恵器	碗	—	—	—	(図版33)
120	長原遺跡東南地区南半	I	171号墳	須恵器	把手付碗	—	—	—	(図版33)
121	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	172号墳	須恵器	大甕	(48.2)	—	—	
122	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	172号墳	須恵器	杯身	10.5	4.9	—	
123	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	172号墳	須恵器	杯身	(12.6)	(4.2)	—	
124	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	SD702	須恵器	杯身	12.2	4.2	—	
125	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	SD703	須恵器	杯身	13.5	(4.6)	—	
126	長原遺跡東南地区南半	Ⅷ	172号墳	須恵器	大甕破片	—	—	—	抜き台(図版34)
127	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	173号墳	須恵器	甕	8.9	11.3	—	
128	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	173号墳	須恵器	把手付碗	7.4	6.7	3.4	
129	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	173号墳	須恵器	案	—	—	—	
130	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	174号墳	埴輪	朝顔	—	—	—	
131	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	174号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
132	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	174号墳	石製品	紡錘車	3.2	1.3	4.2	36.2 g
133	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	175号墳	土師器	甕	(18.0)	(33.2)	—	
134	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	175号墳	土師器	甕	(15.0)	(24.5)	—	
135	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	175号墳	須恵器	大甕	—	—	—	
136	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	円筒	40.5	—	—	
137	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	円筒	30.6	—	—	
138	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
139	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
140	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
141	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
142	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
143	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
144	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
145	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	朝顔	—	—	—	
146	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	踏付円筒	—	—	—	

番号	地 区	区	層位・遺構	質	器 形	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	備 考
147	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	鰯付円筒	—	—	—	
148	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	家	—	—	—	
149	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	家	—	—	—	
150	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	衣蓋	—	—	—	
151	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	衣蓋	—	—	—	
152	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	?	—	—	—	
153	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	衣蓋	—	—	—	
154	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	衣蓋	—	—	—	
155	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	?	—	—	—	
156	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	?	—	—	—	
157	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	盾	—	—	—	
158	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	176号墳	埴輪	?	—	—	—	
159	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SB602(SP01)	土師器	羽釜	(27.8)	—	—	生駒西麓産
160	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SB602(SP02)	土師器	皿	(21.2)	(3.5)	—	
161	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	須恵器	杯蓋	20.1	3.2	—	
162	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	須恵器	杯蓋	(20.8)	(2.3)	—	
163	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	須恵器	杯蓋	(21.6)	1.3	—	
164	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	土師器	鍋	(31.5)	(11.8)	—	
165	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	土師器	杯	(16.6)	(3.5)	—	
166	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	土師器	杯	14.0	4.0	—	
167	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	土師器	甕	15.1	13.0	—	
168	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	土師器	甕	(19.0)	—	—	
169	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SK601	土師器	高杯	—	—	—	
170	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SK601	須恵器	甕	(18.3)	—	—	
171	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	須恵器	甕	—	—	—	(写真10)
172	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	製塩土器	—	—	—	—	(写真10)
173	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SE601	土師器	甕	—	—	—	内面同心円文
174	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	土師器	杯	13.9	2.9	—	「上載」
175	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	土師器	皿	(18.9)	(2.6)	—	
176	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	土師器	甕	8.5	5.5	—	ミニチュア
177	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	土師器	甕	(9.0)	—	—	ミニチュア
178	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	土師器	甕	(20.5)	—	—	韓式系土器
179	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	須恵器	杯蓋	(16.5)	(2.5)	—	
180	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	須恵器	杯蓋	(21.2)	(2.8)	—	
181	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	須恵器	甕	—	—	(11.2)	
182	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	須恵器	甕	—	—	—	
183	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	土師器	羽釜?	(24.4)	—	—	
184	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD602	土師器	羽釜	(23.1)	—	—	
185	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD604	製塩土器	—	—	—	—	(写真11)
186	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD604	製塩土器	—	—	—	—	(写真11)
187	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD605	土師器	—	—	—	—	ミニチュア
188	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SD605	土師器	杯	(16.7)	(2.8)	—	
189	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SD605	須恵器	杯蓋	(18.2)	3.3	—	
190	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SD605	須恵器	鉄鉢形鉢	(19.8)	—	—	
191	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SD605	土師器	鍋	(29.3)	—	—	
192	長原遺跡東南地区南半	Ⅰ	SD608	土師器	甕	9.2	6.3	—	ミニチュア
193	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SD610	土師器	皿	14.5	2.4	—	
194	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SD610	須恵器	杯身	12.8	(4.3)	—	
195	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ	SD610	埴輪	円筒	(24.3)	—	—	

番号	地 区	区	層位・遺構	質	器 形	口径 _(cm)	器高 _(cm)	底径 _(cm)	備 考
196	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	SD609	土師器	碗	(14.8)	—	—	
197	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	SD609	土師器	碗	(13.8)	(3.9)	—	
198	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	SD609	須恵器	杯身	(10.8)	—	—	
199	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	SD609	土師器	壺	(20.4)	—	—	
200	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	SD610	土師器	碗	(13.1)	(4.3)	—	
201	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ	SD610	須恵器	甕	(21.8)	—	—	
202	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SK401	黒色土器	碗	(17.6)	—	—	
203	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SA401(SP01)	土師器	皿	(14.1)	—	—	
204	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SA401(SP01)	黒色土器	碗	—	—	(7.0)	
205	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SA401(SP03)	土師器	碗	(16.2)	(4.5)	(6.1)	
206	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SA401(SP03)	土師器	碗	(12.8)	—	—	
207	長原遺跡東南地区南半	Ⅲ	SA401(SP02)	土師器	盤	(28.7)	—	—	
208	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	黒色土器	碗	(18.8)	—	—	
209	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	瓦器	碗	(15.1)	—	—	
210	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	瓦器	碗	(15.2)	—	—	
211	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	瓦器	碗	—	—	(5.6)	
212	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	瓦器	碗	—	—	(5.9)	
213	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	土師器	小皿	(7.9)	(1.9)	—	
214	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	土師器	小皿	(8.1)	(1.3)	—	
215	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	土師器	小皿	(7.4)	(1.2)	—	
216	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	土師器	台付皿	—	—	(5.0)	
217	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	土師器	碗	(10.3)	—	—	
218	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	瓦質土器	鉢	(29.5)	—	—	
219	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SK402	土師器	壺	(33.4)	—	—	
220	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SP05	瓦器	碗	(15.0)	5.8	5.8	
221	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SP06	製塩土器	—	(10.2)	—	—	
222	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SD402	白磁	碗	—	—	(4.8)	
223	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SB401(SP04)	土師器	皿	(15.2)	(2.0)	—	
224	長原遺跡東南地区南半	Ⅱ	SD401	土師器	碗	(15.6)	—	—	
225	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	青磁	碗	(13.1)	—	—	クシ描き
226	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	白磁	碗	(13.9)	—	—	
227	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	青磁	碗	(13.0)	—	—	
228	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	白磁	碗	(15.3)	—	—	
229	長原遺跡東南地区北半	V	長原2～3層	青磁	碗	—	—	(6.3)	
230	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	白磁	碗	(12.5)	3.7	5.1	
231	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	白磁	碗	—	—	(7.1)	
232	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	白磁	碗	—	—	(7.6)	
233	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	須恵器	蓋	(16.0)	(4.1)	—	
234	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	白磁	—	—	—	3.9	
235	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	緑釉陶器	碗	—	—	(6.0)	
236	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	長原2～3層	緑釉陶器	碗	—	—	(5.9)	
237	長原遺跡東南地区北半	Ⅵ	長原2～3層	石製品	丸觥	—	—	—	
238	長原遺跡東南地区北半	Ⅵ	長原2～3層	土師器	羽釜	(3.0)	(3.0)	—	ミニチュア
239	長原遺跡東南地区北半	I	長原4層	青磁	碗	(16.3)	—	—	
240	長原遺跡東南地区北半	I	長原4層	灰釉陶器	皿	(12.4)	2.1	—	
241	長原遺跡東南地区北半	V	長原4層	白磁	碗	(15.1)	—	—	
242	長原遺跡東南地区北半	Ⅳ	長原4層	灰釉陶器	盥	—	—	(8.2)	
243	長原遺跡東南地区北半	V	長原5層	青磁	碗	(12.3)	—	—	
244	長原遺跡東南地区北半	V	長原7層	須恵器	杯	9.5	3.8	—	

番号	地 区	区	層位・遺構	質	器 形	口径(mm)	器高(mm)	底径(mm)	備 考
245	長原遺跡東南地区北半	V	長原7層	土師器	甕	8.9	6.8	—	ミニチュア
246	長原遺跡東南地区北半	V	層位不明	土師器	鉢	13.2	10.1	—	
247	長原遺跡東南地区北半	V	長原4層	常滑?		—	—	—	(写真13)
248	長原遺跡東南地区北半	V	長原4層	備前		—	—	—	(写真13)
249	長原遺跡東南地区北半	V	長原6層	銀銭	延喜通宝	—	—	—	907年~(図版43)
250	長原遺跡東南地区北半	V	177号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
251	長原遺跡東南地区北半	V	177号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
252	長原遺跡東南地区北半	V	177号墳	埴輪	円筒	—	—	—	
253	長原遺跡東南地区北半	I	SD703	須恵器	杯蓋	(17.4)	(4.5)	—	
254	長原遺跡東南地区北半	I	SD703	須恵器	杯蓋	14.4	3.6	—	
255	長原遺跡東南地区北半	I	SD703	須恵器	杯身	12.9	(5.3)	—	
256	長原遺跡東南地区北半	I	SD703	須恵器	杯身	12.0	(4.2)	—	
257	長原遺跡東南地区北半	I	SD703	須恵器	杯身	11.6	(3.9)	—	
258	長原遺跡東南地区北半	I	SD703	須恵器	杯身	13.8	(4.3)	—	同心円文
259	長原遺跡東南地区北半	I	SD703	須恵器	杯身	13.8	(4.8)	—	同心円文
260	長原遺跡東南地区北半	I	SA701(SP03)	埴輪	円筒	—	—	—	
261	長原遺跡東南地区北半	II	SD703上層	須恵器	甕	(16.3)	—	—	
262	長原遺跡東南地区北半	II	SD703上層	須恵器	杯身	(13.9)	(3.3)	—	
263	長原遺跡東南地区北半	II	SD703上層	須恵器	杯蓋	(16.6)	(3.5)	—	
264	長原遺跡東南地区北半	II	SD703上層	須恵器	杯蓋	(13.5)	(3.7)	—	
265	長原遺跡東南地区北半	II	SD703上層	須恵器	杯身	(14.6)	(3.7)	—	
266	長原遺跡東南地区北半	II	SD703上層	須恵器	杯蓋	(14.0)	(4.4)	—	
267	長原遺跡東南地区北半	II	SD703上層	須恵器	杯身	(13.9)	(3.7)	—	
268	長原遺跡東南地区北半	II	SD703上層	須恵器	杯身	14.4	4.2	—	
269	長原遺跡東南地区北半	II	SD703上層	須恵器	高杯	—	—	(16.2)	
270	長原遺跡東南地区北半	II	SD703上層	埴輪	朝顔?	—	—	—	
271	長原遺跡東南地区北半	II	SD703下層	土師器	甕	—	—	—	
272	長原遺跡東南地区北半	II	SD703下層	土師器	甕	(23.5)	—	—	
273	長原遺跡東南地区北半	II	SD703下層	須恵器	杯身	(12.7)	(3.8)	—	
274	長原遺跡東南地区北半	II	SD703下層	須恵器	杯蓋	(15.1)	(4.5)	—	
275	長原遺跡東南地区北半	II	SD703下層	須恵器	杯蓋	(14.2)	(3.5)	—	
276	長原遺跡東南地区北半	II	SD703下層	弥生土器	甕	(18.0)	—	—	
277	長原遺跡東南地区北半	III	SD705	土師器	碗	(13.0)	(4.2)	—	
278	長原遺跡東南地区北半	III	SD705	須恵器	杯身	(13.2)	(4.3)	—	
279	長原遺跡東南地区北半	III	SD706	須恵器	杯蓋	(15.2)	(3.5)	—	
280	長原遺跡東南地区北半	III	SK701	須恵器	杯身	11.2	3.9	—	
281	長原遺跡東南地区北半	III	木田	須恵器	杯蓋	(13.9)	(3.9)	—	
282	長原遺跡東南地区北半	I	SD601	須恵器	杯蓋	(14.7)	(3.6)	—	
283	長原遺跡東南地区北半	I	SD601	土師器	甕	8.4	7.2	—	ミニチュア
284	長原遺跡東南地区北半	V	SD401	緑釉陶器	皿	—	—	6.6	
285	長原遺跡東南地区北半	V	SD401	灰釉陶器	甕	—	—	(10.8)	
286	長原遺跡東南地区北半	V	SD403	須恵器	鉄鉢形鉢	(30.2)	—	—	
287	長原遺跡東南地区北半	V	SD404	土師器	甕	(22.9)	—	—	
288	長原遺跡東南地区北半	V	SD404	須恵器	杯身	—	—	(8.4)	
289	長原遺跡東南地区北半	V	SK401	土師器	甕	(18.2)	(15.0)	—	
290	長原遺跡東南地区北半	V	SD405	土師器	小皿	(11.1)	(1.7)	—	
291	長原遺跡東南地区北半	V	SD405	黒色土器	碗	—	—	(6.7)	
292	長原遺跡東南地区北半	V	SD405	黒色土器	碗	—	—	(10.3)	
293	長原遺跡東南地区北半	V	SD406	土師器	小皿	8.2	1.4	—	

番号	地 区	区	層位・造構	質	器 形	口径 _(cm)	器高 _(cm)	底径 _(cm)	備 考
294	長原遺跡東南地区北半	V	SD406	須恵器	壺	—	—	(11.1)	
295	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	黑色土器	碗	(16.1)	—	—	
296	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	土師器	碗	(13.7)	—	—	
297	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	土師器	碗	(17.1)	—	—	
298	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	黑色土器	碗	—	—	6.0	
299	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	土師器	碗	(10.2)	—	—	
300	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	土師器	碗	(12.0)	3.7	(5.3)	
301	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	土師器	甕	(16.2)	—	—	
302	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	土師器	甕	(17.9)	—	—	
303	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	土師器	高台付皿	—	—	(23.6)	
304	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	土師器	羽釜	—	—	—	
305	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	白磁	碗	(14.4)	—	—	
306	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	須恵器	杯蓋	(20.5)	—	—	
307	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	須恵器	杯蓋	(20.0)	—	—	
308	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	須恵器	壺	(5.7)	—	—	
309	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	須恵器	甕	(20.1)	—	—	
310	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	須恵器	壺	(13.2)	—	—	
311	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	須恵器	壺	—	—	(8.1)	
312	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	須恵器	把手	—	—	—	
313	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	須恵器	大甕	(48.0)	—	—	
314	長原遺跡東南地区北半	VI	SD402	須恵器	大甕	(47.4)	—	—	
315	長原遺跡東南地区北半	I	SK402	瓦器	碗	(14.0)	(5.8)	(5.6)	
316	長原遺跡東南地区北半	I	SK402	瓦器	碗	(15.4)	—	—	
317	長原遺跡東南地区北半	I	SK402	瓦質	鉢	(21.1)	(7.5)	(6.6)	
318	長原遺跡東南地区北半	I	SK402	瓦器	碗	(14.0)	—	—	
319	長原遺跡東南地区北半	I	SK402	瓦器	碗	(13.5)	—	—	
320	長原遺跡東南地区北半	I	SK402	土師器	台付皿	—	—	(9.9)	
321	長原遺跡東南地区北半	I	SK402	土師器	高杯	—	—	—	
322	長原遺跡東南地区北半	I	SK402	陶器	碗	—	—	(5.4)	
323	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	土師器	小皿	(9.2)	(1.7)	—	
324	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	土師器	小皿	9.3	1.6	—	
325	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	土師器	皿	(13.9)	(3.1)	—	
326	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	土師器	皿	(12.2)	(2.4)	—	
327	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	土師器	皿	13.8	2.5	—	
328	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	瓦器	碗	(16.1)	—	—	
329	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	瓦器	碗	(14.4)	(4.8)	(5.0)	
330	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	瓦器	碗	(14.6)	4.3	(5.0)	
331	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	瓦器	碗	—	—	5.1	
332	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	瓦器	碗	—	—	(4.8)	
333	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	瓦	—	—	—	—	須恵質
334	長原遺跡東南地区北半	I	SK403	石製品	砥石	—	—	—	
335	長原遺跡東南地区北半	I	SK404	瓦器	小皿	(7.4)	(1.5)	—	
336	長原遺跡東南地区北半	I	SK404	瓦器	碗	—	—	(5.4)	
337	長原遺跡東南地区北半	I	SK404	土師器	碗	(13.6)	—	—	
338	長原遺跡東南地区北半	I	SK404	土師器	羽釜	(27.5)	—	—	
339	長原遺跡東南地区北半	I	SD408	土師器	羽釜	(33.6)	—	—	
340	長原遺跡東南地区北半	I	SD408	土師器	小皿	8.2	1.5	—	
341	長原遺跡東南地区北半	I	SD408	土師器	小皿	8.3	1.5	—	
342	長原遺跡東南地区北半	I	SD408	土師器	皿	12.8	2.4	—	

番号	地 区	区	層位・遺構	質	器 形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備 考
343	長原遺跡東南地区北半	I	SD408	瓦器	椀	(14.0)	—	—	
344	長原遺跡東南地区北半	I	SD408	瓦器	椀	14.0	3.6	3.4	
345	長原遺跡東南地区北半	I	SD408	瓦器	椀	14.7	4.3	4.0	
346	長原遺跡東南地区北半	I	SD408	瓦器	椀	14.4	4.1	4.0	
347	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	土師器	皿	(15.9)	(2.6)	—	
348	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	土師器	皿	(15.6)	(2.7)	—	
349	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	土師器	皿	(12.3)	(2.7)	—	
350	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	土師器	小皿	(9.6)	(2.0)	—	
351	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	土師器	小皿	9.0	1.4	—	
352	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	瓦器	椀	(16.0)	—	—	
353	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	土師器	椀	(16.7)	—	—	
354	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	瓦器	椀	(14.0)	—	—	
355	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	瓦器	椀	(13.6)	3.6	3.6	
356	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	瓦器	小皿	(8.9)	1.5	—	
357	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	瓦質	羽釜	(16.6)	—	—	
358	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	土師器	羽釜	(26.0)	—	—	
359	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	白磁	鉢	(14.6)	—	—	
360	長原遺跡東南地区北半	I	SD409	須恵質	鉢	(31.4)	—	—	
361	長原遺跡東南地区北半	I	SD407	須恵器	鉢	(35.2)	—	—	
362	長原遺跡東南地区北半	I	SP401	瓦器	小椀	(6.9)	2.7	(3.6)	
363	長原遺跡東南地区北半	I	SP402	瓦器	椀	(15.2)	5.9	(5.0)	
364	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	SK405	瓦器	椀	(13.7)	4.3	(4.0)	
365	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	SK405	瓦器	椀	14.5	4.7	4.7	
366	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	SK405	瓦器	椀	14.7	4.8	3.0	
367	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	SP403	瓦器	椀	(14.1)	—	—	
368	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	SK406	土師器	小皿	(9.5)	1.6	—	
369	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	SK406	土師器	小皿	(8.6)	(1.5)	—	
370	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	SK406	土師器	皿	(16.4)	(2.0)	—	
371	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	SK408	土師器	小皿	(8.2)	1.1	—	
372	長原遺跡東南地区北半	Ⅲ	SK407	土師器	皿	(16.6)	(2.5)	—	
373	長原遺跡東南地区北半	Ⅳ	SK409	土師器	椀	(15.0)	—	—	
374	長原遺跡東南地区北半	Ⅳ	SK410	土師器	小皿	8.4	1.6	—	
375	長原遺跡東南地区北半	Ⅳ	SK410	土師器	小皿	8.4	1.6	—	
376	長原遺跡東南地区北半	Ⅳ	t'71	灰輪陶器	壺	—	—	(18.2)	

別表2 報告した古墳一覧

古墳名	地 区	区	墳形	規模	埴輪	土 器	時 期
171号墳	長原遺跡東南地区南半	I区	方墳	?	円筒	須恵器	5世紀後半
172号墳	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ区	方墳	5.0m×?		須恵器	5世紀後半
173号墳	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ区	方墳	8.5m×?		須恵器	5世紀後半
175号墳	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ区	?	?	円筒		5世紀後半
175号墳	長原遺跡東南地区南半	Ⅳ区	方墳	8.5m×8.0m		須恵器 土師器	5世紀後半
176号墳	長原遺跡東南地区南半	Ⅵ区	方墳	?	円筒(埴付) 衣蓋・盾・家		5世紀前半
177号墳	長原遺跡東南地区北半	V区	方墳	?	円筒?		5世紀後半

引用・参考文献

- 伊藤純1989,「長原遺跡出土の滑石製『紡錘車』」:『葦火』18
- 伊藤純1994,「縄文埴輪の製作技法」:『古代文化』46-6
- 植野浩三1982,「須恵器の製作技術」:『文化財学報』I 奈良大学文学部
- 大阪市文化財協会 1982,『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 1983,『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 1990,『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 1991,『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 1992,『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 大阪文化財センター1978,『長原』
- 木原克司1989,「長原南口古墳の調査」:『葦火』23
- 京嶋寛・久保和士1993,「長原一ヶ塚古墳の調査」:『葦火』46
- 黒田慶一1988,「長原遺跡出土の『上総』墨書土器」:『葦火』12
- 後藤信義1994,「穀牛馬祭祀考」:『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 櫻井久之1991,「長原40号墳の形象埴輪」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 佐藤隆1989,「5世紀の建物発掘-長原遺跡の調査-」:『葦火』22
- 高井健司1986,「長原七ノ坪古墳とその馬具」:『葦火』創刊号
- 高井健司1990,「黒斑をもつ円筒埴輪の一例-長原40号墳出土の資料-」:『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 趙哲済1994,「長原遺跡における旧石器調査の現状-特に層序と古地理について-」:『大阪市文化財論集』大阪市文化財協会
- 長原遺跡調査会1978,『長原遺跡発掘調査報告』(大阪市文化財協会1982年改訂)
- 林田重幸1974,「日本在来馬の源流」:『日本古代文化の探究 馬』社会思想社
- 栗田哲郎1986,「畿内の初期瓦生産と人工の動向」:『史林』69-3
- 松井章1988,「西方A遺跡出土の動物遺存体の概要」:『下寺尾西方A遺跡』茅ヶ崎市教育委員会
- 松尾信裕1983,「長原式土器深鉢A類にみる器形の変化」:『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 南秀雄1987,「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」:『葦火』8
- 南秀雄1992,「難波宮下層遺跡の土器と集落」:『難波宮址の研究』第九 大阪市文化財協会
- 村山始1992,「No64 中野遺跡」:『古墳時代の檻を考える』第32回埋蔵文化財研究会
- Driesch, A. von den. 1976, 「A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites.」:『Peabody Museum Bulletin』I Harvard: Peabody Museum.
- PETER C. Goody 1983, 「Horse Anatomy」 J.A. Allen & Company Limited, pp.36-37

あ　と　が　き

本書で報告した1987年度の発掘調査からすでに6年が経過してしまい、発掘当時の生々とした感触は失われつつある。もはやこの時間の差はいかんともしがたいが、発掘の成果を共有の財産とするという側面では、それなりの責任の一端を果し得たと思う。

現在の発掘調査のほとんどは、歴史に対する考古学的かつ自主的な目的をもって調査地を選定するのではなく、現代の差し迫った状況の下で、調査地・調査条件などが与えられるのである。当協会が実施する発掘調査はすべてそうである。したがって、ひとつひとつの調査は個々ばらばらで、公開する資料も個別分散的になりがちである。個々の事実を重ね合わせ、事実と事実の間を埋め、歴史を叙述していくことは発掘調査を担当する私たちの任務であると共に、本書を活用してくださる方々の役目でもある。

今後とも、私共の調査・研究に対し、忌憚のない御批正を賜わらんことを願ってやまない。

(永島暉臣愼)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

T	TK23 型式	25	捏鉢	20,106
	TK47 型式	25	さ 構	9,16,17,19,20,21,22,25,64,66, 86,103,106,107,111
あ	朝顔形埴輪	43,51,85	サヌカイト	33
	当て具	35,85	し 自然軸	19,35,44,73
	暗文	19,52,55,57,58,86	刺突文	21
い	家形埴輪	51	シボリメ	20
	生駒西麓産	19,21,22,38,52,85	周溝	43,44,45,46,47,48,51,78,86
	井戸	52,54,55,56,103,106,113	珠光青磁	71
う	ウマの骨	74,78	縄唐文	35
え	延喜通宝	74	す 鍾	35
	縁束	12,15	水田	23,25,28,32,40,57,68,70,77, 79,80,82,89,90,91,92,94,107, 109,110,111
	円筒埴輪	51,86	水路	39,40,41,51,57,68,69,109,110
お	母屋	12,14,15	スカシ孔	43,51,78
か	園花	73	せ 製造土器	56,58,64
	開析谷	32,38,40,59,68,109,110	青磁	33,35,71,73,104
	灰釉陶器	35,73,98,105	線刻	47,62,71,105
	瓦器	28,57,64,66,67,68,94,95,99, 103,104,105,106	そ 総柱	14
	重ね焼	35	た 台付	67,99,104
	型押し	35	高杯	19,20,43,56,85,104
	竈	19,21,22	タタキ具	57
	官衙	3,4,22	タタキメ	22,45
	韓式系土器	57	盾形埴輪	51
き	衣蓋形埴輪	51	ち 直弧文	47
く	クシ描き文	35	沈線	19,21,98
け	形象埴輪	43,110	つ 堤状の盛土	40,90,107,109
	畦畔	70,77,89,92,94	坪境	62,94,107
	圈線	35,67	て 手捏ね	58
こ	黒色土器	28,35,64,66,67,98,99	鉄滓	52
	黒斑	19,43,51,78,85,110		
	甌	25,85		

鉄鉢形	58,99	踏込み	92
と 砥石	105	へ ヘラ切	14,19,21
同心円文	56,57,85	ヘラケズリ	19,21,48,56,58,86,113,119
床束	14	ヘラミガキ	58,104
常滑焼	73	ほ 紡錘車	47
な 長原式土器	38,109	方墳	43,45,47,51,78
鍋	21,55,58	墨書	57
ね 粘土紐	35,39,48,56,106,120	ま 曲物	54,55
は 羽釜	19,21,52,57,71,99,105,106	丸柄	71
白磁	35,67,71,73,99,106	み 水口	89
ハケメ	19,23,25,43,47,48,52,56,57, 74,78,113,119,120	ミニチュア	58,71
波状文	46	や 焼き台	45
皿	45	弥生土器	35,39
ひ 非河内産	38,39,109	ゆ 軸禿ぎ	33,35,71
庇	12,15,19,25	ユビオサエ	52,61,113,119
備前焼	73	よ ヨコナデ	21,23,57,58
鱗付の円筒埴輪	51,110,111	り 緑釉陶器	35,71,98
ふ フイゴの羽口	35,52	れ 蓮花文	71
伏せ焼	106	蓮弁	35,71
		ろ ロクロナデ	20

〈遺跡名〉

1 171号墳	41,69	4 40号墳	110
172号墳	43,45,47,61,68	い 一ヶ塚古墳	110
173号墳	45,47,68	し セノ坪古墳	28,111
174号墳	6,46,69	つ 塚ノ本古墳	8,110
175号墳	6,47,68	津堂城山古墳	111
176号墳	51,68,110	み 南口古墳	111
177号墳	78,79		

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume VII

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1987

March 1994

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features in this text:

SA : Palisade or Fence	SB : Building	SD : Ditch	SE : Well
SK : Pit	SP : Posthole		

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Chapter I Excavation of Nagahara and Uriwari Sites.....	1
1) The outline of excavations in 1987.....	1
1) Excavations	1
2) Procedure of publishing of this report.....	2
2) Outline and progress of research work.....	3
1) South-eastern sector of the Uriwari Site.....	3
2) Central sector of the Nagahara site.....	4
3) South-eastern sector of the Nagahara Site, Southern Portion.....	5
4) South-eastern sector of the Nagahara Site, Northern Portion.....	7
Chapter II Results of research.....	9
1) South-eastern sector of the Uriwari Site	9
1) Introduction.....	9
2) Stratigraphy.....	9
3) Features and finds of the Asuka Period.....	12
i) Buildings	12
ii) Fence.....	16
iii) Pits.....	17
iv) Ditches.....	20
4) Conclusion.....	22
2) Central sector of the Nagahara Site	23
1) Stratigraphy.....	23
2) Features and finds of the Kofun (tumulus) Period.....	25
i) Building.....	25
ii) Ditches.....	26
iii) Pits.....	27
3) Features from the Asuka and Nara Periods.....	28
i) Paddy fields.....	28
4) Features and finds from the Heian and Kamakura Periods.....	28
i) Pit.....	28
ii) Ditch.....	28
5) Conclusion.....	28
3) South-eastern sector of the Nagahara Site, Southern Portion.....	29
1) Stratigraphy.....	29
2) Finds from each stratum.....	33

3) Features and finds from the Final Jomon to Middle Yayoi Periods.....	38
i) Gorge.....	38
ii) Irrigation ditches.....	39
iii) Paddy field.....	40
iv) Unknown features.....	41
4) Features and finds of the Kofun Period.....	41
i) Kofuns.....	41
ii) Ditches.....	51
5) Features and finds from the Nara Periods.....	52
Nagahara Stratum 6B	
i) Buildings.....	52
ii) Ditch.....	52
Nagahara Stratum 6A	
i) Building.....	54
ii) Well.....	54
iii) Pit.....	56
iv) Ditches.....	57
6) Features and finds from the Heian and Kamakura Periods.....	63
i) Building.....	63
ii) Fences.....	64
iii) Pits.....	66
iv) Ditches.....	67
v) Others.....	68
7) Conclusion.....	68
4) South-eastern sector of the Nagahara Site, Northern Portion.....	70
1) Stratigraphy.....	70
2) Artefacts from each stratum.....	71
3) Horse bones from Nagahara stratum 6B.....	74
4) Features and finds of the Kofun Period.....	78
i) Kofun.....	78
ii) Ditches.....	79
iii) Fence.....	86
iv) Pit.....	86
5) Features and finds from the Asuka to Nara Period.....	89
Nagahara Stratum 7	
i) Paddy field.....	89
Nagahara Stratum 6	
i) Ditches.....	90
ii) Paddy field.....	92
6) Features and finds of the Heian Period.....	94
i) Building.....	94
ii) Pit.....	95

iii) Ditches.....	98
7) Features and artefacts of the Kamakura Period.....	99
i) Building.....	100
ii) Fences.....	103
iii) Wells.....	103
iv) Pits.....	104
v) Ditches.....	106
8) Conclusion.....	107
Chapter III Conclusion.....	109
1) Consideration on clay constituent of Nagahara-type pottery.....	109
2) Irrigation ditches and paddy fields during the early and middle Yayoi Periods.....	109
3) The beginnings, and dramatic changes, of the Nagahara Tomb cluster..	110
Appendix	
Artefacts from SE01 in the south-eastern sector of the Uriwari Site (excavated in 1984).....	113
Tables.....	123
References.....	132
Postscript	
Index	
English Summary	

ENGLISH SUMMARY

1) Introduction: development and excavation

This report details the achievements of the excavations carried out at the Nagahara site, situated in the south-eastern part of Osaka city, Osaka prefecture, Japan, in the fiscal year of 1987 (beginning April 1st).

The Nagayoshi-Uriwari area, in which the Nagahara and adjoining Uriwari site are situated, is one of the few remaining locations within Osaka city in which farmland can still be found. Improvement of the main road and subway from the City to this area has been followed by rapid residential growth. As a result of this growth, there has been an increasing demand for water and sewerage services. The Nagahara and Uriwari sites lie within the land being rezoned to accommodate the development of these services.

Though emergency research prior to the rezoning project has been conducted since 1981, many other excavations at these sites have been carried out, almost continuously, over the last twenty years, prior to public or private developments in the area. In particular, at the Nagahara site, three hundred excavations have been carried out so far and the total excavated area amounts to 140,000 square metres, covering 4% of the whole site. This large accumulation of fieldwork has clarified that both the Nagahara and Uriwari sites are large complex sites following a slope down to a plain, in which discoveries belonging to between the Upper Palaeolithic and the Early Modern eras, have yielded wide ranging information about settlements and cemeteries in each period.

The stratum of the Nagahara site for each period is preserved in good condition, and research works had been carried out on each stratum, though all excavation areas were characteristically long and thin as they lie beneath land designated for roads. The strata have been identified according to the stratigraphical standard of the Nagahara site (table 1).

This excavation report is the seventh volume in the series and covers eighteen excavations. The total excavated area extends for 6235 square metres. The dates of discoveries fall between the Upper Palaeolithic and the medieval periods (spanning the 12th to 16th C. AD). The results of research are summarized as follows:

2) Results of the research

The Uriwari site has long been known as a Yayoi period (BC 3 - AD 3 C.) settlement. Recent excavations at the site, however, have uncovered a group of possible public-official buildings, which might constitute one of the political centre of the area, of the Asuka period (AD 7 C.).

The Nagahara site has yielded a variety of archaeological information. The stratigraphical and typological study of lithic remains of the Upper Palaeolithic Period

has come to clarify tool manufacturing techniques and land use in the area. The detailed study of Jomon pottery clarified that, during the transition from the hunter-gatherer economy to the agricultural one, the final Jomon to the early Yayoi Periods (BC 4 and 3 C.), a newly arriving Yayoi farming settlement had contemporarily existed with, and later prevailed over, a traditional Jomon one. The Nagahara Tomb Cluster of the Kofun Period (AD 4 - 6 C.), where more than two-hundred square burial mounds, usually some 10 metres in length, have already been discovered, is considered to be a vast graveyard for minor officials, providing a key to understanding the socio-political system of the period, in which the difference in shape and scale of the burial mounds represents the ranking order of the buried. In the Asuka and Nara Periods (AD 6 to 7 C.), the land had clearly been divided into two parts, settlement as residential area and paddy fields as farming area.

Discoveries at the Uriwari Site

This year research identified the east end of a possible public-official building of the Asuka Period (AD 7 C.) (fig. 17). Although the core of this centre had been uncovered by previous excavations, the extent of the buildings has now been clarified (fig. 8). The east-west oriented fence surrounding the central buildings is approximately 35 metres in length, and no evidence of human occupation outside this area, during that period, has been found. This suggests that the central cluster of buildings was regarded as a political monument alienated from the usual life of the then general public.

Discoveries at the Nagahara Site

The Nagahara-type pottery, the latest of the Jomon Period, was discovered along the slope of a small natural gorge (figs. 37 - 39, plates 30 - 32). The clay constituent of the pottery was analyzed and the ratio of the local and extraneous clay was examined. As a result, 85% was identified as local and 15% extraneous. This fact possibly describes the difference of potters' group and may illustrate the interaction of traditional hunting-gatherers.

Two middle-Yayoi (BC 1 - AD 1 C.) ditches were uncovered. These run along a relatively high area of the site, and supplied water to the low-lying paddy fields (fig. 114, plates 6 and 7).

Seven kofuns were found (fig. 35 - 81). From the Kofun No. 176, one of the earliest kofun amongst the Nagahara Tomb Cluster, characteristic hiretsuki-haniwas (cylindrical haniwa with projectiles on both sides), which were highly distributed around Yamato (former central Nara) region, the then political centre, were discovered. The discovery of hiretsuki-haniwa indicates a close relationship between the Nagahara area and the political centre of the period.

There is evidence of dramatic change in land use in the Nagahara area around the early sixth century. Some parts of the village were leveled to make way for paddy fields. Later, two key-hole shaped mounds suddenly appear, after which kofun con-

struction apparently ceases. This change should be taken as a direct or indirect response to a change in the central political order, rather than a spontaneous movement within the Nagahara area.

During the Asuka and Nara Periods (AD 7 - 8 C.), paddy fields were dominant over the area.

During the Heian and Kamakura Periods (AD 9 - 13 C.), villages were constructed, but in different locations within the area (fig. 98).

In conclusion, this year's research has provided us with much information on the description of the past in the Nagahara area; from the end of a hunter-gatherer society through to an early farming society and the development of a class society and later a State. Kofun appear in the area during the period of the class society and the area is controlled by an outside authority from the State stage onward.

Further Reading

Aikens, C. M. and Higuchi T.

1982 Prehistory of Japan. Academic Press, New York.

Pearson, R. J., Barnes, G. L. and Hutterer, K. L. Editors

1986 Windows on the Japanese Past; Studies in Archaeology and Prehistory. Center for Japanese Studies, the University of Michigan, Ann Arbor.

Tsuboi K., Editor

1987 Recent Archaeological Discoveries in Japan. UNESCO, Paris and Centre for East Asian Culture Studies, Tokyo.

1992 Archaeological studies of Japan. Acta Asiatica 63. The Institute of Eastern Culture.

Tsude H.

1988 Land exploitation and stratification of society: a case study in ancient Japan, Studies in Japanese Language and Culture, Joint Research Report No. 4, pp.107-30. Faculty of Letters, Osaka University, Japan

1990 Chiefly lineages in Kofun-period Japan: political relations between centre and region. Antiquity 64, pp. 923-31.

The Osaka City Cultural Properties Association

1989-1993 Archaeological Reports of Nagahara and Uriwari sites Vols. I-V, Osaka. (In Japanese except for English summary in Vol. IV)

The Osaka City Cultural Properties Association

1978-1992 Archaeological Reports of Nagahara sites Vols. I-V, Osaka. (In Japanese)

報告書抄録

ふりがな	ながはら・うりわりいせきはつつちようさほうこく7							
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅶ							
副書名	1987年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	永島曜臣・伊藤純・黒田慶一・内田好昭							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540 大阪府大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-943-6833							
発行年月日	西暦 1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ながはらいせき 長原遺跡	ながはらいせきのく 大阪市平野区 長吉長原東3丁目 ↓ ながはらいせきのく 長吉川辺3丁目	27126	—	34° 35° 40°	135° 34° 45°	1987.5.25 / 1988.3.31	5,105㎡	土地区画整理事業 (長吉瓜破地区)施 行に伴う調査
うりわりいせき 瓜破遺跡	うりわりいせきのく 大阪市平野区 瓜破東8丁目	27126	—	34° 35° 45°	135° 33° 55°	1987.11.24 / 1988.3.31	1,130㎡	土地区画整理事業 (長吉瓜破地区)施 行に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
長原遺跡	その他	縄文時代晩期		開析谷		長原式土器		
	田畑	弥生時代前期～中期		水田 水路				
	墓	古墳時代		古墳(7基)		円筒埴輪・埴付埴輪 須恵器・土師器		
	田畑	飛鳥～奈良時代		水田				
	集落	奈良時代		掘立柱建物 井戸		土師器・須恵器・製塩土器		
		平安時代		掘立柱建物 溝		土師器・黒色土器		
		鎌倉時代		掘立柱建物 溝		土師器・瓦器		
瓜破遺跡	官衙的建物	飛鳥時代		掘立柱建物 溝 土壇		須恵器・土師器		

圖 版



I区南半（南から）



I 区SB01 (北から)



I 区SB02 (北から)



I 区南半 (北から)



Ⅱ区SD04



Ⅱ区SD03・SB03（西から）



長原6 層水田畦畔（西から）



長原7 層水田畦畔（西から）



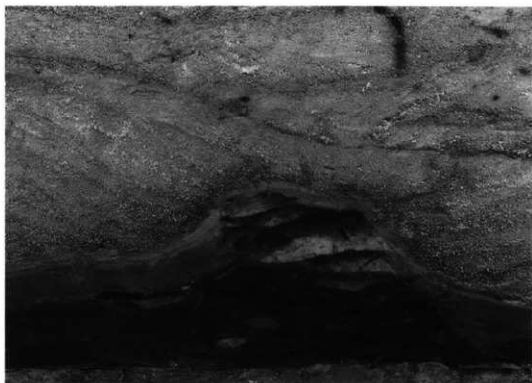
地山上面の遺構（西から）



地山上面の遺構（東から）



開析谷と長原9層水田畦畔（南から）



水田畦畔東壁断面



Ⅳ区SD802（南から）



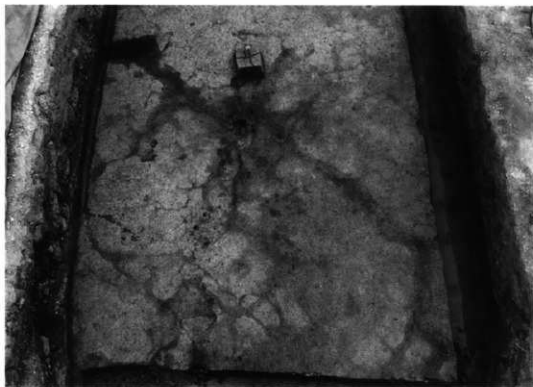
Ⅳ区SD802（東から）



V区SD802北壁断面



V区SD801・802（西から）



I区不明遺構検出状態（南から）



I区不明遺構（南から）



墳丘部分（東から）



全景（北から）

全景（西から）



Ⅶ区SD701・702（西から）



検出状態（南から）



全景（西から）



東側周溝土器(133・134)出土状態



全景(西から)



全景（西から）



東側周溝地輪出土状態（東から）



Ⅲ区SB601（北から）



Ⅲ区SB602（南から）



Ⅲ区SB603・SD603～606（北から）



検出状態



断面（南から）



IV区SD610北壁断面



IV区SD610 (東から)



Ⅲ区SA401（南から）



SB401・SK402（北から）



Ⅱ区SB401（南から）



Ⅱ区SD402（西から）



I 区SD703 (南西から)



I 区SD703 (北から)



I 区SA701 (南から)



Ⅱ区SD703（東から）



Ⅱ区SD703（西から）



Ⅱ区SD703（南から）



IV区畦畔（西から）



IV区畦畔（東から）



V区畦畔（西から）



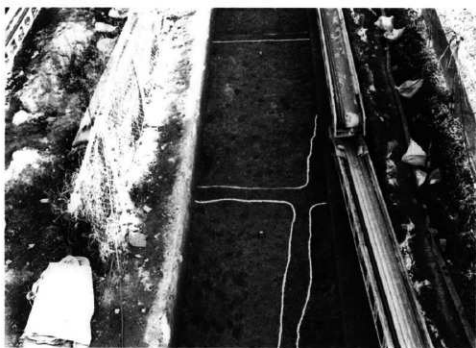
VI区畦畔（南から）



I区SD601堤状盛土
東壁断面



I区畦畔（南から）



Ⅱ区畦畔（西から）



Ⅳ区畦畔（東から）



V区長原6層中



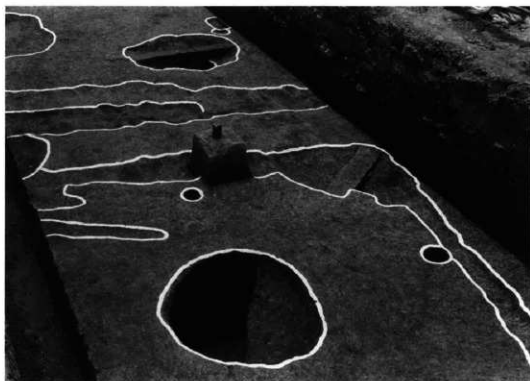
V区長原6層中



I 区SB402・403・SD407 (北から)



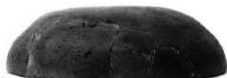
I 区SE401・SD410 (南から)



I 区SE401・SD410 (北から)



1



3



5



4



6



7



8



9



12



13



10



11



14



15



17



18



24



26



22



23



26



27



19



16



20



25



29



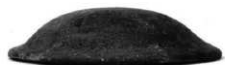
30



31



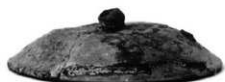
35



34



44



43



38



39



41



42



52



54



57



56



79



68



83



81



84



85

6層: 52 SK401: 54 SB701(SP03): 56 SB701(SP01): 57
4層: 68 7層(SD701): 79 9層: 81-83~85



87



88



92



90



93



95



91



96



98



106



108



107



111



110



94



97



100



99



101



102



103



104



105



112



113



114



115



116



118



119



120



126



122



124



121



125



129



128

127



130



131



135



1



132



133



134



137

136



139



138



140



143



145



146



147



150



151



149



153



152



154



156



157



155



158



159



160



164



162



163



161



165



170



166



167



169



173



168



183



178



175



174



179

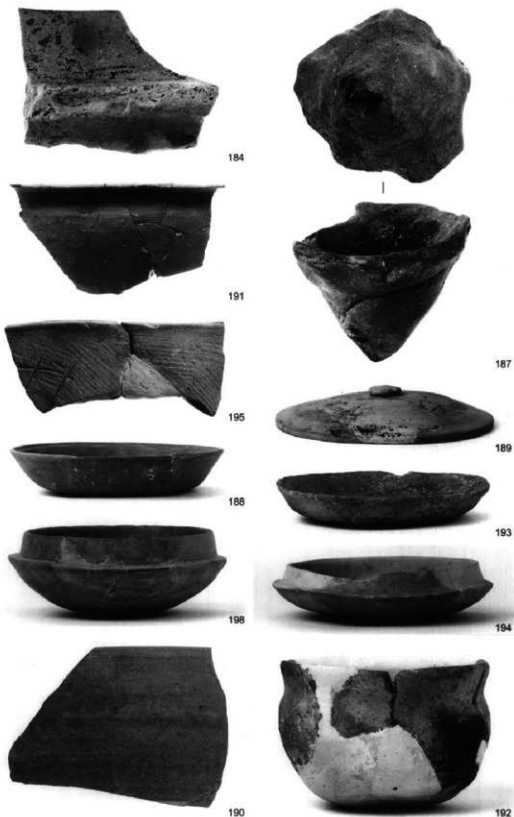


180



176





SD602: 184 SD605: 187~191 SD608: 192 SD610: 193~195 SD609: 198



203



205



213



214



215



223



217



219



218



221



216



222



210



220



230



233



237



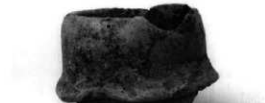
240



249



244



238



245



246



250



251



253



252



254



255



256



257



258



259



262



263



265



267



264



266



270



268



271



273



274



275



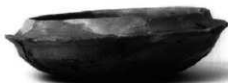
277



278



279



280



281



283



282



284



285



289



286



293



294



299



296



301



300



305



306



311



312



310



315



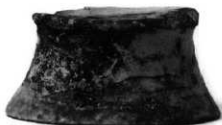
317



321



322



320



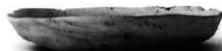
323



324



326



327



325



330



329



338



339



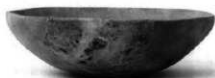
336



333



335



337



340



341

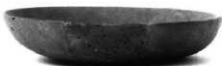


334





342



347



348



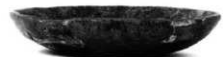
349



350



351



356



368



369



370



364



365



344



345



346



355



358



359



357



361



371



372



374



375



366



367



362



363



378

SD409:357~359 SD407:361 SP401:362 SP402:363 SK405:366
SP403:367 SK408:371 SK407:372 SK410:374・375 ビット:376



1



1. 下顎骨/ + r

2 : 5



2. 下顎骨/

1 : 2



3. 焼骨 r

1 : 1



4. M/



5. 下顎歯 r



6. P¹ or P²/

1 : 2



1



2



3



4



11



12



5



6



8



9



7



10

大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅶ

ISBN 4-900687-09-X

1994年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL 06-943-6833 FAX 06-920-2272)

印刷・製本 岡村印刷工業株式会社

〒558 大阪市住吉区長居東3-4-17

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume VII

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1987

March 1994

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume VII

**A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1987**

March 1994

Osaka City Cultural Properties Association